

群馬県歴史の道調査報告書第十七集

歴史の道調査報告書

鎌倉街道

群馬県教育委員会

鎌倉街道

序

群馬県は古代より、常にわが国の主要幹線道を要し、交通史上重要な役割を果たしてまいりました。

つまり、古代における東山道、中世の鎌倉街道、近世の中山道を始めとする諸街道であり、これらは、群馬県に新しい文化をもたらせ、あるいは県内の文化を他国へも波及させ、群馬県に各時代の文化の華をさかせ、今日の文化県群馬の基礎を築きました。

これら群馬の歴史の道調査は、昭和五十三年度から文化庁より国庫補助を得て五か年計画で実施し、すでに十三街道の調査を完了し、その成果を報告書にまとめてまいりました。本年度は調査の最終年度として、古代・中世の幹線路である東山道・鎌倉街道、そして、近世の湯治・参詣道としての吾妻の諸街道・日光への脇往還の四街道の調査を実施しました。

各街道の調査は、種々の困難性が伴いましたが、調査員の方々の献身的な御努力により、本年度の調査も完了し、ここにその成果を集約した本報告書を刊行することができました。

この報告書が県民のみならず広く読まれ親しまれるとともに、今後の歴史の道の保存整備資料として、各地で活用していただきたいと思っております。

末筆ではありますが、御多忙の中を調査していただきました調査員の方々、また、調査に御協力いただいた方々、並びに関係市町村教育委員会に心より感謝申し上げます。

昭和五十八年三月三十日

群馬県教育委員会教育長 横 山 巖

三名川北
保美——三本木（旧街道）



七興山古墳
（国指定史跡）



長根旧道（神社裏）

白石中央部 吉良上野介館跡



一ノ宮 賈前神社 本殿

富岡市南蛇井
最興寺 (曹洞宗)



山名町 山の上の地蔵、
道祖神、庚申など



豊岡 常安寺前の鎌倉道



板鼻 板鼻塚に添った
本街道、鎌倉道



富士巖神社
庚申道標
(小田原街道)

北海道瀬
加茂神社前の
庚申道標
(岩船道)



尾曳稲荷神社
(佐野道)



福島付近の旧道
(足利道)

目次

序 群馬県教育委員会 教育長 横山 巖

はじめに

歴史の道調査実施要項

I 総論

II 道の推定

一、道の推定

(一) 上道本道

1	本郷から鍋川瀧三ツ木へ	11
2	保美から本動堂へ	12
3	藤岡市から吉井町へ	13
4	吉井町から甘楽町へ	14
5	甘楽町から富岡市へ	14
6	富岡市上高瀬から南蛇井へ	15
7	下仁田町から南牧村へ	16
8	鍋川の渡しから山本宿へ	17
9	山本宿から鳥川の渡しへ	18
10	鳥川の渡しから金井宿へ	19

(二)

(1) 館林・邑楽・太田

11	金井宿から豊岡へ	19
12	豊岡から板鼻宿へ	20
	上道からの支道	21
	館林・邑楽・太田	21
	1 岩舟道	21
	2 小田原街道	21
	3 佐野道	22
	4 足利道	23
	5 古戸道	24
	(2) 新田・佐波・伊勢崎・前橋	24
	1 下堀口から新田町へ	24
	2 大館から新田町へ	25
	3 徳川から境町へ	25
	4 角瀬から上福島・下之宮へ	26
	5 宇賀から板井へ	27
	(3) 渋川・吉岡	27
	1 吉岡村から渋川市街地へ	27
	2 渋川市街地から南牧村へ	28

二、沿線地図……………30

III 鎌倉街道の現状と文化財

一、本道……………45

1 本郷から鍋川湖三ツ木へ……………45

2 保美から本勲堂へ……………48

3 藤岡市から吉井町へ……………51

4 吉井町から甘栗町へ……………53

5 甘栗町から富岡市へ……………54

6 富岡市から南蛇井へ……………56

7 下仁田町から南牧村へ……………57

8 鍋川の渡しから山本宿へ……………60

9 山本宿から烏川の渡しへ……………61

10 烏川の渡しから金井宿へ……………64

11 金井宿から豊岡へ……………67

12 豊岡から板鼻宿へ……………69

二、支道……………73

(1) 館林・邑楽・太田……………73

1 岩舟道……………73

2 小田原街道……………75

3 佐野道……………77

4 足利道……………79

(2) 新田・佐波・伊勢崎・前橋……………82

1 下堀口から新田町へ……………84

2 大館から新田町へ……………86

3 徳川から境町へ……………87

4 角淵から上福島・下之宮へ……………90

5 字貫から板井へ……………91

(3) 渋川・吉岡……………91

1 吉岡村から渋川市街地へ……………91

2 渋川市街地から南牧村へ……………96

あとがき

歴史の道調査実施要項

一、目的

古異、人や文物の交流の舞台となってきた古い道や水路は、生活や文化を理解する上で重要な意味をもつものであるが、並木街道や関所跡として部分的に指定された史跡等を除けば、開発その他によって急速に失われてきている。

そこで、これら「歴史の道」ともいうべき由緒ある道や水路とそれらに沿う地域に残された文化遺産を調査し、周囲の環境を含めて総合的・集約的に保存整備し、県民による積極的な活用に資することを目的とする。

二、調査主体者

群馬県教育委員会

三、調査の方法

(1) 指導 調査の方法・計画・まとめについては、文化庁係官より指導を受ける。

(2) 総務

調査の計画・運営・地元との調整等、全体を総括する。
県教育委員会事務局管理文化財保護課長並びに担当職員

(3) 調査員

串田 光一 藤岡市教育委員会勤務

大島 史郎 渋川市史編さん室勤務

土屋 喜英 高崎市文化財調査委員

青木 宏 群馬県立高崎女子高等学校教諭

沢口 宏 群馬県立大泉高等学校教諭

(4) 調査協力機関

群馬県内七十市町村教育委員会

(5) 調査方法

○一次調査

関係市町村の協力を得て、調査対象の旧街道の路線と現状との異同の概略を把握する。

○二次調査

一次調査の結果を参考にして、調査員による現地調査を実施する。

(6) 調査対象

昭和五十七年度は、鎌倉街道及び他街道とする。

(調査事項)

① 道・河川・運河等及びこれらに沿う遺跡、例えば 関・番所・一里塚・宿場・本陣・脇本陣・庄屋等屋敷・御茶屋・詰所・御飯屋・城館・陣屋・奉行所・古戦場・会所・並木・石畳・橋梁・隧道・常夜燈・道標・地藏・道祖神・井戸・河岸・渡船場・波止及び歴史的な所(社寺・札所・温泉・宿坊等)・名勝(庭園等)の分布状況と保存の実態。

② 無形文化財・民俗文化財・天然記念物の分布状況と保存の実態

④ 道・運河の歴史の意義・格・沿革。

⑤ 河川の歴史の変遷。

⑥ 沿線に設置されている博物館・郷土館・資料館・史料館などの公開施設の実態と問題点。

⑦ 江戸時代の国界・藩界（正保・元禄・天保）及び郡名。

四、調査のまとめ

報告書は、A4版サイズとし、縦書き、二段組みとする。道・運河ごとに分冊として作成する。

保存資料は、地図・写真・その他とし、文化財保護課に保存し、県民の利用に供する。

群馬県歴史の道調査報告書

- 第一集 足尾銅山街道
- 第二集 日光例幣使街道
- 第三集 (三) 国 街道
- 第四集 (沼田・会津) 街道
- 第五集 信州 街道
- 第六集 (清水峠) 越往 街道
- 第七集 佐渡奉行 街道
- 第八集 古戸・桐生 街道
- 第九集 古河 往 街道
- 第十集 下仁田 街道
- 第十一集 中山 街道
- 第十二集 十石 街道

第十三集 利根川の水運

第十四集 日光への脇往還

第十五集 吾妻の諸街道

第十六集 東山街道

第十七集 鎌倉街道

昭和五十三年度～五十七年度

群馬県歴史の道調査事務局

- 元文化財保護課長 磯貝 福七
- 前文化財保護課長 関 茂
- 文化財保護課長 森田 秀策
- 前文化財保護課参事 白石 保三郎
- 文化財保護課参事 新藤 俊雄
- 元文化財保護係長 樋口 良夫
- 前文化財保護係長 岸 栄
- 文化財保護係長 奈良部 清満(昭和五十三年、五十四年度担当)
- 文化財保護調査員 大井田 利興(庶務担当)
- 文化財保護係調査員 近藤 功
- 文化財保護係調査員 青木 裕当(昭和五十五年、五十六年、五十七年度担当)

I 総論

一、はし が き

鎌倉に政治の中心が移ると、各国から鎌倉へ通じる街道が整備され、いっしか鎌倉街道と呼ばれるようになる。その鎌倉への道も、江戸に政治の中心が移ると、江戸への道が幹道となり、鎌倉街道は支道へ、それも數百年を経た今日では、ほとんど忘れ去られてしまった。

この鎌倉街道を探る手懸りとしては、呼称が現在も伝承されている地域は極めて小部分であり、それをそのまま連結しても鎌倉への道は求む得るまでに結ばれない。その結果今回いくつかの方法を試みてみた。その一つは中世の紀行文などに記録されている地名を繋ぐこと、第二は鎌倉時代の上野国府や上野在地の有力武士団の中心地と鎌倉方面と結ばれる道を探ること、第三は、鎌倉に関係ある伝説地を探ること、第四は最近の考古学の成果を参考にすること、第五は交通路決定に大きな論拠となる山越えの地点などである。これらを総合的に結びあわせて実地踏査をふまえて推定したが今回の鎌倉街道推定道である。

I 総論

なお、鎌倉街道は、鎌倉幕府の存在した鎌倉時代だけではなく、一四世紀中葉以後も戦国時代までは関東管領の存在から、関東各地の道は鎌倉への道が幹道であったと考えられるので、それらの街道も鎌倉街道とした。例えば、白井長尾氏が強大になると、白井から鎌倉への道が当然重要な街道となるので、所によつては逆に白井道などと呼ばれているが、これらも総べて鎌倉街

道として取扱うこととした。

二、文献を主な手懸りとして

鎌倉時代の文献では、『吾妻鏡』の建久四年(一一九三)の条に見える。源頼朝が下野国那須野の狩から帰りに上野国の新田義重の館を訪れている。即ち世良田付近から鎌倉への道が当然考えられるが、『吾妻鏡』の記録では途中の記録がない。これを補う史料は、『太平記』の元弘三年五月の新田義貞挙兵の記録である。現在の新田町の生品神社で挙兵し、ここから尾島町を経て利根川を渡るが、この際当然考えられるのは安養寺である。義貞は安養寺殿と呼ばれていた。安養寺は現在一般に明王院と呼ばれているので、ここから南の大館を経て、当然利根川は中瀬の渡しを通過した。これらの地域で鎌倉街道の伝承地などから推定したが道の推定の項で記した「大館から新田町へ」の道である。或は、世良田を中心と考えると、『徳川から境町へ』の道である。世良田には早くから市もたち、名利長楽寺があり、明王院付近から世良田―境への古道も一部に残っている。これらは、新田荘や瀧名荘の有力在地領主、新田氏、瀧名氏の拠点と鎌倉を結ぶ道であったらう。

次に室町時代の記録『謡曲・鉢木』には、北条時頼越国の畷り、佐野の渡し通過の記述がある。時頼の実在より後世のことであるが、そこに記された地名は十分手懸りになる。それによると

今ぞ浮世を離坂へ香掛、軽井沢の間の坂道、墨染のうすひ川など、法師の

身に縁ある所々を過ぎて上野に入り、板鼻の宿を経て佐野の渡に着きぬ
 ……(中略) ……

常世「御留め申したくは存すれども、我等兩人さへ住みかねたる体にて候
 ぶ程に、御宿はむつしか候。此所より十八町先に山本の里にて家並よろ
 しき所に宿貸す家も候へば(以下略)

右によると、碓氷峠を越えて碓氷川に沿い、法師の身に縁あるはおそらく
 中山道の別石山頂の弘法の井戸であり、そこから板鼻を経て佐野(高崎市佐
 野町)に達した。佐野源左衛門常世は「十八町先の山本の宿」を教えている。

この道は、佐野迄は旧中山道、或は一部は古代東山道を通して佐野に到達
 している。佐野からは烏川の対岸の山本の宿を示しているのが、中世の鎌倉
 への道は、碓氷路を近世中山道にほぼ近い道を通り山本宿に達していたと考
 えられる。これを手懸りに鎌倉街道の伝承地を求めると、推定の「鏡川の渡
 しから山本宿へ」、或は「山本宿から烏川の渡し」、「烏川の渡しから金井宿へ」

などがあり、現在でも山本宿を中心に鎌倉道の呼称も所々に残っている。ま
 た、当時の有力在地武士団を求めるならこの地方は武蔵七党武士団の拠点で
 ある。即ち、倉賀野氏、片山氏、高山氏、小林氏などの地頭がいた。この在
 地領主は、児玉党、或は秩父党につながる一族であり、鎌倉時代には有力な
 武士団の根拠地であった。彼等はいざ鎌倉ともなると、鎌倉へ馳せ参じたの
 であり、その道が鎌倉街道である。埼玉県の児玉から鉢形を経て鎌倉へ達し
 た。中世の幹線道路である。これを更に補うのは「曾我物語」のつぎの記録

である。源頼朝が吾妻郡三原の狩に向う途中
 丹・児玉・下・村岡・熊谷・中條・豊島・笠井の人々用心禁ジテ奉守
 護君、无少の隙、入ニ下へは上野の国、山名・板鼻・松井田宿にて

観とも、其夜は虎夜山名・里見・高山・小林・多胡・小幡・丹生・高田・瀬
 下・黒川の人々用心禁ジテ奉守護君、无少の隙、コソ、信濃界との
 上野・境なる打超て碓氷山を付、吾妻の宿にも(妙本寺本曾我物語)

とあり、鎌倉街道に沿った在地武士が書上げられている。これらを考えると、
 藤岡宿から甘葉方面への交通路も当然考えられ、それが推定の「藤岡市から

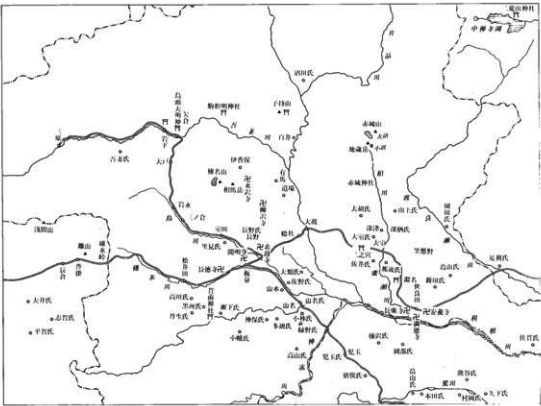


図1 真字本曾我物語上州関係地図(『山北関東の唱導文芸』参照)

とあり、鎌倉街道に沿った在地武士が書上げられている。これらを考えると、
 藤岡宿から甘葉方面への交通路も当然考えられ、それが推定の「藤岡市から

総社から白高町(高崎市)を経て倉賀野方面に達する。高崎市教育委員会の日高遺跡発掘の際はその古道も確認されている。この南北道が倉賀野に達していることは、前記の山本宿への鎌倉街道が佐野まで延びていることから、当然この道に結ばれ得る。また、安達盛長が上野国奉行人として上野国へ入ってきた際、その館を高崎市の東部、玉村町の境付近に所在したと推定されるので、この安達館と上野国府を結ぶことも当然考えねばならない。となると、この道は宿から玉村の角測を経て本庄―兎玉への道が考えられ、或は兎玉―藤岡―角測―安達館―上野国府となる。この道はやがて白井が長尾氏の居城として重要性をもつてくると、元総社から吉岡村へ、更に八木原を経て渋川―白井への道が当然考えられねばならない。この道は近世の佐渡奉行街道と並び、吉岡村大久保地内では、三之宮神社の東南で関越自動車道発掘調査の際一部直線の古道が発見されている。白井―元総社―玉村への鎌倉街道の存在したことを立証したといえるかも知れない。

次に新田氏や西毛武士の在り地と鎌倉を結ぶ道は述べたが鎌倉時代の有力上野武士には、大胡氏、團田氏、沼田氏、佐貫氏などもいた。これらの在地領主の土地から鎌倉への道も当然考慮しなければならぬであろう。

大胡氏の場合、法然上人の大胡消息で知られる大胡実秀等が勢多郡大胡町を中心に勢力をもっていた。大胡から南への古道は、果道伊勢崎―大胡線に沿った道で、前橋市泉沢町などでは、果道の西に幅九尺ほどの古道がある。また、南の二之宮町にも二之宮赤城神社の東南十二天付近に大胡道と呼ばれる古道がある。ここで推定東山道に合し、伊勢崎市の上植木に出る。上植木は金沢文庫本「念仏往生伝」(「樹市」)の立った土地である。鎌倉時代の交通路が当然考えられねばならない地点である。ここから河名荘を通り境町に達し、尾島町徳川を経て中瀬の渡しを越える道となる。

團田荘と鎌倉を結ぶ道は、太田市の金山の東を南へ下り、古代の東山道に合し、古戸の渡しで利根川を越え、熊谷へ向うのが順当であり、途中古郡(古

水)の地名などは、郡衝地としての比定も考えられるので考慮しなければならない地点である。なお、この道は、有力な足利氏が鎌倉へ上る道であったことも考えられる。

佐貫氏については、旧邑楽郡一帯が佐貫荘に属していたが、その中心を千代田町瀬戸井付近に比定すると、利根川を渡るのに赤岩付近か、それとも下つて川俣が近世以前から重要な渡し場であったと考えられるので、その何れであらうか。上五箇は古代東山道との関係も考えられる要地であり、佐貫地方と鎌倉を結ぶ道は、利根川の渡河点が特に重要である。この付近は推定では「足利道」で示している。なお、上五箇から足利への道は、足利氏と鎌倉を結ぶ重要な交通路であり、團田荘からの道とともに併用されたと考えられよう。

沼田氏を中心とする利根郡地方からの鎌倉道は、赤城西麓を通る近世沼田街道に添った道が考えられる。途中古利根川を渡って本庄方面に達したと考えるので、古利根川左岸を下つてきた。その利根川を渡った地点が前橋市の上細井町付近かとも考えられる。ここには鎌倉坂や小字に鎌倉の地名が残っている。また、この東の端氣町善勝寺には、北条時頼が回国の際立寄った伝説がある。上細井には船繋ぎの石も残っていて、ここから前橋市の本町までを七里の渡しと呼んでいる。或は大渡。現在の前橋工業高校付近へ出る道もあったが、おそらく本町から六供町方面へ南下し、玉村町の角測(當時は利根川が前橋の西を流れていなかったから、このコースは容易である)へ達した。前橋市亀里町の極楽寺には常盤御前の墓の伝承をもつ宝塔があり、六供町から角測への道は当然この近くを通過したと考えられよう。ここから福島町付近を通って南下すれば角測である。沼田方面から鎌倉への道はこのコースが最短距離となる。

つぎに越後方面から鎌倉への道は、当然上野国を通過し、既に示した何れかの街道に結ばれる。その際、三国山脈のどの地点を越えて関東に入ったか。

例えば、越後には新田一族の大井田氏などが南魚沼郡を開発している。元弘三年（一三三三）五月の新田義貞率兵の際、馳参しているが、「立平記」によると五月五日に天狗山伏の蝟廻りにより、八日には大井田遠江守が二千騎を率いて新田郡まで到着している。この際の山越えは三国峠か。清水越えはおそらく間道であり、本街道ではなかった。

三国峠は多くの伝説が示すように、上杉謙信が度々越えた記録や伝承も多く、戦国時代には当然この峠が関東への主街道となる。峠の名も古くは三坂越えと呼ばれ、ミサカの呼称は都へ向う道につけられた古代からの峠道である。鎌倉時代に入っても当然この道は用いられ、近世三国街道に添って南下したのであろう。しかし、最近大井田氏の南魚沼郡から秋山郷を越えて吾妻郡六合村の入山地方に入り、暮坂峠を越えて原町に入ったと考えられる人々もある。しかし、これも本道としての鎌倉街道ではない。

なお、白井から鎌倉への道は、比較的良好な伝承も残っているので、やや詳しく解説を加えておこう。

渋川市と吉岡村には、鎌倉街道と呼ばれる道筋がある。鎌倉から武蔵国を経て上野国に入る街道は幾筋か考えられるが、この地域を經由する鎌倉街道は越後国に通ずる「上道」（かみつみち）の一つの道であろう。

吉岡村大久保では、関越自動車道建設にともなう大久保遺跡の発掘調査で、十一世紀の住居跡を切り込んで作られた道路が発掘された。鎌倉街道と呼ばれていた道筋からの発掘である。この道は、前橋市高井町から山王庵寺の西を通り、元郷社に通ずる古道で、この沿線には女堀と呼ばれる中世の用水路であろう遺構が残っている。

大久保遺跡から鎌倉街道を北にたどれば、溝祭の木戸を通り、渋川市の築地前団地南で佐渡奉行街道に合流し、八木原宿、中村を経て渋川宿に至り、また、渋川宿で三国街道から離れて、渋川市の坂下町、阿久津、金井の下金井、南牧と通り、吾妻川を渡って越後国と結ぶ街道があった。

中世の渋川市附近は資料不足で、研究が非常に遅れているところである。中世の渋川市附近は、石造物からみて、非常に栄えていた地域で、石造笠卒塔婆や、金井の宝篋印塔、石原の宝篋印等、優秀な石造美術品を建立した豪族達が住んでいた、長尾昌賢事件が上野国の守護代として白井に入城する数十年前の石造物群である。

唐沢定市氏は、『群馬県人名事典』「渋川義季」の中で、「前略……義順の曾孫が義季であり、足利直義に属した。建武新政によって鎌倉に下った直義の命を受け、一三五（建武二年）七月信濃に率兵して鎌倉を攻略しようとした。北条時行（高時の子）と武蔵国女影原に戦い敗れて自殺した。義季に従った石原、三宮、有馬、中村、大窪、神戸、大崎などの武士たち二〇余人が共に死んだ（『太平記』巻一三）。これら家臣の武士たちの姓は、渋川（渋川市）近辺の地名と一致している」と記している。家臣名の石原、有馬、中村は渋川市の大字名（旧村名）であり、大崎、神戸は小字名で、大窪、三宮は吉岡村の大久保とその小字名である。この地名は『神道集』四十二上野国第三宮伊香保大明神事の「女鉢八里へ下給テハ三宮ト申テ渋河保二立御在、本地八十一面也」と共通するところがあり、鎌倉時代の渋川氏の勢力範囲の一端がしのげられる。しかし、武蔵国女影原の戦で討死した渋川氏並びに家臣団は、この渋川市附近から姿を消した。

上杉氏が、上野国の守護並に関東管領となり、その守護代として白井城にあつて勢力を伸ばした長尾景春事件は、月江正文を招いて双林寺を創立したり、儒学の普及のため廟堂を建てる等、白井の繁栄に努めた。ここに鎌倉と白井を結ぶ交通路が発達した。鎌倉・鉢形・玉村・総社・白井である。中世の有力な地武士団を結び、上杉氏の執事である白井長尾氏の鎌倉への往復も頻繁であった。また、この道は関東と越後を結ぶ重要な交通路でもあつて、近世の佐渡奉行街道として活用された。



金井村絵図 太い道 三国街道 下の細い道 鎌倉街道

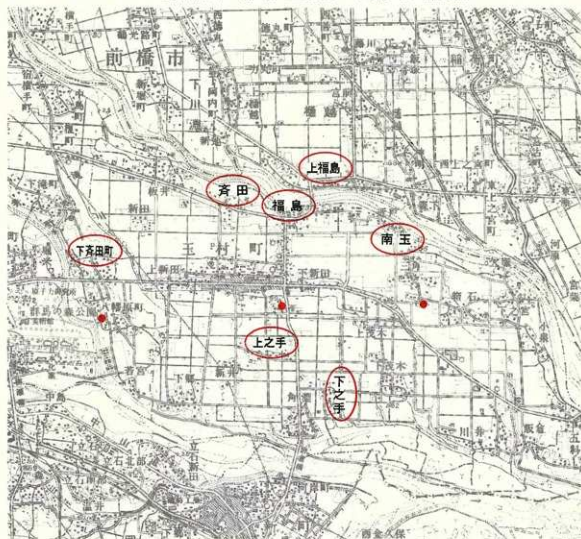


図3 玉村御厨所在地 ○ 前出、山本論文より
● 中世館跡

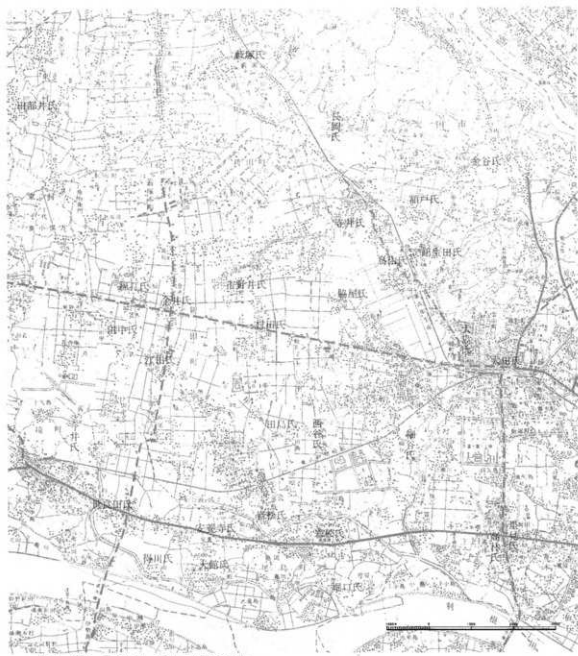


図4 新田、尾島地区 新田一門館城所在地

岸衛氏は「みやま文庫31」「三國街道Ⅱ 渋川宿と金井宿」で、高崎市正観寺町武井治部祐氏所蔵の次の文書を掲載している。

植野環蔵初編立御普請之事(抄)……(前略)……翌十年三之宮七日市場方
大久保宿を出ス、梅木谷戸方渋川宿出シ、下金井方上金井宿出シ、小野子方
横瀬を出ス、室方塚原を出ス、旗ヶ京三國峠と切所を要害ニ被見定、先年之
古海道小川宿長森原湯原清水峠湯沢迄之古海道潰、往來を被絶、又金古等も
其節之新田と申伝候也

と三國街道の成立の事情について説明している。この文書で鎌倉街道について考えてみると、この計画的につくられた、宿場に移される以前の集落地名に、鎌倉街道を冠して読みかえらる。

鎌倉街道三ノ宮七日市場方大久保宿を出ス

鎌倉街道梅木谷戸方渋川宿出シ

鎌倉街道下金井方上金井宿出シ

となり、渋川市の下金井、梅ノ木(現東町)と、吉岡村の七日市、三宮の鎌倉街道の伝承地と一致するのである。

三國街道の新設は、鎌倉街道に沿う集落の民家を移し、新しい宿場を建設した。渋川市附近の鎌倉街道は、新しい幹線道路の開道によって衰退した。下金井の鎌倉街道は江戸末期の金井村絵図によると三國街道に並行して東側五〇メートル程にあり、「古往來」と記され、村人は「並木道」と呼んで渋川宿への脇道として利用している。大久保の三宮、七日市の鎌倉街道は、元総社での新市への往來として「ボヤ街道」と呼ばれ、脇道として存在している。

II 道の推定

一、道の推定

(一) 上道本道

1 本郷から鍋川測三ツ木へ

群馬県内で、鎌倉街道の伝承は、幾筋もあるが、最も古く幹線として代表的なのは、神流川を挟んで、対岸の埼玉県児玉郡神川村肥土から、川を渡って、藤岡市本郷の小字名、道中郷へ入ってくるのが、古地図や地名等にもあるので、有力と思う。

故にここを原点到、調査の足を進めた。

神流川測から西へ、直線にのびる旧街道を見渡すと、遙か遠く正面に、きりりと聳える、牛伏山がある。これは或程度の方角の目標か。測から西へ二〇〇メートルぐらい行くと、藤岡川除間の市道十字路となる。その少し手前右側の畑に、葵御前を祭った小宮がある。この十字路を横断して、西へ一〇〇メートル程の所で上り坂となり、更に一〇〇メートル程行くと、藤岡市立美九里東小学校となる。旧街道は小学校々庭のまん中を横断して、北方土師神社から分かれてきた藤岡牛田線の市道にでる。学校の中の道は現在南へ回されて、市民が通行している。学校西から旧街道は舗装された幅五メートルの道となり、西へ約四〇〇メートル進むと、県道前橋・長巻線の十字路となる。

この十字路を横断して、更に西へ二〇〇メートルぐらい進むと、寺山の竜田寺裏へぬけられる訳だが、現在は通行する人もなく、雑木が生い茂り、通



埼玉県から神流川を渡って本郷道中郷に入る旧街道



本郷竜田寺裏旧街道通称鎌倉坂

称鎌倉坂の名残を、とどめている。竜田寺裏へ出る道は、県道を北へ約一〇〇メートル行くと、幅一〇メートルの新道が出来ている。

竜田寺の裏から西へ、庚申山丘陵の南面を、ゆるくカーブしながら、一キロぐらい進むと、視野のひらけた、庚申山西にでる。ここから西北に坂を下って、約五〇〇メートルの所で、県道藤岡・上田野線の十字路にでる。ここを横断し更に西へ約六〇〇メートル進むと、地名鮎川の变則四差路にでる。この村西はずれで、今ひとつの伝承鎌倉街道（後述）が一緒になる。幹線鎌倉街道はこの变則四差路の内、西北の道を進み、約一五〇メートルで、河川名

結川の川原となり、この川を渡って上った所が緑整となる。村に入るとすぐ左手に、天明三（一七八三）年建立の千部供養塔がある。

ここから西北に直進して、約六〇〇メートル進むと、南北道路倉賀野・金井線にでる。この辺りから白石である。白石は大きい郷村で、元禄時代（一六九五年）前後、知行の内、吉良上野介の領地もあった。また、大小の古墳群が集中していて、群馬県内では数の上で、一番多い。

この十字路を斜めに横断して西北に、約六〇〇メートル進むと、国道二五四号線にでる。ここを横断して北に、ゆるい坂道を上り、約一五〇メートルの所で、直線と西への三差路となる。

この左へ直線に走る道が、旧街道支線となつて、吉井、富岡、下仁田、南牧、更に信州に通じる。

この三差路を北へ、現在の新道より五〇メートルくらい東側を、約五〇〇メートル進むと、薄暗い林の下り坂となり、県道下栗須・馬庭線にでる。この辺りは、藤岡市三ツ木である。この県道を横断して、約一五〇メートルで、鍋川右岸で、河川敷より一五メートル位高い所である。

北の対岸は、吉井町岩井で、旧街道幹線はこの鍋川を渡って岩井東端を通つたという。

2 保美から本動堂へ

藤岡方面第二の伝承鎌倉街道である。

神流川の対岸、埼玉県神川村寄島から川を渡って、藤岡市保美城戸を上つて、江戸期、保美の永代名主清水家の正門前を通り、西へ約一五〇メートル進むと、県道前橋・長湊線、保美南部の十字路にでる。旧街道はここを横断し、西北方へ蛇行しながら、約二五〇メートル程進むと、右側に小古墳を思わせる塚の上に、旧村社稲荷神社がある。この境内で、二月の初午の日に、村中で獅子舞を舞う。



藤岡市保美地内旧鎌倉街道



三本木から三名瀬方面に通じる旧街道 道幅約3m

この稲荷神社から、北々西に八〇メートル位進むと、東西に走るゴルフ場道路にでる。この道路を横断し北へゆるい坂道を上り、一〇〇メートルぐらいで、道はゴルフ場建設で、別な所へ移動し今はない。少し離れた右の方に、保美専用の用水沼がある。

旧街道は、この辺りから西北に向かって、一〇〇メートル位進むと、村境の三名川にでるわけであるが通行禁止、一旦戻って前橋・長湊線の県道に出て北方、神田の三光屋の脇を左へ県道神田・下田野線を西へ、約八〇メートルのゆるい坂道を上ると、左側が藤岡市立美九里西小学校、右側は金ピカの古刀が発掘された浅間古墳である。

学校裏から西へ約七〇メートルぐらいで三本木の家並にでる。村入口左側東南に走る農道風の道がある。これが保美ゴルフ場方面から三名川を渡つて来た、伝承の鎌倉街道である。一旦県道にでて西へ五〇メートルぐらいで右に曲る。この角には、第一回国勢調査を記念した高さ〇・八メートルの道

II 道の推定

するべがある。

ここから約一〇〇メートル進むと、直線の舗装道と少し左りの田の中を走る草道となる。直幅はおなじぐらゐの三メートル前後である。旧街道は左りの草道だという。直線北への道は、曹洞宗叡訪山興福寺の参道で、後にてきたという。しかし八〇メートルぐらゐで又一緒になる。僅か三〇メートルぐらゐで、新道矢場三本木線にでて、旧道はこの新道を横断し、水田の中央を北に向かって、約四〇〇メートル進むと、県道南橋・長壽寺山から、三名湖に通じる観光道路にでる。

この道路を横断して草道を通り、梅林のまん中を抜けて、矢場沼の南側沿いを西北に進むと、三名湖の観光道路から、東平井方面に向かう。舗装道路と一緒に北に進む。約八〇〇メートル進むと、県道上日野・藤岡緑信号機付きの、交差点近くに出る。

この県道を横断した所に、慶応元（一八六五）年建立の道祖神碑がある。この碑の前を堀沿いに、北へ約三〇〇メートル進むと、道が極端に狭くなり、その上屋敷木が覆いかぶさり、通行者をはばんでいる。この道を苦労して歩いて、八〇メートル位行くと、旧道が元の広さになり、両側が桑原だが、現在は道として利用していない。

この間が約五〇メートルで、舗装道路と一緒になる。ここから約二〇〇メートル北方、吉野屋の所で、伝承鎌倉街道幹線と交差する。

この十字路で幹線と一緒にたつて、北西のゆるいくだり道を、約八〇メートル進むと、両側が水田となる。右側の田と桑原の境に、大きな凱旋馬頭記念碑がある。

右側水田の中央辺りから、鮎川沿いに北方の大塚方面を見通した所が、鎌倉街道支線というが、鮎川の度かきなる氾濫により、現在は伝承のそれらしい道は、見あたらない。

しかし北方約一、〇〇〇メートル先の、国道二五四号線附近にくると、道

南一〇〇メートルぐらゐ迄は、旧道が農道として残り、道北は道幅が変化しつつも、直線にかなり残っている。

国道から北へ約三〇〇メートル進むと、地名鎌倉という水田になる。その右側に縄文時代敷石遺構が発掘されている。この遺跡から更に北へ一、五〇〇メートルの所が、県道藤岡・寺尾線で、ここまで来て鎌倉街道の伝承は、消えている。

3 藤岡市から吉井町へ

吉井富岡経田で、南信濃に通じた伝承の鎌倉街道は、幹線通過の藤岡市白石郷から、支線となって往来したと思われる。

白石の幹線分岐点から、西へ約七〇〇メートル進むと、吉井町小串となる。小字名は郷土である。光心寺裏に幅二メートル位の旧道が伝承鎌倉道である。この裏道を北西に二〇〇メートル程進むと、国道二五四号線の下り坂、俗称



白石から三ツ木県道にでる旧街道
(右側の山の上に若宮が祀ってある)



吉井町長根神社付近（東から）

赤坂の嶺にでる。

この国道を横断して、小串家並の南一〇〇メートル前後の所を並行して、西へ直進し約一、〇〇〇メートル進むと、吉井町入野農協南裏、更に二〇〇メートル程進むと、深沢多比良方面に向かう十字路にでる。この十字路を横断して、約六〇〇メートル進むと、小字名夜明という地名の所で、国道二五四号線を横断し、国道と六〇メートルぐらゐの間隔で、西へ約八〇〇メートル位進むと、主要地方法道高崎・吉井線の十字路にでる。

この十字路を横断し、僅か進んだ所を左折し、約一五〇メートル南へ進むと、又国道にでる。国道右角が吉井警察幹部派出所である。この周辺から吉井宿で、中世期近世期時代、武士町人の生活に便利するように、町並みが整備されたため、古い道等は大きく変動したと思う。

警察官派出所前の国道を、クランク状に横断して、延命密院の裏を西へ、カーブしながら約二〇〇メートル進むと、上信電鉄吉井駅から多胡方面に通じる県道十字路にでる。この十字路を横断して、二〇メートル程で、左に浄土宗法林寺がある。ここから道が変則している。

寺西をクランク状に西へ、国道と六〇メートルぐらゐの間を並行して、約一、三〇〇メートルくらい進むと、長根神社手前十字路にでる。この長根神社は、大字名長根を当てたという。神社裏を西へ約五〇〇メートル進むと、天台宗恩行寺裏へでる。この寺裏を更に五〇〇メートル程進むと、小字名権現堂の西を流れる天引川にでる。このあたりが、吉井町と甘菜町の境目である。

4 吉井町から甘菜町へ

この辺りの旧道は、国道の南約五〇〇メートルに位置し、幅四メートル位の舗装道である。天引川にかかる天皇橋を渡って西へ、二〇〇メートル程進むと、小平の十字路にでる。西北の角は新屋小学校である。学校西に大白



甘菜町下平学校西 仁井屋の白倉城跡

堂のお堂が東向に建っている。このお堂の南側を西へ進み、橋を渡るとゆるく右へカーブして進む。このカーブした左の高い山が、仁井屋の白倉城跡である。

白倉城跡から西へ五〇〇メートルぐらゐ進むと、字新田で南方にある白倉神社に通じる十字路がある。この十字路を横断して、約五〇〇メートル進むと、甘菜町立第一中学校前にでる。校庭西は変則十字路である。校庭南西の隅に、笹遺跡がある。

笹遺跡から十字路を横断して、西へ約三〇〇メートル程進むと、字名多井戸で右側町有地に、高さ三・五メートルの石板碑がある。銘は仁治三(一二四二)年、大日如来(梵字)、他に庚申塔など三基がある。

この大板碑の前を、西へ約二〇〇メートル進むと、福島町から小幡にある町役場方面へ通じる県道十字路にでる。この付近は小川である。この県道を横断して、西へ約五〇〇メートル進むと、字二日市の光源寺裏にでる。この二日市西が、甘菜町と富岡市の境目である。

5 甘菜町から富岡市へ

寺裏から約三〇〇メートル進むと、鍋川へそく雄川の橋にでる。この橋を渡って、西へ約五〇〇メートル進むと原田篠で、右側に銘不明の石仏薬師がある。

道幅四メートルぐらゐで、舗装されている。国道二五四号線の南、約八〇

II 道の推定



富岡市中高瀬の家並み



富岡市下神成の家並みと街道

〇メートル前後の間隔で、更に西へゆるく左へカーブした坂道を上り、約八〇〇メートル進むと、字内匠で、右側が公会堂、その近くに江戸期の石碑が五基程ある。

この公会堂の前を西へ、約一四〇〇メートル進むと、県道南後箇・七日市線の、十字路にでる。十字路手前左側に、立木子式記念に建てた道しるべがある。

十字路を横断して、西へ約二〇〇メートル進むと、変則五差路となり、上高瀬方面に向かう南角に、寒夜鳴号碑と書いてある大きい碑がある。

6 富岡市上高瀬から南蛇井へ

旧道はここを直進して、鑛川河にでたが、現在は少し左にカーブして、拡幅新舗装された県道秋畑富岡線の橋の手前にでる。この橋名は和合橋で、昭和四十八年三月に、開通したという。

和合橋を渡って、約五〇メートル進むと、旧道から上ってきた道と一緒になり、北へ約五〇〇メートル進むと、四車線の区分バイパスにでるが、更にここを横断して、約二〇〇メートル進むと、従来の国道二五四号線の一の宮に出る。

ここを左折して、少し西へ進むと、右への幅広い上り坂道になる。この坂を栗の木坂と呼び、この坂道を、約五〇メートル上ると、貫前神社正面に位置する白御影石の大鳥居となり、鳥居からは、かなりある石段を上るのだが、自動車用の道路が、鳥居の西に作られ、石段を上りつめた所で、一緒に北へ進む。

石段を上った所から、平坦となり、左は広い休憩所となり、右は住宅がある。平坦な参道を北へ約八〇メートル進むと、荘厳な格のある貫前神社の御門にでる。左右に大きな唐金作りの燈籠が二基、少し離れて、狛犬が向かいあつて、建てられている。

御門を入ると、神前迄に、約六〇段の下りの石段があり、真ん中頃で、一息つくかのように、幅広くなっている。

貫前神社は、全国でも珍しい下り宮で、邪音の浸透して来ない、神聖さを感じる。

さきの唐金燈籠の前は、東西の旧道であり、現在は多少拡幅され舗装されている。

神社前を西へ、約一、〇〇〇メートル進むと、右側に諏訪社がある。この前の所から、クランク状に曲がって、西へ進む道となり、この辺りは、旧宮崎宿といい、随分繁栄したという。左側は広範な、宮崎公園がある。

この辺りから、南西の方向の下り坂道となり、下りきつた所が根岸となる。村の入口の崖の途中に、丸石に青面尊と彫った碑等があるが、梯子がないと、こまかい事は調べられない。

この石碑の下を、少し右にカーブしながら西へ、約五〇〇メートル進むと、

下神成となり、村はずれの高台の御堂の隅に、庚申塔、念仏供養碑等五基くらいあるが、磨滅し欠落ちたりしていて、年号は確かめにくい。

御堂の前を西へ、約四〇〇メートル進むと、神成中組となり、村入口に宇芸神社がある。また村中央右側に、高さ約一メートルくらいの笠稲荷がある。

この辺りから、両側の民家は、石垣の上におり、道は低い所を通る。約三五〇メートル進むと、糸手の村はずれにでる。この右側の約一メートルくらい高い所に、共同墓地があり、ここには道に面して、稍々小型の百庚申供養碑がある。

糸手から南西へ、約一二〇〇メートル進むと、南北の県道南蛇井・安中線の変則十字路となり、この辺りは原といい、県道西北の角は吉田公民館である。

十字路を横断して、公民館前を西へ、約一〇〇〇メートル進むと、南蛇井の中村にでる。道の右を約一〇〇メートル進んだ所に、曹洞宗最興寺という、古い寺がある。

この先、千平から梅沢峠へ、道が続くが、ここより西の人達ちに、問うて見たが、返事が曖昧である。

7 下仁田町から南牧村へ

上高瀬から田島へ渡る、鑛川は対岸の田島側が絶壁のため、かなり下流に下ってから、渡河したと思われ、南牧方面に向かうのは、無理をして川を渡らず、上高瀬から鑛川の右岸を通行したことも、推定される。

和合橋の手前を左折して、大島にでる、ここから仙瀬に出られれば、近い道法となるが、途中の鑛川に面した山が、断崖を川まで突き出しているため、とても通行は無理であるから、南へ迂回したと思われる。

大島から南へ、約一〇〇〇メートル進むと、森の十字路となり、この十字路を右に折れて、約六〇〇メートル西へ進むと、西平となり、更に西南の方



日向から鎌田への古道



下仁田町下吉崎の旧道（西の果城方面）

向に、約五〇〇メートル進むと、箱戸となる。

箱戸から西南へ、約三〇〇メートル進んで、塚越橋を渡り、ここから先は、加生の民家が、道の両側に並び、暫らく進むと、右へカーブする所に、中島橋がある。

この中島橋から西方へ、右左にゆるいカーブを、約七〇〇メートル進むと、日向地区の少し手前の、右に曲がる脇道の所にでる。

この脇道を西北方に、約一五〇メートル、山越しをすると、鎌倉街道と伝承される、鎌田にでる。

この山越しの旧道は、現在通行中の道路より、稍々西の方を利用していただい。

鎌田から西北へ、約七〇〇メートル、ゆるい坂道を下ると、大塚の南へ出る。この周辺は、約十五年前に、耕地整理されて、東西の道は、幅約三メートルの、舗装道となっている。旧道はこの道より、約五〇メートル、

南の山裾を通つたと思われ、現在農道として、部分的に利用している。またこの古道は、かなり直線に残っている。

大塚から西南に、約五〇〇メートル進むと、田城となり、ここから西へ、約五〇〇メートル進むと、下横瀬にでる。

横瀬から更に西へ進むと、横瀬川の橋にでて、橋を渡ると天台宗米山寺丘陵の山裾となる。

米山寺丘陵下を南西に進むと、約五〇〇メートルにて、四方坂という山になり、この四方坂の頂上から、左斜めに約一〇〇メートル下ると、県道下仁田・小幡線にでる。

この県道を右に折れて、僅か進むと、国道石河橋の手前にでる。

旧道は橋の手前を左へ、鏡川沿いに進む。左の高台は、みどりが丘団地で、団地下を約五〇〇メートル進むと、白山に通じる。

白山から更に西へ進むと、鏡川から約三〇〇メートルはなれた平坦な村落となる。この辺りから、東西の道が三本あり、一番古い道は山裾にあり、この古い道端には、巳得塔馬頭尊等が多く、まん中の道は稍々広いが、現在は更に鏡川に近い所にできた、民家の中を通る。幅四メートルくらいの舗装道を使用している。

この舗装道を西へ、約五〇〇メートル進むと下吉崎となり、更に四〇〇メートルくらい西へ進むと、上吉崎の町立吉崎公園にでる。この吉崎公園は、中期の吉崎城曲輪跡を、多少手入をして、花木が植えてある。山際に町立保育園もある。

古くはこの保育園辺りを、西南に進んだという説もあるが、現在は通行できない。

曲輪下北側を少し進むと、稍々左にカーブしている。この辺りは、南牧川沿いとなり、俗称根無し山裾で、ここを上流に向かい、約五〇〇メートルくらいで、旧青倉村の跡倉地内にでる。

跡倉地内僅か手前で、青倉川を渡り、南牧川右岸の大桑原郷にでる。

大桑原から、南牧川沿いに、西南に進む、主要地方道下仁田上野線の道路となる。

この道路を約一〇〇〇メートル進むと、宮室となり、更に二二〇〇メートルくらい進むと、中の萱となる。

中の萱から、約八〇〇メートル進むと、小沢郷で、村の中央から右へ、南牧川にかかる小沢橋を渡って、西北に流れる、小塩沢川沿いに、県道がある。

この県道は、黒滝山不動寺に通じている。小沢からこの県道を、約一三〇〇メートル進むと、二岐にわかれ、右は大久保を経て、高原方面、左が黒滝山方面。

戻って小沢から、南牧川沿いの県道を西北に、約一〇〇〇メートル進むと、千原郷となる。この辺りも平均して、南牧川北に民家が多く、この千原には、村立小中学校があり、天台宗慈眼寺もある。

慈眼寺参道右側に、自然石約〇・九〇メートル、丸型に新田徳純書の庚申碑がある。

この千原から川南を、約一〇〇〇メートル進むと、榎平となり、ここを左折する道が、県道下仁田・上野線で、直進の道は、ここから県道下仁田・白田線となる。

鎌倉道と伝えられるのは、左に折れた、県道下仁田・上野線の道より、やや高い所を通過して、堂所から大倉・根草を経て、榎沢峠を越えたという。

8 鏡川の渡しから山本宿へ

鏡川の渡しは対岸の三ツ木より渡り、吉井町の岩井へ上る。川の downstream にかけて左岸の河原を八十メートルほどくと、道祖神の文字塔があり、さらに河原敷からはなれて三十メートルほどで舗装した道へ出る。ここは四つ辻になっており、鎌倉道は右折する。最近コンクリート舗装された道で、いく



鍋川の渡しを河原から上った所
吉井町岩井

つかのカーブがあるが、一段高くなつた左側と、道より低くなつた右側の中間を地形なりにカーブしながら八百メートルほど行くと、上り坂となり、四メートルほどの幅の舗装道路になる。ここからは鎌倉道の伝承はないが、高崎市の福音寺までこのような道が続く。この道以外に道はなく古い道を拡張したものと思われる。

福音寺からの道は耕地整理、新設道路のため鎌倉道の伝承の道はすべたなくなっており、推定する事は出ないが、福音寺から二つのルートがあつたものと思われる。一つは上信電鉄の入野駅の間を通り、天水から五三山とひかげ山の峠を経て山本宿へ行く道で、もう一つの道は、伊勢塚古墳群の中を通り、山名八幡宮の社殿の裏山を通り、山本宿へは寄らず山名の集落を通る道で、共に推定される道は残っていない。

来ないが、福音寺から二つのルートがあつたものと思われる。一つは上信電鉄の入野駅の間を通り、天水から五三山とひかげ山の峠を経て山本宿へ行く道で、もう一つの道は、伊勢塚古墳群の中を通り、山名八幡宮の社殿の裏山を通り、山本宿へは寄らず山名の集落を通る道で、共に推定される道は残っていない。

9 山本宿から烏川の渡しへ

山本宿からは二つ方向に分かれた道が推定される。一つは山本宿からひかげ山の峠近くへ戻り、三差路を左折して柳沢に沿つて下り、山名住宅団地内を通る。この辺は団地造成により古い道はない。柳沢を渡り根小屋に入るが、根小屋地内にはいくつもの鎌倉道の伝承が残っている道がある。第一に柳沢の次の沢の薬師沢の手前五〇メートルほどの所から、右斜めに入り、烏川の河原へ出る。第二に根小屋の集落の中を上信電鉄に沿つて北上する道であるが、



山名町山の上 山本宿へ下る道

鎌倉道と伝えられる道は断絶しており、その道を結ぶものもあり、近世の道と思われる道もあり、上信電鉄より山際を通る道も所々伝承があるが、ほとんど廃道同様である。根小屋駅の近くには歴然とした伝承があり金井沢を下つて平地に出た所を北に進み、人家の間の二メートルほどの道で、観音堂、白山神社の下を通り、中ツ沢に出る。ここで伝承は終り、これから先の道は寺尾への道である。

山手を通る道は、山本宿から柳沢に沿つて上流へ行き、柳沢から分かれて大谷を上り、稜線の道を七曲りから下り金井沢へ出る道で、根小屋の沢が通行不能の際に利用されたものと思われる。

根小屋からは烏川の渡しまでは、耕地整理のため、すべての道は新しい道になり、鎌倉道と推定される道はない。また、渡し近くは河原敷のため常に変化しているために確認出来ない。

烏川の渡しは四か所が推定される。第一に薬師沢から斜めに進み、川竜石辺りへ渡るものと、一キロほど上流の赤石の辺りから渡る道で、この渡しへは、薬師沢の道と金井沢から太夫沢へ出た道が渡つたものと思われる。赤石から八百メートルほど上流の佐野の舟橋の伝説のある辺りの渡しと、それより三百メートルほど上流の佐野窪の渡しは、金井沢からと、上根小屋からの道が渡つたと推測される。烏川の渡しは、根小屋の沢や、烏川の状況により、その場所を変えているものと思われる。

II 道の推定



川籠石から渡った馬の口の辺り



竜見町崖上の道 下は大音寺河原と言われた

10 鳥川の渡しから金井宿へ

川籠石の渡しからは鳥川に沿って断崖上の道が上流方向へ北上する。鳥川から一〇〇メートルほどはなれる事もあるが、鳥川と並行した道で、赤石の辺りから渡った道と合流するが、この道は国鉄新幹線工事のため、完全に消滅して確認する事が出来ない。定家神社の辺りから古い道をたどる事が出来るが、拡幅改修されていて伝承も判然としなくなっている。

鳥川に沿ってさらに上流へ進み、佐野の舟橋の辺りから来た道と合流する。鎌倉道の渡しを示す舟橋の碑があり、最も伝承の確かな道である。

舟橋の碑の所から鳥川からはなれて北上する。和田多中近くで左へカーブする。ここまでは、ほとんど直線の道である。和田多中で、佐野窪の渡しから来た道と合流する。佐野窪は鳥川の中洲のような所で、渡し場の川をはききんで兩岸に人家があった所で、渡しからの道は佐野窪の集落の中を通り、三

差路を直進する道があった。この道は上信電鉄を過ぎて和田多中で先の道と合流する。

和田多中の三差路を新後関の方へ直進する。四メートルほどの道は二メートルほどにせまくなり、新幹線の下をくぐり、家並に沿って琴平神社の参道に出る。神社の境内と莊嚴寺の間の道を進み上信電鉄の路切を渡り、城南小学校前へ出る。

ここから城南野球場辺りまでは区画整理のため鎌倉道と伝えられる道はなくなっていたが、城南小学校の校内を通り、鳥川の断崖の際を通る道が続いていた。城南野球場の上の辺りから再び崖際に細い道が残り鎌倉道の云伝えがある。また、城南小学校を過ぎた辺りから河川敷へ下り、大音寺河原と云われた総合グラウンド、野球場を経て小万坂を上る道もあった。

崖上の道は竜見町を通り、小万坂の所に出て大音寺河原から来た道と合流する。この辺は旧町名を鎌倉町といい、鎌倉道の伝承から名付けられた町名である。

小万坂を過ぎると、記録により、光明寺の辺りから、高崎城の外堀を高崎公園入口辺りで城内に入り、第三中学校の校庭を横切り、校舎の辺りでやつと右に方向を変え、再び左折して市役所西の道に出たと推測される。光明寺近辺を馬^{せま}上^{まへ}宿と云う。また市役所西側道路の電電公社、市営駐車場、郵便局、テニスコート、これらの施設にまたがるように金井宿があった事が古絵図に記されている。

11 金井宿から豊岡へ

金井宿は、京口、鎌倉道、奥州道、武州道の主要道が交差する所で、重要な宿であった。金井宿からは京口と云われた道が鎌倉道で、高崎城の赤坂中門から二の宮の近くを通り、赤城門の辺りから中央小学校の校庭を横切り後場と云われた河原へ出たもので、ここに台ヶ松と云う名跡があり、ここから



高崎古絵図の写し (明治) 和田氏の墳の高崎

烏川を渡って対岸の筏場河原へ上った。

筏場河原と石神との境を北上するが、万日堂のあった辺りから伝承は消えて、旧道と思われる道も所々に断続的にはあるが、確かな伝承は聞かれない。

中豊岡の中山道の高札場のあった所から一〇〇メートルばかり西に四川と云う中華料理店があり、その店の北裏の細い道から再び鎌倉道の伝承がある。この道は、豊岡小学校北裏から常安寺前を通り、墓地に沿って右折し、再び左折して西進し四つ辻へ出る。鎌倉道は直進して、第五中学校の校庭の中を横切り、通用門の所へ出る。

第五中学校から出て間もなく水路に沿った道になり、水路の曲りなりに道も西へ進む。この辺りは笛吹塚があった所で、源義経の伝説がある。この道は、四メートル以上に拡副されているが、以前は一メートルほどの道幅で昔から水路に沿っていた。この道は近年開通した環状線道路の所で切れていて、その先は工業団地の造成により、旧道も、伝承もなくなっている。

12 豊岡から板鼻宿へ

工業団地内を通過して、国鉄信越線を渡り、群馬八幡駅の手前の三差路から斜めに入る道があり、鎌倉道と思われる。少しカーブしながら、駅前道路を横断して遊園地に沿って西進し、水路に沿った道に出て直進する。この道は新しい道で三差路となるが、直進する農道があり、この道が鎌倉道と推定



板鼻塚に添った東山道、鎌倉道

される。水路に沿って農道があるが、途中で道は切れてその先は通行不能であるが、八幡八幡宮の社家の矢口家裏の五輪の小字名のある所へ通じ、八幡宮の参道へ出る。ここから二つに分かれ、一つは板鼻道と呼ばれる道で、低地の田の中を蛇行して、板鼻の毘沙門へ至る。一つは八幡宮の大門左の五和尚(ごわう)坂を上り、高台の際を通り、平塚古墳の下を通り、坂を下って毘沙門坂の下へ出る。

毘沙門坂からは、工場の中を通過するが現在には道はない。工場の端に進むと板鼻旧宿である。宿内は南北の道路をはさんで宿が発達し、この道より東五〇メートルほどの少し高い所に並行した道があり、ここにも人家があり宿の内であったと伝えられる。下の道は宿に入って一〇〇メートルほどで左折し四つ辻に出た所で宿は終っている。この四つ辻は右からの道は東山道と伝えられ、左折する道は近世開けたもので、鎌倉道は、東山道と合流して板鼻城の東側の谷を地形なりに下り、中山道の板鼻宿に出て、板鼻塚に沿って西進するものである。

II 道の推定



北海老瀬の旧道（前方は藤岡町鎌山）



川俣宿通り

(二) 上道からの支道

(1) 館林・邑楽・太田

1 岩舟道（藤岡道）

岩舟道は、栃木県岩舟町から藤岡町を経て板倉町東部の海老瀬地区を南北に通って埼玉県北川辺町大字柳生へ入る道である。板倉町では岩舟道と呼ばれている。この道が中世の道だという確たる根拠はないが、次のようなことから古い道であることが推定できる。

① 岩舟道の南端、北川辺町柳生には鎌倉街道中道から分岐した枝道の存在が推定されている。（埼玉県報告書「一方、北方へ延長すると岩舟町で旧東山道（後の例幣使街道）と交わる。岩舟町の三義山麓下津原付近に

は東山道三鴨駅が想定されている（「栃木県の歴史」）。この南と北の古い道を縦に連絡する道があったと考えるのは不自然ではないだろう。

② この道は、地元住民から岩舟町にある天台宗岩舟山高勝寺への参詣道としてとらえられている。岩舟山は宝龜八（七七五）年、僧明願開創と伝えられる日本三地蔵の名刹であり、「栃木県大百科辞典」、下野国誌には「春秋の彼岸には遠近の老若もうで来て賑々し」とある。板倉町下五箇にある文化五（一八五〇）年の廻國供養塔に「岩婦弥ちぞふ」の文字が刻まれている。しかし、中世の岩舟信仰圏は分らない。

③ 天命郷（佐野）の植野・馬門を経て中泉庄藤岡に至る道を「藤岡道」とする説がある。「佐野氏の系譜と佐野庄」板倉町北海老瀬にある延宝元年（一六七三）年の四体仏塔には「下野国下都賀郡中泉庄北海老瀬」とある。

④ 戦国時代には古河公方足利義氏と足利の護阿寺との間に文書が頻りに往復している。（近代足利市史「第一巻」足利・植野・藤岡・海老瀬・柳生・古河のルートが浮かぶ。

岩舟道は海老瀬買塚の所まで藤岡台地の上を通る。藤岡台地の西側は板倉沼のある低湿地、東側も旧赤沼沼を含む巴波川、思川の低湿地帯である。また、この道は北海老瀬と本郷との間の狹窄部で渡良瀬川を渡った。

2 小田原街道

館林市上早川田から足次、館林市街地西部を通り、青柳を経て明和村川俣へ通じる南北の道を小田原街道とする。

館林御城地根記に「佐野海道は天福寺の西の方にあり、南北は鉢形通り云々」とあり、この大通りを当時は小田原街道と称し、北条氏の居城地小田原への通路であったという。（「館林市史歴史編」）

小田原街道南端川俣の利根川対岸、行田市別所では、鎌倉街道上道から分

岐北上して別所に至る枝道が認められている。(埼玉県報告書)一方、北端上早川田の渡良瀬川対岸佐野市高橋からは、旧東山道を経て佐野へ通じる道が想定される。小田原街道の南北南端は、これらの古道に接していたと推定できる。

小田原街道という呼称は、天正一三(一五八四)年に館林城が北条氏直に屈服し館林領がその支配下となったところ発生したものであろう。そして慶長二(一五九七)年の日光脇街道開設によって、青柳以北の本道はメインルートからはずれたと考えられる。

小田原街道は、館林市街地南西小桑原から目黒、木挽町、天福寺(現館林第一中学校)西側を通り足次から早川田へ達したという。(館林市史)早川田は、約一・五キロ離れて下、下二つの集落に分れているが、どちらの早川田であったか市史に記載がない。明治一六年測量二万分之一迅速図館林・寺岡図幅には、足次から下早川田へ直通する道はない。また市街地北端台宿(後の佐野口)の北方に広がる沖積低地は「佐野口より早川田(下早川田・筆者)の間は沼田にてこれあり候処、慶長二年春三間の道となる」(御城地根記)「館林市史」とあるから、中世の道も足次から上早川田へ通じていたとみるのが自然である。吉田東佐も同年まで「佐野海道は、天福寺脇にて、鉢形通上早川田通なりき」と述べている。

上早川田の渡しは館林市史に記載されていないが、対岸高橋とを連絡していた。また道興准后の廻国雜記にある文明一九(一四八七)年三月二日の歌「古への跡をばとほくへだてきて霞かかれるさの舟橋」の佐野の船橋を、下野国志では高橋村のあたりとしている。その当否は別として、江戸末期に渡しがあったからそのような推定が為されたと思われる。

渡良瀬川の本流は、永禄年間(一五六〇年代)の洪水で現河道に転じたといわれる。それ以前は現在の矢場川が本流で、しかも寛文元年徳川綱吉の工事以前の矢場川は木戸から足次と台宿との間を通って渡良瀬沖積低地の中央

を流れていた(利根川治水史)そうすると永禄以前の小田原街道ルートは、足次の南で渡良瀬川を渡ったことになる。現在の渡良瀬川筋は職原抄頭註にある「佐野中川」であったと思われる。

3 佐野道

この道は、京都聖護院の門跡道興准后が文明一九(一四六七)年に通過したルートである。道興の紀行文「廻国雜記」同年三月二日の項に「とね川、青柳、さぬきの庄、館林、ちづか、うへの宿などうち過ぎて、佐野にてよめる」云々とある。館林以南は小田原街道なので、館林から千塚を経て佐野市植野(現植上町、植下町)へ向かう道筋を佐野道とする。館林から千塚、大島までは「藤岡道」と呼ばれてきたが、中世には藤岡よりもむしろ佐野との交通が重要であったと推定されるので佐野道という名称にしたい。

このルートの交通を具体的に語る資料は廻国雜記以外には見当たらないが、柳田貞夫「佐野氏の系譜と佐野庄」は宇都宮―壬生―国府(栃木市)―豊岡(岩舟町)―天命(佐野市)―船津川(同市)―千塚―館林―上五箇―利根川渡―忍―鎌倉街道上道または中道へと通じるルートを奥州脇街道と呼び、鎌倉街道の枝道と考えている。奥州脇街道という名称を記した資料は見られないが、このルートの地



小田原街道から分れた佐野道旧道

理的位置ならびに川保対岸に上道の枝道が来ていることからみて、機能的には中道(奥州街道)の脇街道と考えても自然ではないであろう。

道興は千塚を経て、大島字山王の「杉の渡」で

II 道の推定

足利道は、利根川岸の千代田町上五箇と足利を結ぶ道である。「其東山の駅路は、上野国新田駅より、下野国足利駅に達する。此れ便道なり。而るに枉げて、上野国邑楽郡より、五箇駅を経て、武蔵国に至る。事畢りて去るの日、

前の矢場川であり、それは渡良瀬沖積低地の中を木戸から足次と台宿との間を通り、千塚を経て板倉町へ流れていた。(利根川治水史) そうすると、道興は千塚で渡良瀬川を渡ったことになるのである。

佐野道は、館林の法泉寺東で小田原街道から分かれ、市街地の中を加法師までほぼ東西に走る。加法師付近は、やや旧街道の雰囲気が残る。ここから細内までは館林・藤岡線が直線状にのび全く旧道の面影はない。細内から千塚・寄居・大島を経て杉の渡に至る旧道は、耕地整理で直線化した部分もあるが、比較的旧景をしのばせる状態が残っている。

4 足利道



寄居の旧道

渡良瀬川を渡って対岸の船津川へ向かったと考えられている。(館林市史)とところで、渡良瀬川の本流が現河道に定着したのは永禄年間(一五六〇年代)の大洪水後と推定されている。(利根川治水史)、「近代足利市史」第一巻) 道興の旅行はその変流より約八十年前であるから、現河道は渡良瀬川の本流ではなく、足利より東の中小河川を集めた川であったと推定される。したがって、その当時「杉の渡」が存在したか疑わしい。当時の渡良瀬本流は、寛文以前の。当時の渡良瀬本流は、寛文以前の。当時の渡良瀬本流は、寛文以前の。



玉取神社東を通る旧道

又同道を取り、下野国に向う。続日本紀の五箇駅は古くから千代田町の上五箇とされた。(新編武蔵風土記稿)この上五箇迂回ルートは宝龜二年に廃止されるが、その後中世に入っても上五箇―足利間は永く使用されたものと思われる。とりわけ南北朝から室町時代には、足利基氏・氏満・満兼・持氏が四代にわたって関東公方として関東地方を治めたから、鎌倉と北関東との間には軍事的な交通がかなり行われた模様である。

応安元(一三六八)年の宇都宮氏綱の乱のとき、足利氏満は鎌倉―武蔵府中―足利―佐野―栃木―宇都宮へと軍を進めた。康暦二(一三八〇)年小山義政の乱では鎌倉―府中―村岡(熊谷市)―足利―佐野―小山のルートを取り、翌水徳元年、義政再度の反乱のときも同じルートをとっている。至徳三(一三八六)年、小山若丸の乱のときも府中から足利―佐野ルートであった。(以上、「足利の世界」による) 氏満の四回の出兵ルートは、鎌倉街道―道からの枝道を村岡まで北上し、荒川を渡って利根川―上五箇―足利という線になるであろう。

この上五箇―足利間の道は、おそらく旧東山道を踏襲したものと推定される。しかしこの間の通過地点の記録は見られない。両者を結ぶ道は二本ある。①中野コース、上五箇から鍋谷―鞍掛―狸塚―光善寺―中野(以上群馬県)―県―福居―朝倉―足利 ②篠塚コース、上五箇―赤岩―福島―篠塚―藤川―秋妻(以上群馬県)―県以下同じ。細谷清吉は古代官道直線説をとれば中野コースが考えられるとする一方、坪号老談記

(安永二年)付図には篠塚コースが記されていることも指摘している。(中世の邑菜町)

筆者は次の理由で篠塚コースをとりたい。仮にこの道が旧東山道でないとしても、中世の足利道はこのルートであったと推察する。

① 篠塚コースは細谷が既に述べたように秋妻の二子山古墳、石打の松本古墳、篠塚の長柄神社、福島、八丁の古代住居跡群、赤岩の光恩寺および堂山古墳などこの地域の主要な古代、中世関係の史跡を連ねている。

② 上野国神名帳邑菜郡にある正一位長柄明神は、尾崎喜左衛門によれば篠塚の長柄神社あるいは大泉町古水の長良神社と考えられている。(「上野国神名帳の研究」)また、瀬戸井の長良神社は、周辺の宮附十二カ村の総鎮守であった。(「千代田村史」)両社とも篠塚コースに位置している。

③ 篠塚コースには、室町時代を中心に鎌倉時代から安土桃山時代にかけて在地土豪の城館跡が多数分布する。北から秋妻城、横田館、藤川城、石打城、蛭沼城、篠塚城、右馬助館、舞木城、赤岩城と連なる。中野コースには千原田古塁、中野城、川島館、橋本館がある。両者を比較すると篠塚コース沿線の方が政治的により重要性が高いと思慮される。

5 古戸道

東山道が新田駅から上五箇へ迂回していたころの東山道筋を古戸道とした。東山道はその後、新田駅から足利駅へ直進するように変更されたが、上五箇迂回道は中世に於ても利根川の古戸渡しへ通じる道として存続、利用されていたと思われる。

古戸道のコースは次のように推定される。古戸渡しから古戸村へ入り、その北方で旧御所所在地と推定される古水へ通じる道と分れて高林へ向う。高林から三入を経て岩瀬川へ行き、ここで蛇川を渡ると道は藤原久へ北上する。藤原久からは台地のへりを通り、新野を経て寺井で東山道へ出たものと推定

する。

古戸渡しは、近世の古戸・桐生道の玄関をなす渡船場であったが、中世に於ても重要な渡津であったことは疑いない。その起源は明らかでないが、古くは長井渡と呼ばれたらしい。長井渡のことは治承四(一一八〇)年足利又太郎忠綱が宇治川の先陣の時に、昔、足利と新田義重が組んで秩父を攻めた時、長井渡を馬で越した故事を語るところに出てくる。(源平盛衰記)「新編武蔵風土記稿」には「建久四(一一九三)年頼朝武蔵国入間野にて追鳥狩せさせ賜ひ、直に下野国那須野へ赴騎ふとて、利根古戸の渡し掛り、三月二十七日当社(妻沼聖天宮)へ参詣云々とある。また「古河志」には建武二(一一三五)年八月二十日、下野国小野寺八郎右衛門頼道の出した着到状に「右於武蔵国長井渡、十九日馳参候畢」と記されている。

古戸渡という名称は、享徳五(一四五六)年正月、古河公方足利成氏が新田の岩松右京大夫持国あての書状に「然者相拘古戸渡候者」とあるのが初出とされる。天正十二(一五八四)年小田原北条氏の金山城攻めでは、三月十八日先陣の北条氏照が古戸渡しを越えた。同年七月二十日、北条氏と由良との和議となり、国繁、頼長兄弟が解放されて小田原から金山堀成の時もこの渡しをこえた。

(2) 新田・佐波・伊勢崎・前橋

1 下堀口から新田町へ

尾島町下堀口南で利根川に早川が合流する。合流点の左岸堤防あたりが旧鎌倉街道である。下堀口西で早川堤防から分かれ、浄蔵寺の西を通り左手に畑を見ながら進み、最初の三差路を北西に折れて尾島町市街地南端の道をとる。右側に魚錦商店、左手(南)の河口歯科医院のある丁字路を北にとり、そのまま尾島町の大通を横切り北上する。大通りを横切る部分はやや東はす

II 道の推定

先は耕地整理のため鎌倉街道をたどることはできないが、かつてはここから王子製鉄東の櫃子集落の東を通り反町薬師とその東の村田との間を抜けるような形で蛇行しながら北上する道があった。

2 大館から新田町へ

上武ゴルフ場の東からほぼ北東にすすんで現在の太館の消防小屋と結ぶ道があって、これが鎌倉街道といわれていた。今は住宅が建ちこの道はない。消防小屋の東から安養寺に向かって蛇行しながらやや東に傾き北上する道が旧道である。大館を抜けると野菜畑が広がって目差す安養寺の明王院の森が望める。明王院の西、日進化学工業との間を通って国道三五四号線にぶつかる。ここを東に折れ旧道を百五十メートルすすみ、北側の森下商店の西を北に入る。二百メートル先の丁字路を東に折れ五十メートル先で再び北に向かう。粕川集落内の十字路をやや北東にすすむ感で直進し石田川を渡る。そのま



尾島地内鎌倉街道（河口農科医院付近）

前に折れるようになっていたので、しまや食堂の東側の道をたどるようになる。町を抜けると石田川を渡るあたりから水田がひらけ展望がよい。中根集落を抜け東武鉄道伊勢崎線を渡り、さらに北上するとゆるく西方にカーブしながら上田集落にたどりつく。集落の西で道が東にややカーブしはじめるあたりに庚申塚二基のある三差路があるので、ここを北西に入る細い方の道に入る。やがて東西に走る旧幣使街道（現境町—太田線）にぶつかる。ここから



大館より安養寺に至る道

ま北上してしばらくいくと東武鉄道伊勢崎線にぶつかり、ここから宅地化のため旧道をたどることができない。ここからは住宅地をよぎるかたちで木崎十字路へ通じていたが今は道がない。木崎十字路西角から木崎小学校北門へと結ぶルートが旧道であるが、宅地と学校敷地となっていて道はない。木崎小学校の北門から北上する道で再び旧道に戻り、前方に王子製鉄を見ながら大通りを進む。この大通りは直線状になっているが旧鎌倉街道は多少ずれる形であった。

3 徳川から境町へ（長楽寺く境町を含む）

王子製鉄の南西門の所から旧道は同工場敷地内に入り、生品神社から南下し、反町薬師の西約二百メートルに至る道の南端部丁字路に達していた。

上武ゴルフ場へ徳川から入る道がこのルートの起点となっている。ゴルフ場ハウスから北西にすすむ道を通り、早川を渡ると道は真北に向かい、徳川の集落内の十字路に出る。東南角のガソリンスタンドの前を北上し徳川の集落を抜ける。このあたりから道は大きく西にカーブし途中蛇行しながら北々西にすすむ。左手前方に長楽寺の森がみえ、まわりは野菜畑で目差す世良田集落がよくみえる。世良田の集落に入っししばらくすると、道は大きく右に曲りほぼ北上する。東南角に文化四年の祠があり、西方向に長楽寺山門を望める十字路を、さらに北上すると東側にガソリンスタンド、西側に大川商店のある所で国道三五四号線に出る。ここを東に折れ明王院に至る道も鎌倉街



徳川より世良田への道



旧街道

道であったかもしれないという説もある。ここから西に同道をたどり世良田十字路を越えてしばらくいくと北側に中華料理店があるので北折する。約百五十メートル北に進み、最初の十字路を西に折ればすぐに早川である。早川を渡って境町に入ると、すぐ北側にてんぶら屋がある十字路に出る。やや北にずれて西に入る道をたどると国道三五四号線にぶつかる。ここから旧道は国道を斜めに過ぎ真西に通じていた。現在は宅地があつて道は現存しない。そこで国道をやや西に行つて南に折れ、国道と並行する一本南の道に出る。角に開口客店のある所で再び旧道をたどることができる。店の西に向かつて進むと、やがて左手に旧例幣使街道道標があり、さらに北側に郵便局がある。しばらくゆくと丁字路となる。前方はとりよし商店、ここを南に折れ、すぐに西に折れる道があるのでこれに入る。角に小屋商店がある。あとは道なりにすすめば境小学校の北を通り、国道三五四号線にぶつかるところまでが確認された旧道である。

このルートには先の小屋商店の所で分かれる支道がある。小屋商店から南下し、やや道が東にカーブした所にある丁字路を東に入る。角に今井商店がある。この道は改修されてかなり広くなつており法興寺、境町農協の南を通つて東進する。農協の東あたりで、旧道は宅地化のためなくなつてしまつた。旧道はここから南東の米岡神社の北に通じていた。米岡神社の北から、東前方に長楽寺の森を望みながら早川の熊野橋を渡り、世良田集落の西端にたどりついた所で、舗装道から分かれ南東に入る。農道を約三百メートル進んで旧銅山街道に合流するまでが確認されている。

4 角瀬から上福島・下之宮へ

角瀬集落内では岩倉橋から県道藤岡玉村線を北上するものと、角瀬八幡宮のやや東を堤防から北西へ進む二つの旧鎌倉街道がある。東の道の方が古い道路形態を残している。集落の北端で県道に合流し、玉村町市街地の東端、下新田の十字路に至る。この十字路から東西南北すべての方向へ向かう道路が旧鎌倉街道といわれるが、東西に伸びる道は例幣使街道として報告されているので重複をさけたい。十字路をそのまま北に進むと、新しい玉村のショッピング街を経て県道高崎・伊勢崎線に至る。東南角がガソリンスタンドである。ここを東に折れ福島橋の手前でやや東に入り利根川を渡つた。(当時は小さな堰にすぎなかつた)上福島集落の南西部に福島橋のたもとから伸びる堤防がありそれに沿つて北側にある道が旧道である。この道を東にたどり集落の中央あたりで小川を渡るあたりで北に折れ、県道玉村・大胡線に入り、北方にすすむあたりまでが確認できる鎌倉街道である。

一方下新田十字路から例幣使街道を東進した道は二軒茶屋集落内、萩原モータースの向かい、原酒店の北で例幣使街道と分かれ、東へ進む。集落を抜けて小川をまたぐ形の変則四差路を真北に折れ、住吉集落に向かう。北方に住吉神社と金藏寺の森が水田のかなたに見えるのでわかりやすい。四差路

II 道の推定

玉村町字貫の東のはずれから一直線に北上し、玉村町市街地内の国道三五四号線にぶつかる、角に赤川酒店がある。ここで国道を東に二〇メートル程行けば北側に玉村高校入口の看板があるので北に折れて北上する。すぐに玉村高校東側に出る。校庭の北のはずれから旧道は北西方向にすすんだが、今は水田となつてたどれない。ここから北西にある板井集落の東南端トナミ運送倉庫の所まで県道高崎・伊勢崎線をたどつて行くしかない。トナミ運送のはず向かい、たつみや食堂西の道を県道から入り、そのまま北にすすめば集落の中をややうねりながら利根川まで旧道をたどることができる。ここにかつて板井渡しがあり前橋方面へと向かった。

5 字貫から板井へ



二軒茶屋より住吉に至る道

から百メートル程で今の道から離れ住吉神社の参道に結ぶように旧道があったが、現在は水田と化している。住吉神社の前の東西道路を東にすすむ。これも旧道とやや異なるが、ほぼ沿う形で新しい農道があるので、これをたどるとよい。住吉の集落を抜けると一直線に下之宮東林堂廟に伸びる道が、だいたい旧道の位置に一致する。ここから下之宮渡しによつて伊勢崎方面へ向かうところまで旧道が確認できる。



大久保遺跡

田畑の中を北に向かって進み、現在関越自動車道予定地のため発掘が進められている吉岡村大久保遺跡の中を通過しており、駒寄川の南から鎌倉街道が七〇メー



鎌倉街道七日市付近

前橋市池端町八塚で牛頭川を渡ると、吉岡村大字大久保吉開戸である。牛頭川の橋から道は一面田畑の広がる中を一直線に北に向かう。七〇メートル程で畑の中に大きな牛舎が道の西側にあり、道の東側には雑木の茂る小丘がある。女塚と呼ばれる古墳である。南面に「史跡、女塚」の標柱が見られる。この女塚から鎌倉街道に沿つて女塚と呼ばれている中世の水路の遺構が南に延びている。牛舎の手前あたりから鎌倉街道は、農道から離れて、女塚の脇の

1 (3) 渋川・吉岡 吉岡村から渋川市街地へ

トル程発掘されている。駒寄川の宮田貯水池の真中を横切り、三宮神社の東約一〇〇メートルで住宅地の中を曲りながら北に向かう。ここから関越自動車道予定地の東側となり、約三〇〇メートルで、左折すると小倉で主要地方道高崎・渋川線に交差する。佐渡奉行街道は信号を直進し、宿を出た所で三差路となる。直進、左折ともに古い道で、いずれも国鉄渋川駅附近で再び合流する。

三差路を左折する道を行くと、四〇〇メートル程で午王川に出る。上越線の踏切を越えると南部幹線道路に出る。交差点を直進し、水田の中を五〇〇メートル行くと茂沢川である。茂沢川を渡り五〇〇メートル程で中村の集落西側に延命寺がある。延命寺前の通りは、狭い道であるが中村の集落の中心で、中之町から早尾へと家並が続いている。早尾に入ると、大きなケヤキがそびえる早尾神社がある。この西側の道を二〇〇メートルで国道十七号線に出る。国道を横切っているが古道は、渋川駅構内を斜めに横切り日通渋川支店裏から三〇〇メートル程で庚申橋である。

八木原宿へ戻り、直進する道を行くと、街道は東に向かい、上越線を越えると午王川である。榎田橋を渡り水田の中を北に向かうと、南部幹線道路の交差点に出る。信号を直進すると茂沢川の蜂島橋である。橋を渡ると道幅は狭くバラス道である。この農道を七〇〇メートル行くと中村の富作で、国道十七号線に出る。国道を横断し東側に出て、河岸段丘の下の農道を四〇〇メートル程で化学工場となり、工場から二〇〇メートルで大崎に出、渋川駅東で先の街道と合流する。

2 渋川市街地から南牧村へ

渋川市の旧渋川村、金井村には鎌倉街道の伝承地が残っているが、旧渋川村分の道筋となると明らかでない。



下金井鎌倉街道 発京付近

慶長十八(一六一三)年に渋川宿の町割がなされた。「植野塚最初掘立御普請之事」に「梅木谷戸を渋川宿を出入」とあるように、この梅ノ木や関下、坂之下等か



下金井鎌倉街道 虚空蔵付近

らもたくさんの民家が移され、上、中、下三町二四〇間の宿場が完成された。ここに鎌倉街道に変わる新しい佐渡奉行街道が宿場への往還として付け替られた。慶安二(一六四九)年には、安中藩によって一四五間の新町が下之町に続き町割られ、大きな宿場となり、二、七の六斎市や馬市も立つ、この附近の中心の村となり、各村から渋川宿に道が集まってきた。

また、利根、吾妻両河川の度々の大洪水によって、川沿いのこの地域は地形を変えている。

近現代に入ると、上越線、吾妻線の建設工事による軌道の土盛や、国道十七号線のバイパス建設工事、都市計画による道路の拡張や付け替え等、新しい

II 道の推定

街造りによって、田畑は住宅地や工場地に変り、大崎から阿久津に至る区間の推定は困難であるので、阿久津の八坂社から推定してみたい。

東電阿久津発電所の北側の道を、国道十七号線より東に二〇〇メートル程行くと八坂社の石祠がある。この境内には桜の古木が二本あり、巨安となる。この八坂社の両側に狭い市道があり、北から西に向かうと阿久津の公民館分館の南側へと結んでいる。公民館分館は神明社の境内に建てられており、分館の北側に神明社の本殿がある。公民館分館の角を右折して北に向かうと七〇メートル程で国道十七号線に出る。ここで国道を横断し、市道を西に向かうと五〇メートル程で四つ辻に出る。直進する道は、渋川市立北中学校前を通り、県道渋川・原町線に至る。鎌倉街道への道は右折して北に向かう。三〇〇メートル程行くと、ゆるいカーブで西方に向かい、約二〇〇メートルで金井発電所からの送水路と交差する。また、水路と並行する国鉄吾妻線の踏切を越えたと、鎌倉街道と呼ばれる道路に出る。

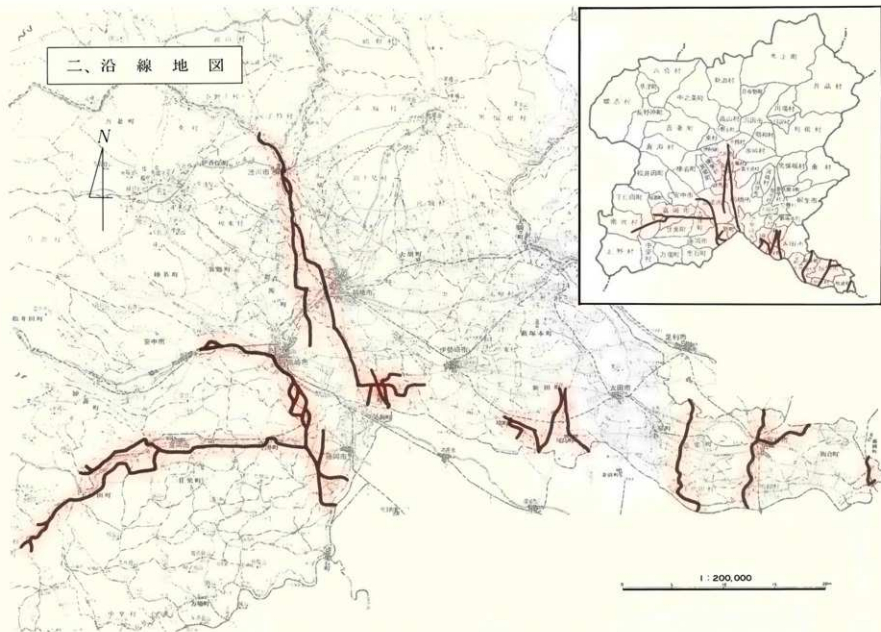
鎌倉街道は、扇状地の段丘下を西北西から東南東に走る道路で、吾妻線や送水路も並行しており、段丘上では西方五〇〇メートルのところを県道渋川・原町線（旧三国街道）が並行している。

交差点から約三〇〇メートルで、板の木下に大きな石堂がある。虚空蔵である。逆川を渡り三差路となる。三差路を西に向かうと、金井本町で県道渋川・原町線に至る。道を東にとって、吾妻線の踏切を越えすくに左折し、吾妻線の東側に並行する農道を北に向かうと、二〇〇メートル程で、南西から北東に走る農道と交差する。ここで再び吾妻線の西側に出る。ここから金井の八坂神社の方向へ、畑の中を一直線の農道があったが、耕地整理によって道路が付け替えられ、昔のおもかげはない。この間約四〇〇メートルである。

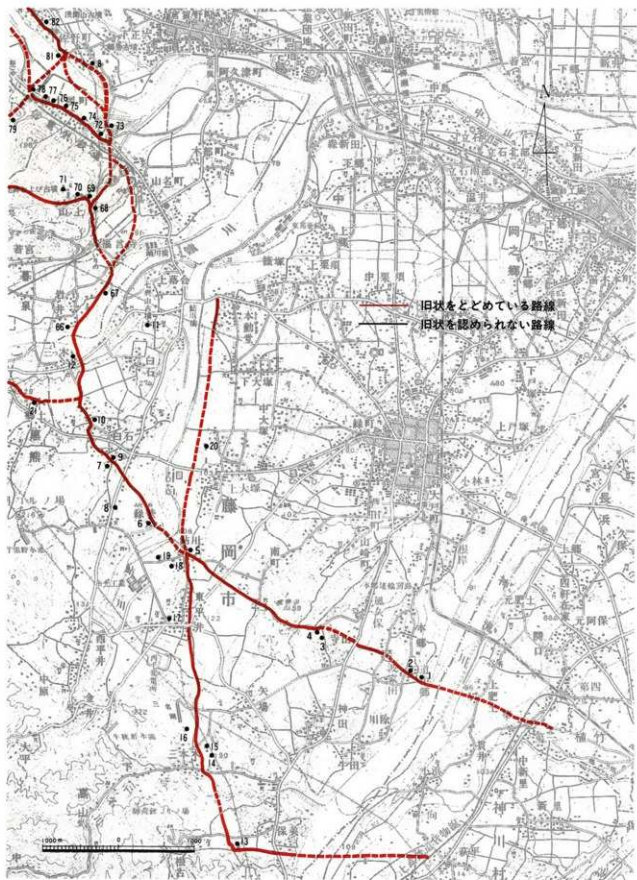
八坂神社北の集落の東を通り、四〇〇メートルで三差路となる。西に坂道を上ると、金井宿の本陣で、現在児童公園の南側に出て県道渋川・原町線に

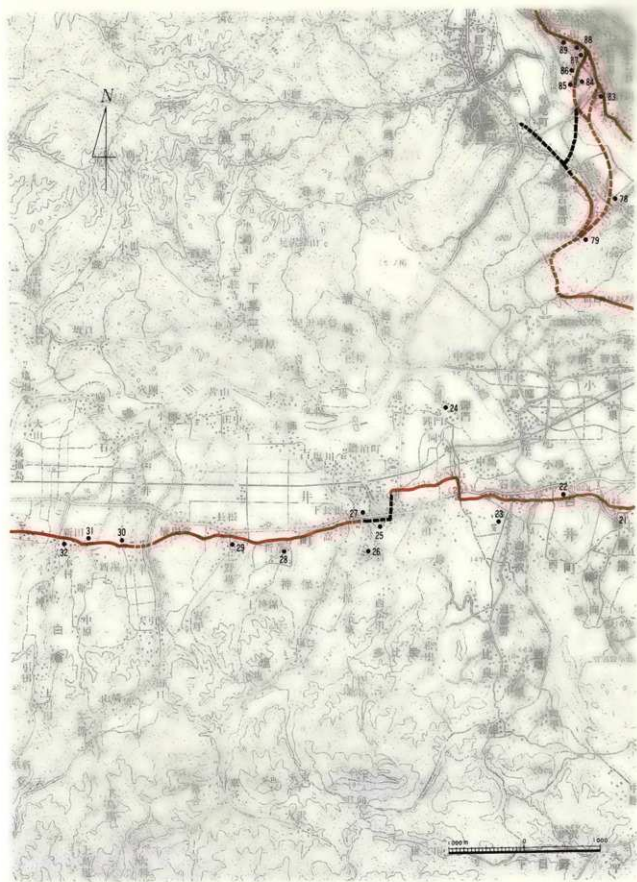
合流する。街道は北に坂道を下り、吾妻線の踏切を越えたと、南牧の共同墓地があり、墓地の手前で左折し、吾妻線に並行する東側の道を直進すると七〇〇メートル程で南牧の空ヶ橋関所跡である。この道も吾妻線の建設工事や東京電力金井発電所の建設工事で鎌倉街道は付け替えられたことが考えられる。

二、沿線地圖

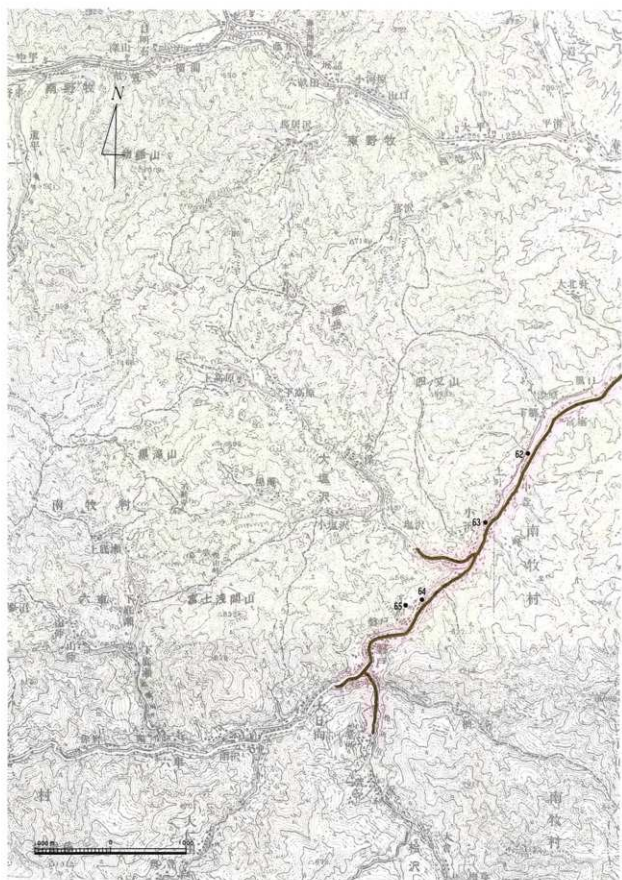


旧道の推定

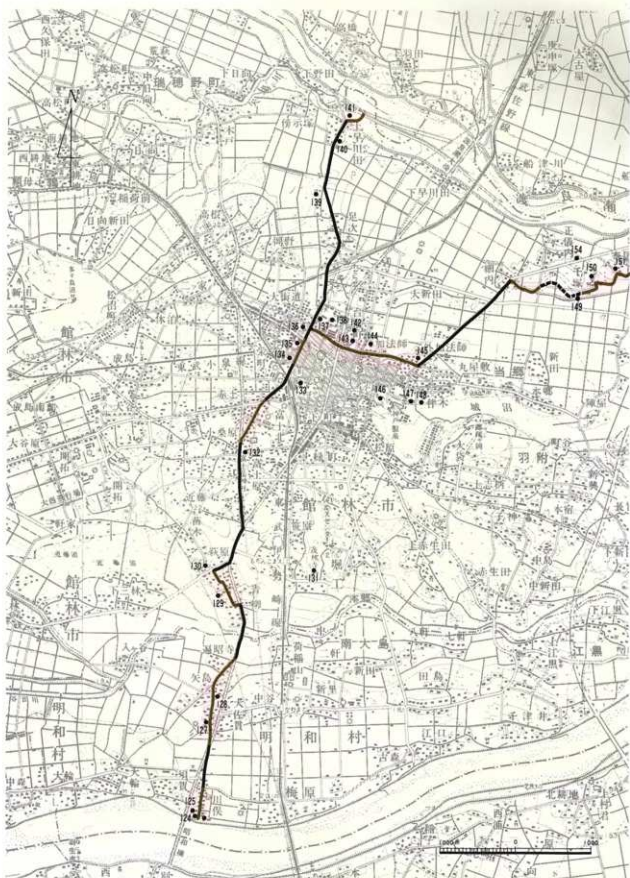




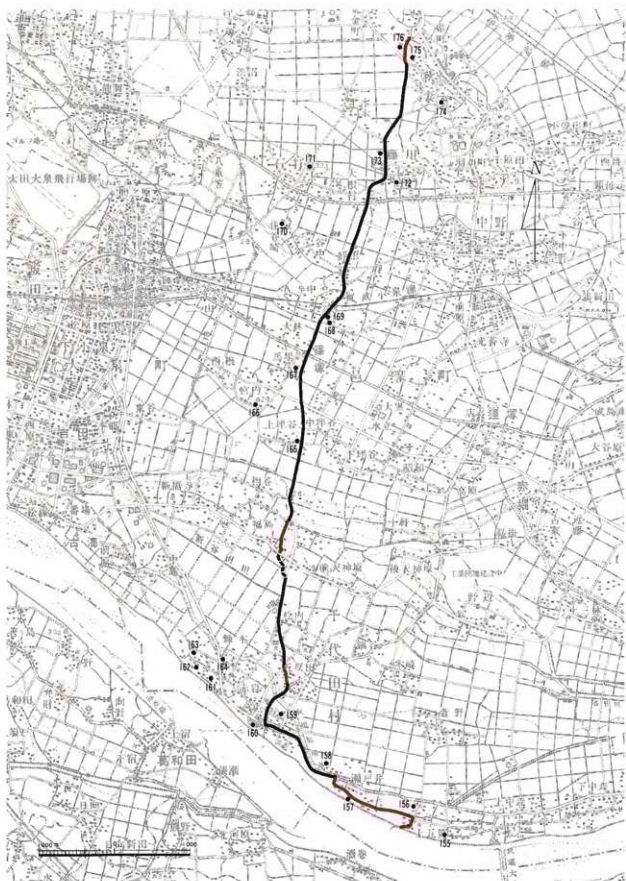
II 道の推定

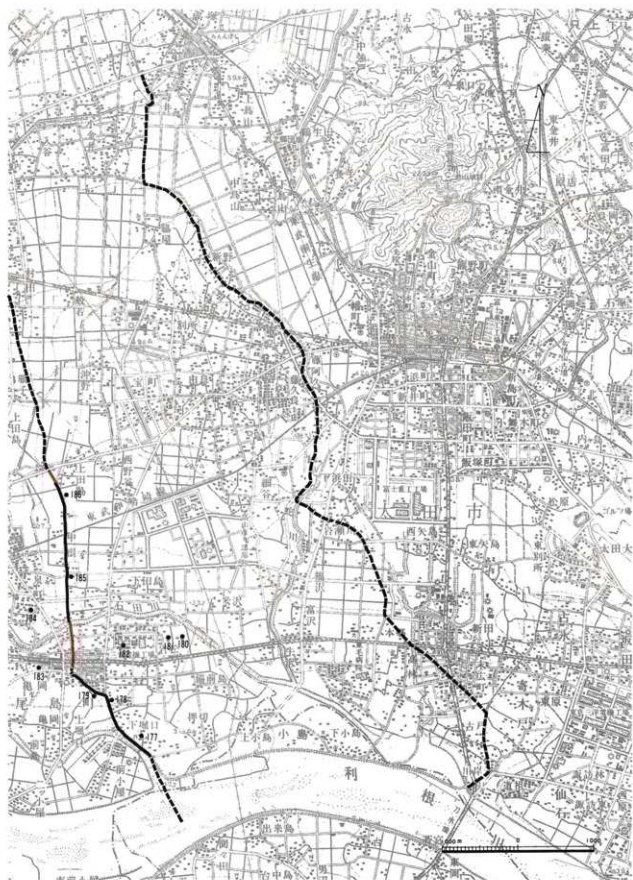






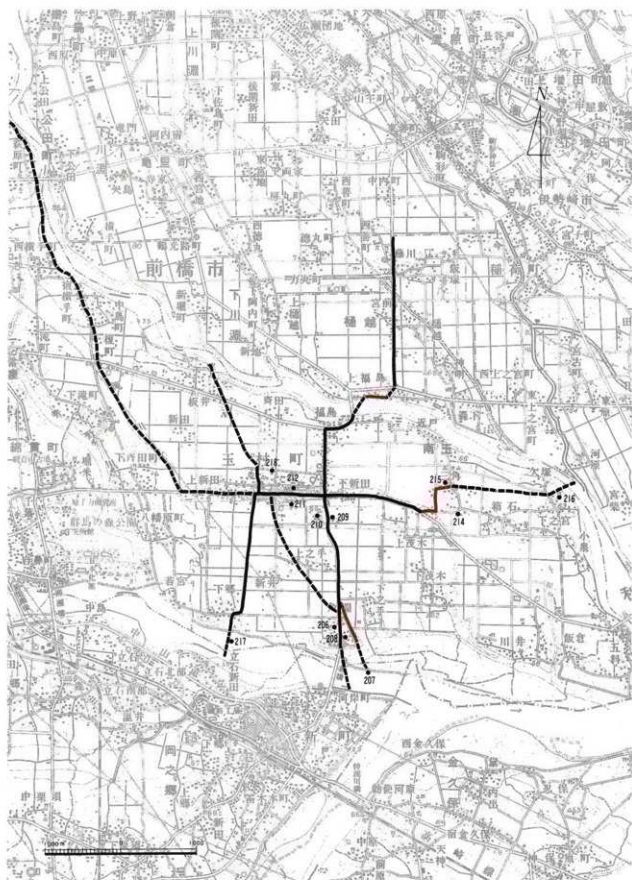
II 道の推定



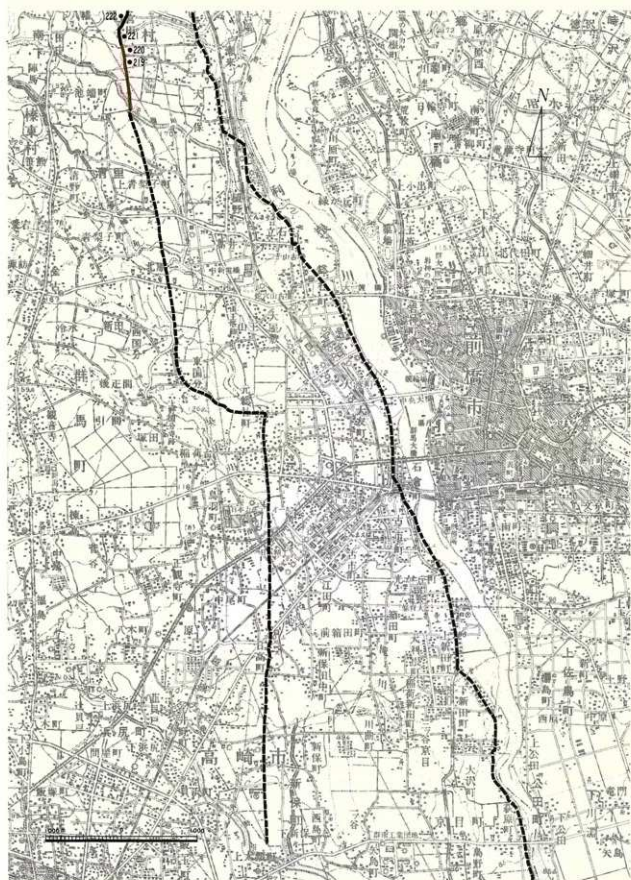


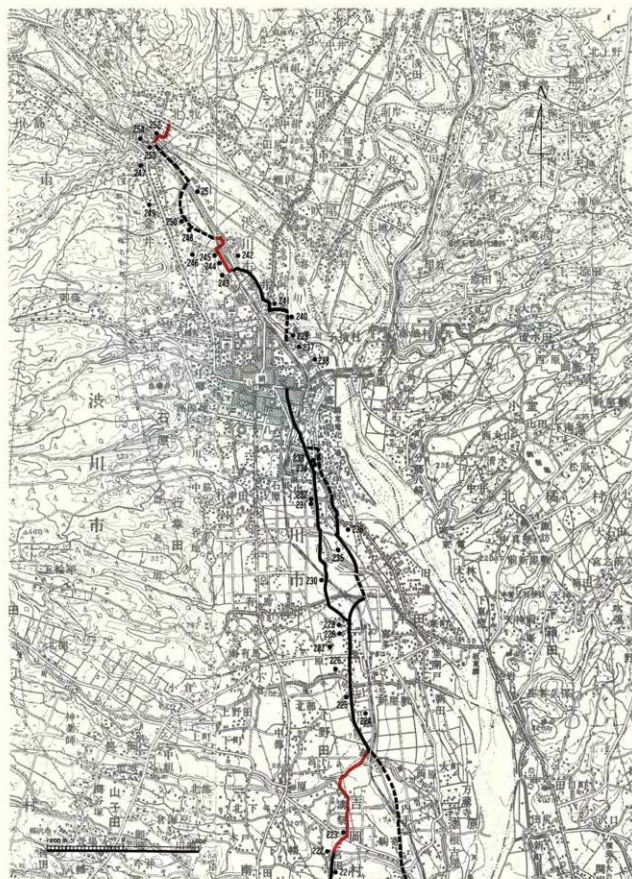
II 道の推定





II 道の推定





III 鎌倉街道の現状と文化財

一、本 道

1 本郷から鶴川瀨三ツ木へ

鎌倉街道は、防衛よりも行政的に必要な道故、諸公用を速やかに果し得るため、目的地まで事情の許すかぎり、直線に近い道であつたろうと思う。

既に、七、八百年の歳月を、経過しているため、その後の天災、又は支配領主による、変動工作等も加わり、現状の調査は、推定と表現したい。

群馬県内で、鎌倉街道の伝承は、各地に幾筋もある。

昨年、埼玉県で調査した、鎌倉街道のうち、上ツ道は武蔵町田、府中を経て、児玉郡神川村肥土の神流川まで、記載されている。

群馬県側ではこの肥土から神流川を渡って、藤岡市本郷道中郷に通じる道を、この先の道筋の郷村でも鎌倉街道と呼んでいる。

神流川堤防から、西方に向かう直進の道の正面には、険しく聳える牛伏山を望む。その右後方に、峨々たる妙義の連山、榛名、浅間山等、目標の対象となつたことと思う。

川から西へ屋敷裏を通つて、約二〇〇メートル進むと、藤岡・川除線市道の十字路で、この十字路右角の畑の中に、村に伝わる葵八幡宮という社がある。

今からおおよそ、八百年前の寿永三(一一八四)年正月の寒い日、この街道を疲れてはた母子と、数人の付き人が牛車と共に、西へ向かつていた。この



梵字阿弥陀三尊
右 延慶三年十月 年次不詳
左 画像板碑
(右の板碑と一対か)
土師社から川除に向かう市道
十字路手前右側にあり

延からも鎌われ、機を窺っていた、同系、源頼朝の一族に京都を追われ、三十一歳の若さで、近江の粟津で敗死した。
夫を亡くした葵御前は、追手をのがれて、上野、多胡庄の一族の所へ、隠れようとしてやつとここまで来た。あと三里(約二キロメートル)で到着だったが、不運か、坂道で牛がつまづき、前足を折つて倒れ、その上抱いていた子に、ひどい熱がでて途方にくれ、止むを得ず石橋の下に隠れ、土地の豪族中里弾正の所へ、助けをもとめた。

そこへ追手の一団が追いついて、子ども泣き声で発見され、傍らの畑に引

母子こそ、源氏の大將だった、木曾義仲の奥方葵御前と、その子の落ちぶれた姿であつた。
夫義仲は、京都に誇る平氏一族、追討の一番手として、京都周辺に名を馳せ、朝日將軍と謳われた。しかし部下の暴卒により、市民は勿論朝



藤岡市本郷道中郷

(英御前を乗せてきた牛がこの坂道でつまづいて動けなかったのが牛伏坂という)

き出されて、抵抗できない母子と付き人全部を無残に斬り殺した。

土地の人も目をそむける程の、葵御前の最期に、そこに葵八幡を建て、代々土地の者達が供養を重ねてきた。

その後百二十五年位過ぎた、応長元(一二二一)年前後か、葵八幡の両側に、一対と思われる板碑がある。

向かって右の板碑は、高さ一、八メートル、幅〇、三九メートルの緑泥片岩で、仏体は三尊(梵字)銘は応長元(一二二一)年である。

向かって左の板碑も、高さと同幅と石質は、右の碑と同じで、仏体は来迎弥陀一尊立像面で、碑文は四行に刻られ、

其仏本願力 聞名欲往生(無量寿)
皆悉到彼国 自致不退転(経巻上)

以下略

このような板碑は、鎌倉幕府創立に貢献した、関東武士団の創成で、創始は十三世紀初期あたりが初発

で、延文年代(一二五〇年)

から応安年代(一二七〇年)

は、全盛期で非常に沢山発見

されている。しかし十五世紀

初期の、応仁、文明年代(一四六八年ごろ)になると、数

が非常に少ない。中世に大流行して、中世に退潮した供養

である。

元に戻って、犠牲になった

幼児に、まつわる伝説はいろいろ、今も伝えられている。

この葵八幡宮から、西へ一〇〇メートルくらい進むと、少し曲った上り坂になる。ここで牛がつまづいたという、坂のそばに、牛を葬ったが、その塚の大樺から、牛の苦しそうな、うなり声が聞えたという。(藤岡の民話)

坂道をおがると、また平らな道となり、約一〇〇メートルで、藤岡市立美九里東小学校東門にでる。街道はこの校庭のまん中を横断して、西門の所へ

ぬけたが、現在は校庭垣根の南へ道を回した。

西門の所は、北方の土師神社が分かれてきた牛田へでる市道である。この市道を横断舗装された幅五メートルの道を西へ、約五〇〇メートル進むと、

県道前橋・長瀬線にでる。

この県道を横断して、更に西へ三〇〇メートル程進むと、曹洞宗竜田寺の裏にでる。しかし、現在は道も狭く、雑木、藪などが生い茂っている山合いで、通行していない。

村の古老は、この薄暗い道を、鎌倉坂と称している。又この街道の南は小字名寺山で、北は別所という。

通行者は遠回りであるが、北方の新道を利用して、竜田寺裏へでる。ここで鎌倉街道と一緒に、現在幅一〇メートルの舗装道となる。

これから西へ進む立派な舗装道は、旧街道を拡幅した道路で、ゆるく右へカーブしながら、庚申山丘陵の南面を、約七〇〇メートル進むと、視野の開けた庚申山の西にでる。

この庚申山は、室町初期の城跡ともいうが現在は藤岡市総合公園になっている。北面には珍しい樹木が植えられ、適当の水量に恵まれたひょうたん池

には、大きな緯経等数種が遊泳し、運動施設は子供用アスレチックスが多数

作られ、テニスコート八面、他に団体に使用できる良く整備された、サッカー場、勤労者体育館等が、新設され、市民ばかりでなく、市外の方々の利用も

歓迎している。

庚申山西から坂を下って、西北に約五〇〇メートル進むと、県道藤岡・上

III 鎌倉街道の現状と文化財

日野線の十字路となり、ここを横断して西方へ、約四〇〇メートルくらい進むと、地名鮎川の変則十字路にでる左角は老舗吉野屋である。

この吉野屋の所から、西北に直進して、約一五〇メートル進むと、鮎川(川名)にでる。

現在この鮎川に水量が少ないのは、農業用水等のため、上流の日野印地の取水口から、隙道によって、約四キロ下流の金井地区にある。牛秣貯水池に大部分、更に東方約三〇〇メートル先の三名湖へも、補充水として送水している。

この鮎川を渡って、ゆるい坂を上ると、緑塗ですぐ左側に、藤岡市指定重要文化財、天明三(一七八三)年、浅間山大爆発の模様と、その被害を刻んだ、千部供養塔がある。建立したのは、大爆発より九年後の、寛政四(一七九二)年、当地の名主齊藤八十右衛門雅朝である。

千部供養塔の所は、北と西に道が分かれる。西へ約三〇〇メートル進むと、東平井から板倉に向かう十字路があり、ここを横断して約五〇メートル直進すると、美国神社の参道となる。この参道の左側に、道祖神が約四十基が並列している。これは地元の堀口伝兵衛が、万延元(一八六〇)年に発願し、百基の道祖神を、自分の屋敷近くの道路にたてたもので、石材は南毛特産の緑泥片岩が多く、大きさはいろいろ、各基に第何番と番号が入れている。

明治初年太政官布告によって、道路に立ち並んでいる信仰物などが禁止されたので、鎮守の美国神社及び墓地に移したという。

元に戻って、千部供養塔の所を、西北に約六〇〇メートル進むと、県道倉賀野・金井線の十字路となる。

十字路を横断して、西へ約三〇〇メートル進むと、白石から緑塗にある小学校へ行く、幅四メートルの通学路にでる。

この学校道を左へ、約二〇〇メートル進むと、真言宗大聖峰寺がある。本尊は薬師如来である。寺前道東角に、年号不明の将棋の駒に似た梵字だけの



変形板碑がある。
戻ってさきの十字路を横切って、西北に約二〇〇メートル進むと、国道二五四号線にでる。この国道は東西の道で、白石の本村は、道北に集中している。

この白石地区はやや丘陵地帯で、大古墳小古墳は群馬県内でも、筆頭にあげられる程数が多い。

国道を横断し、北へ約一〇〇メートル進むと十字路となり、これを右に約五〇メートルで吉良上野介の館跡にでる。

吉良氏は、延宝二(一六七四)年から、元禄十五(一七〇二)年まで、白石郷の内、八百四十石を領し、家臣長松氏に治めさせた。

(1)多野郡志

戻って北へ約五〇メートル進むと、直進と左へ曲る農道があり、これを西に進むと、吉井・富岡方面に通じる。鎌倉街道と伝えられるが、この道は支道である。

幹線は支道に折れる所を、更に北へ五〇メートルくらい進み右に折れ、現在の新道と約五〇メートル程はなれた、東側の農道を北へ進む。

この道は狭く、約四〇〇メートル程進むと、薄暗い林の下り坂となる。この薄暗い林の右の高い所に、若宮と呼ばれる祠がある。この下り坂道をくだると、平らな道となり、約三〇〇メートルで、県道下栗須・馬庭線の幅広い舗装道となる。ここは三ツ木という。

この県道を右へ約一キロ進むと、落合で右側に景観雄大な、国指定史跡の七奥山古墳がある。



七興山古墳 (国指定史跡)



藤岡市三ツ木と吉井町岩井の間を流れる鍋川
(遠望は山名、山の石碑方面)

六世紀中期の前方後円墳で、全長一四五メートル、高さは前方部が一八メートル、後円部は一七メートルで、封土二段で、山全体に適当に松、桜等が植えてあり、特に松は美しい。また芝生もきれいで、児童、生徒の遠足場でもある。

東上り口に、五百羅漢があるが、何時頃、誰がしたか、首が全部ない。戻って、三ツ木の十字路を北へ約五〇メートル進むと、右は通林寺だったが、今は廃寺となり、桑原になっている。左道端に慶応元(一八六五)年の大型の庚申塔がある。

この庚申塔から、北へ約一〇〇メートル進むと、鍋川の右岸となり、街道は鍋川を渡って、吉井町岩井へたという。

1 本郷から鍋川三ツ木へ

No	名称	年号	備考
1	道祖神		藤岡市本郷

2 保美から本動堂へ

神流川対岸の、埼玉県神川村寄島から川を渡って、藤岡市保美城戸を上って、江戸期、保美の永代名主清水家の正門前が、鎌倉街道と伝えられてきた。鏡、刀及び古文書は、永代名主的な役割を果たした資料として、重要である。正門前を西へ、約一五〇メートル進むと、県道前橋長瀬線十字路となるが、その手前左の高台に、清水家建立の観音堂がある。

この観音堂の前に、明徳二(一三九一)年三尊種子碑が一基ある。

県道を横断して、ゆるい坂道を上り、西北へ約二五〇メートル進むと、村社稲荷神社南へでる。

神社南を約五〇メートル西へ進むと、T字路となり、左へ約二〇〇メートル進むと、右三〇メートル西に、曹洞宗天陽寺がある。この寺の中興開基は慶長年間、依田肥前守信盛という。

本尊は子持薬師といひ、墓地に依田夫妻の墓もある。またこの依田氏は古くから、保美を知行していた。

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
観音講供養 庚申塔	七興山古墳 古具上野介屋敷跡	地藏様	南無阿弥陀仏碑 四面梵字板碑	庚申供養塔	千部供養塔	凱施馬頭尊	百番供養塔	禁裏酒碑	葵八幡社	
天保八年	慶応元年	寛保元年	不詳	寛政四年	元文五年	天明二年				
	国指定史跡	藤岡市白石	大聖峰寺	藤岡市重要文化財	白石	藤岡市重要文化財	藤岡市重要文化財	竜田寺		

III 鎌倉街道の現状と文化財



保美清水家武州川の上り口



三本木曹洞宗諏訪山興福寺を望む

さきの所を右折して、八〇メートル程進むと、東西に走るゴルフ場道路となる。ここを横断して、ゆるい坂を上り、約一〇〇メートル進むと、右東方に保美用水沼があり、中央から左はゴルフ場の買取地となる。旧街道はここから西北に向かつて、ゴルフ場の東端を、横断して三名川を渡り、三本木に向かう。

しかし通行止めのため、一旦保美の県道に戻り、北方の神田の三光屋の所を左へ、県道神田・下日野線を西へ、約八〇メートル進むと、左は美九里西小学校、北側一段高い所は、浅間山古墳である。

この古墳から発掘された、金ピカの直刀は、奈良県橿原神宮に神刀として、奉納されているという。

学校裏を西へ、約七〇メートル進むと、三本木で村人口に、東南(保美)方面からの幅三メートル程の道がある。この道は街道で、一旦県道にて、僅か一〇メートルで、北へ右折する。



三本木地内道しるべ
(この道しるべの所を右へ曲ると東平井に通じる旧街道)

この西角に、一回国勢調査記念路の道しるべがあり、左鬼石秩父古道と、後矢場東平井古道と、いずれも古道を象徴している。

右折して約一〇〇メートル進むと、右側の山を背に、高さ一、六五メートル、幅〇、六五メートル、石材緑泥片岩、銘は「明和八卯天、青面金剛塔、七月庚申日、が一基西向きに建立されている。石碑の前は参道で、この奥に曹洞宗興福寺がある。開基開山は万治二(一六五九)年という。

また石碑の所を左へ折れて、右へカーブしている幅三メートルくらいの草路は、旧道で、約八〇メートル進むと、寺西で参道からきた舗装道と一緒になる。

この道を北へ、約三〇メートルで、新道矢場、三本木線となるが、その中間左側に東向きで、台を含めて高さ一、五メートル、幅〇、四五メートルの、庚申供養塔がある。年号は明和元(一七六四)年とある。この年は甲申である。

さきの新道を横断して、幅一五〇メートルくらいの、北へのびている水田の中央を、北へ約四〇〇メートル進むと、県道前橋・長瀬線寺山から、名勝三名湖に通じる観光道路にでる。

三名湖は周開約四〇〇メートルで、藤岡市観光協会では、最大規模の深緑公園として、力をいれている。

三名湖への観光道路を横断すると、また草道となり、梅林の中央をくぐり



東平井信号機付近
(道祖神跡を頼いに真っすぐ北へ旧街道)

僅かな草道を通ぎ、一旦鮎川東平井間の市道と一緒に成って、約三五メートル進むと、老舗吉野屋の所で、東方から来た鎌倉街道幹線と一緒に成る。この先は字名鮎川。一緒になつた所は変則十字路で、その五〇メートルくらい手前左に、真言宗光厳寺に入る参道がある。

参道入口に、高さ三、五〇メートル、幅一メートル、厚さ〇、二メートル、石質緑泥片岩で、天保一四(一八四三)年建立の、御

ぬけ、約五〇メートル進むと、矢場地となり、矢場地に沿つて少し西へ進むと、三名湖から東平井方面に通じる、舗装道と一緒に成って、北へ進む。

この舗装道は、街道を拡幅して、約八〇〇メートル進んだ所で、県道上日野・藤岡線に、通じている。

この県道は、すぐ右手に変則四差路があつて、信号機もある。

県道を横断して北へ、堀沿いに進むのが、街道で、道幅は、約二メートル、横断した左手の道と堀の間に、自然石に刻した慶応元(一八六五)年建立の、道祖神がある。

道祖神碑から、北へ約三〇〇メートルの間は、現在も通行しているので、草もなくきれいな道である。三〇〇メートル程きた所から、道が狭くなり、その上屋敷木が道と堀に覆いかぶさつて、通行者をはばんでいる。

この暗い道を歩いて、約八〇メートル進むと、道は元の広さになるが、通行してないので、葉草道となり、両側は桑原である。

嶽山座王大権現の大碑と、庚申塔四基がある。

光厳寺は現在無住だが、寺には高さ一メートル、幅〇、三二メートル、嘉元三(一一三〇五)年の三尊(梵字)板碑と、これより稍々小さい、応安元(一一三八八)年、三尊梵字の板碑があるが、最近諸仏盜難が激しいため、本寺の岡之郷観音寺で、保存している。

寺の裏手は「塔の内」といい、上杉氏の鬼門除けの塔があつたというがいはない。

十字路から、幹線と一緒に成って、北西へ約八〇メートル進むと、右側の田と桑原の間に西向きで、金井の恭書の、凱旋馬頭尊の碑がある。

この碑の所から、幹線と分かれて右へ、水田の中央を通つて鮎川沿いに、北へ進んだと伝えられているが、鮎川の度重なる大水により、いまは確認できない。

しかし迂回して、北へ約一キロ進むと、国道二五四号線に成る。

この国道から、南の流された方向を見ると国道から約一〇〇メートルくらいは、旧道が農道として残っている。

国道北の方は、かなり残つていて、道の両側は水田である。

国道から約三〇〇メートル進むと、右側に家が建っている。家の中に群馬県指定の中大塚縄文時代敷石遺構が、保存されている。

この遺跡跡附近から北の一部を、中大塚のうち小字名鎌倉という。

ここから北へ、約七〇メートルの草道を進むと、右二〇〇メートルくらい

の所が、藤岡市立美土里小学校である。

学校裏東は学校道の十字路で、西北の角は、藤岡市農協美土里支所、東北角は、藤岡市美土里公民館で、この地名は下大塚という。

戻つて小学校を右に見て、左は鮎川で、川と道の間隔は、約三〇メートルで、更に北へ八〇メートルくらい進むと、県道藤岡・寺尾線の東西の道路に成る。ここは本動堂である。

鎌倉街道伝承は、この県道北にはない。この辺りから北は、鮎川もその先を流れる。鮎川も川幅が広がって、今は農地になっているが、河川堤防のない時代は、大暴風雨の度に、浸水又は練湖の川になったと思われる。

2 保美から本動堂へ

No	名称	年号	備考
13	稲荷神社	明和八年	藤岡市三本木
14	曹園金剛塔	曹洞宗	藤岡市三本木
15	興福寺	明和元年	藤岡市三本木
16	庚申供養塔	慶応元年	藤岡市東平井
17	道祖神	天保十四年	藤岡市鮎川
18	御嶽山碑		藤岡市鮎川
19	三笠山刀利天碑		黒指定史跡
20	縄文時代敷石遺構		

3 藤岡市から吉井町へ

白石西部の幹線から、西へ支線道となつて、幅約二メートルの道を、七〇メートルくらい進むと、浄土宗光心寺裏にでる。

光心寺は、寛文七（一六六七）年、緑林村名主堀越三右衛門が、幕府へ懇訴願願のかどにより、この地で旭刑された地である。同村民は弔慰のため、寛文八（一六六八）年に、この地に万日堂を建てた。これが後の光心寺となる。本尊は阿弥陀如来である。

明和六（一七六九）年、多胡郡内三十三番札所縁歌記 第三十三番

きから心もすみてながき世の

ねむりやきめんありあけのかね

右は、黒熊郷の吉田広斎が願主、一番から三十三番の、願番札所と地形の配分が、秩父三十三カ所と、ほとんど同じである。

光心寺の裏を、北西に約二〇メートル下ると、国道二五四号線の下り坂、



吉井町小串 光心寺本堂

通称赤坂の裾にでる。

この国道を横断して、山の北の日影道を、約五〇メートル進むと、

T字路になる。街道はこの先をぬけていたが、いまは通行できない。この辺りは小串中央の南部である。

いったん、入野農協の東の道へ回つて、南へ三〇メートルくらいの所に、東からの評道と、西は農協裏まで道がある。

しかし、農協うらと石神は、幅は狭いが、深い谷があつて、通行できない。石神から小串への道は、この谷迄来ているから、昔は橋があつたと思われる。

石神へは、この深い谷に掛る、国道二五四号線の土合橋を渡り、上り坂道と共に、約五〇メートル進むと、左に折れる道がある。

この道は、多比良方面への町道で、吉井町の主要道である。旧道は国道から、約五〇メートル南を西へ進む。

道幅三メートルくらいで、舗装されており、右よりに約一五〇メートル進むと、石神の家並はずれとなる。

ここから西へは、直線の道だが、コンクリート道で、幅は約二メートル、約三〇メートル進むと、T字路となり、右折して約五〇メートルの所で、国道（信号機付）を横断し、約六〇メートルの所を、左折する。

左折した道は西へ進み、矢田坊墓地居宅の裏を更に、八〇〇メートル程度進むと、主要地方道高崎・吉井線の十字路にでる。

この十字路を右へ、約八〇〇メートル進む、右折した大宮神社境内に、国

指定特別史跡、多胡碑がある。

多胡碑の石材は、通称天引石といい、薄茶褐色でやや軟度である。

碑の文字は次の六行八十文字である。

弁官行上野国片岡郡緑野郡甘

良郡甘三郡内三百戸都成給年

成多胡郡和銅四年三月九日甲寅

宜左中井正五位下多治比真人

太政官一品禮積親王左大臣正二

位石上尊右大臣二位藤原尊

右碑文を略説すると、朝廷では、上野国の三郡のうちから、三百戸をさいて、一郡を新設し、羊という人に給して、多胡郡と命名した。発令は和銅四

(七一)年である。(多野藤岡地方誌)

旧街道十字路に戻って、これを横断し、僅かな所を左折、南へ約一五〇メートル進むと国道にでる。

右西角は、吉井警察官幹部派出所である。

この辺から西は、古くからの宿うちで、碁盤の目のような地形に、家屋が密集している。中世期、近世期の領主によって、町並みが整備改造されたりして、古い道も移動したり、消えたりしたと思われる。

派出所前の国道を、クランク状に横断して、上野山延命寺裏を西へ、約二〇〇メートル進むと、多胡神保へ通ずる。県道生利・吉井線の十字路にでる。

この十字路を横断して、約三〇メートル西へ進むと、道左りが、浄土宗法林寺で、寺前を右から左へ、クランク状に西へ進むのが、旧道である。

法林寺の開山は、天正八(一五八〇)年で本尊は阿弥陀如来、現存する鑄造阿弥陀如来立像は、高さ〇・八一メートルで、吉井町の重要文化財となっている。

法林寺西から、約七〇〇メートル進むと、東折茂の十字路にでる。ここを

南西へ約三〇〇メートル進むと、右側に観藏院と云う、共同墓地がある。

この墓地の久保家内に、高さ一・一六メートル、幅〇・三三メートルの磨減した板碑がある。延文三(一三五八)年で、主尊は金剛界大日如来で、下部に多数の漢字が刻みつけてある。

十字路に戻って西へ横断し、約六〇〇メートル進むと、安坪方面に行く。長根神社手前十字路にでる。

長根神社は、中世期長根城の一郭・良(うしろ)の方向に建立されている。鬼門除けを意味しているが、神社名は地名からであろうと、伝えられている。

神社裏を西へ行く道は、幅一・五メートルの昔ながらの粗道で、約五〇〇メートル進むと、字大谷の恩行寺の裏へでる。

恩行寺は以外に古く、正和二(一一三二)年、平重盛の家臣が開基し、以後各時代の領主の恩祿によって、現在に至っている。

又この辺りは、古墳台地で、恩行

寺の墓地を上った所に、木の大きな切り株がある。墳丘の上に立つと、西から北は実に見晴らしがよい。

この寺裏から、約五〇〇メートル進むと、字権現堂の西、天引川に掛る橋にでる。この橋から西は甘栗町となる。



吉井町長根 長根神社鳥居 (東向)

III 鎌倉街道の現状と文化財

3 藤岡町から吉井町へ

No	名称	年号	備考
21	光心寺	天正三年	吉井町小串
22	富田家文書		石神
23	入野遺跡	和同四年	県指定史跡
24	多胡碑		国指定特別史跡
25	延命密院		吉井町吉井
26	仁叟寺		吉井
27	吉井町郷土資料館		吉井
28	板根碑	延文三年	折茂
29	長根神社		長根

4 吉井町から甘菜町へ

吉井町権現堂西を流れる天引川にかかる天皇橋を渡ると、甘菜町下平になる。この下平と国道とは、約五〇〇メートル離れていて、大体この間隔で、西に進む。

下平に入って、約二〇〇メートル進むと、一般県道金井・小幡線十字路となり、西北の角は、甘菜町立新屋小学校で、その西に大日堂が、東向きに建立されている。その境内に、一对の燈籠がある。弘化三（一八四六）年、下平女人講中とある。

御堂の西にほそい、三途川が流れている。橋を渡ると、右へゆるくカーブする道となり、道南の高い山は、仁井屋臼倉城跡である。

臼倉城々主は、関東管領山の内上杉家の重鎮で、西毛の備えとして、小幡、安中、倉賀野等四強の一つであった。（『甘菜町史』）

城跡から西へ、約五〇〇メートル進むと、字新田となり、南方にある臼倉神社に通じる十字路がある。



甘菜町多井戸（小川）仁治3年板碑



甘菜町福島 笹森神社

この十字路を横断して、約五〇〇メートル進むと、甘菜町立第一中学校前になる。学校西は菱割十字路で、右手前の校庭角に、笹遺跡がある。

この笹遺跡は、昭和三十六年（一九六二）年、町立第一中学校新築のため、今まで畑地であった所を整地したところ発見された。壘数種、碗、砥石等、多数発掘された品物は、県立歴史博物館に保存されている。

笹遺跡十字路を西へ横断して、約三〇〇メートル進むと、小川の名字名多井戸で、右側に、板碑等がある。

板碑の石材は、秩父・甘菜に産出する緑泥片岩で、高さ三・五〇メートル幅〇・八八メートルで、台石二段の上に建てられている。年号は仁治三（二二四二）年で、金剛界五仏種子結衆と、解説されているが、現在磨滅がひどいため解説はむづかしいが、甘菜町重要文化財に指定されている。

板碑に向かって、左側に高さ一・五〇メートル、幅約〇・四〇メートルの、同系石材で、宝暦五（一七五五）年に、建てた石碑がある。

奉納願礼百処供養塔とあり、左右二行に分けて、多井戸村、同行人とある。木板碑前を通へ、約二〇〇メートル進むと、上信電鉄福島駅から、南方梅の木方面面を西へ、一般県道下高尾・小幡線の十字路にでる。

この十字路を横断して、約二〇〇メートル進むと、右に折れる道があり、やや進んでから左に曲がると、笹森神社がある。

笹森神社は、天長二(八二五)年、京都伏見の稲荷神社からの勧請と伝えられ、祭神は倉稲魂神・豊城入彦命という。

小幡氏(戦国時代)が、社領若干を寄進、慶安二(一六四九)年、徳川第三代将軍家光公より、先例によって社領を朱印とし、明治維新を経て、現在も例祭は賑わっている。

戻って三差路から西へ、約五〇〇メートル進むと、字二日市の光源寺裏にでる。

この二日市の西村はずれが、甘葉町と富岡の境界となる。

4 吉井町から甘葉町へ

No	名称	年号	備考
30	女人護燈籠	弘化三年	
31	板碑	仁治三年	
32	願礼百所供養塔		
33	笹森稲荷古墳		甘葉町指定史跡

5 甘葉町から富岡市へ(和合橋まで)

光源寺と鎌川にそそぐ雄川の間隔は、約三〇〇メートルある。

この間には、古墳群があるが、ほとんど発掘され、出土品も散逸し、唯風化した石棺が、古墳上に残されている。

雄川を渡って、約一五〇メートル進むと、田篠十字路となり、ここを横断

して、僅かな所の右側に、馬頭観世尊、庚申塔等六基の石碑が、道路に面して祭っている。

この碑の前から、約三〇〇メートル西へ直進すると、原田篠で右側の集荷所の敷地内隅に、俗にいう天引石、高さ〇・四メートル、幅〇・四メートル、厚さ〇・二メートルの大目と書いた古碑がある。風化したので、年次は不詳である。その碑と並んで、同系の石に刻された、高さ〇・六メートル、直径約〇・三メートルの丸柱の上に、六面仏体画像を載せて、その上に六方の、笠を載せた古碑がある。年次は見落したが、江戸中期と思われる。この集荷所から、約三五〇メートル進むと、下り坂の橋にでる。この川は下川で、上り坂は蛇行状の道で、のぼりつめると、又平坦な舗装道で幅約五メートル程ある。

平坦な道を、更に約五〇〇メートル進むと、右側に内匠地

区の公会堂がある。その西に、虚空蔵様が、東向に建立されている。



富岡市原田篠公会堂前大日碑
(年次不詳) 六面体地藏



富岡市内匠町公会堂前
元禄12年 南無阿弥陀仏
寛政12年 背面尊

この敷地内に、高さ二・六メートル、幅約〇・四メートルの石碑がある。供養文字は四面に、太字大書である。道に面した南

III 鎌倉街道の現状と文化財

面は、南無阿弥陀仏、西面は、三界万靈有無二縁乃至法界、北面に、千日經
向万燈供養とあり、万燈供養の右側に、元禄十二(一六九九)年、左側に月日
がある。

この大碑の左右にも、背面尊(寛政十二年)、又大碑の前には、笠を載せた、
高さ約〇・七〇メートル、幅〇・三〇メートル程の天引石で、天保十四(一
八四三)年に建立した寒念仏供養碑がある。

内匠公会堂から、僅か西へ進むと、主要地方道富岡・万場線の県道十字路
となり、ここを横断して、約三〇メートル進むと、左右二股の道となる。

この二股の所に、やや丸い自然石の碑がある。直径一メートル程の面に、
約〇・八メートル程の凹型の凹型を彫り、その面を磨き、丸中央に縦書で背面尊と
箱字で、大書してあり、文化巳とあるから、文化六(一八〇九)年である。
なお、碑面全体に仏法的文字が、小さく刻んである様にも見える。

この二股の道を右へ、約五〇メートル進むと、下高瀬の南北からの細い
十字路になるが、右角に高さ一・三〇メートル程、幅〇・三五メートル程の、
緑泥片岩の粗材で作った、梵字を頭に背面金剛塔が孤立している。

この目立たない十字路を、西へ直進約三五〇メートルすると、中高瀬の村
入口にでる。この村入口右側に、高さ約一・二〇メートル、幅〇・六〇メー
トルの自然石に、安永四(一七七五)年に建立した、道祖神碑がある。

この碑の先は、農家等が両側にあつて、その家を進むと、県道南後箇七
日市線の十字路にでる。

十字路手前左側に、立太子式記念に建てた道しるべがある。高さ〇・八〇
メートル、幅〇・二五メートルで、旧字名が鮮名に、彫られている。

県道十字路を横断し、西へ直進約一〇メートル行った右側に、自然石で大
きさ約〇・七〇メートル、年号明和九(一七七二)年建立の、道祖神がある。

道祖神碑から、桑原畑一枚先に、大小二基の、ガスタンクがあり、その奥
に今一基、大型のガスタンクを建設中である。



富岡市横瀬町分背面金剛明王 (年次不明)

ガスタンクの南方、約八〇メー
トルの所に、富岡市立高瀬小学校があ
る。

旧道はガスタンクの前を西へ、約
七〇メートル途中クランク状の、
幅五メートル舗装道を進むと、横瀬
に向かう。右へ角道に、緑泥片岩
の粗石、高さ約一・四〇メー
トル程の石碑、寛政八(一七九六)年建立の、寒夜唱号碑がある。
王碑がある。年次は磨滅していて、
解説できない。

差路となり、左進南角みに、天引石高さ一・三〇メートル、幅〇・六〇メー
トル程の石碑、寛政八(一七九六)年建立の、寒夜唱号碑がある。

この交則五差路、西南に向かう道が旧街道で、約一五〇メートルで、新し
い和合橋の袂にでる。

5 甘藷町から富岡市へ

No	名称	年号	備考
34	庚申塔	寛政十二年	
35	大日碑	中世	
36	万燈供養塔	元禄十二年	甘藷町原田窪
37	背面尊	寛政十二年	井戸沢
38	寒念仏供養碑	寛政十二年	富岡市井戸沢
39	道祖神	天保十四年	下高瀬
	背面金剛塔	文化六年	
		不詳	
		明和九年	高瀬

6 富岡市から南蛇井へ

現在、田島と上高瀬の間に流れる鑛川にかかる、和合橋は新しい橋で、旧古道の橋は、この橋より川下約五〇メートルくらいの所にあつたという。

旧道は川を渡ると、左右二股に分かれる。左は田島の家並のまともつた所にて。右は南蛇井方面、川測から約四〇〇メートル進むと、開通したばかりの、パイパス十字路にて。この辺りは一ノ宮という。

パイパスを横断して、約一〇〇メートル進むと、東西の国道二五四号線にて。この国道を、西へ約一三〇メートル進むと、右に曲がる幅約一〇メートルくらいのコンクリート舗装で、急な上り坂道がある。この坂道を、通称



一の宮買前神社



下神成庚申塔(寛政12年) 他三基



糸手入口(庚申塔などが埋土のため半分埋まっている)

栗の木坂という。

坂の途中右側に、県立自然科学資料館がある。

居を上りつめると、上野国一ノ宮である。買前神社の大鳥居が見える。鳥居の下は石段で上るが、車は大鳥居の西に、約五メートルの道があるので、ここを上る。

石段を上って、約八〇メートル進むと、買前神社の正門前にて。

買前神社の祭祀は、経津主神と女神比売大神の二柱という。創立は今から、約一四五〇前の安閑天皇の御代と、伝えられている。

本殿拝殿楼門共に、寛永十二(一六三六)年、三代将軍徳川家光の再建になり、その後、元禄十一(一六七五)年、五代将軍綱吉の代に、大きな修理が加えられ、現在に至っている。社殿のほとんどが、国の重要文化財になっている。

神社が下り宮なのも有名である。例大祭は、三月十五日である。

旧街道は、神社前を西へ進み、約一キロの所の右側に神社があり、その境内入口左に、安永四(一七七五)年に建てた、高さ約一・三〇メートルの燈籠があり、道に面した所に、諏訪大明神と彫られている。

この神社の前から、西方へクランク状の下り坂道を、約六〇メートル下ると、宮崎公園の西にて。

公園西入口の左手に、約〇・七〇メートルくらいの丸い自然石に、道祖神と彫つてあり、その文字に朱が塗つてある。

III 鎌倉街道の現状と文化財

ここから西へ、約三〇〇メートル進むと、右へカーブする道の、高さ二メートルくらいの崖に道祖神と如来像の石碑がある。年号を調べるには梯子が入用。

右にカーブした所を通ぎると、又西への直線の道となり、約三〇〇メートル進むと、下神成の村はずれ右側にお堂があり、その隅に、五万日供養碑など五基あるが、年号は摩滅していて読みとれない。

更に西へ、約四〇〇メートル進むと、神成中組となり、農家の石垣の上に、高さ一メートル程の天引石に、正一位稲荷大明神と、道に面して彫ってある。年号の所がセメントで修理されて、安永か安政かわからない。

中神成の石碑の所から、西へ約三五〇メートル進むと、字糸手の村はずれになる。この辺りは道の両側に、高さ一メートルくらいの石垣がある。

左手の石垣の上に、自然石に刻んだ道祖神碑があるが、年次は不詳である。右側の高い所に、共同墓地がある。

墓地上りくちに、高さ約〇・七〇メートルの、百庚申供養碑がある。台石厚さ約〇・一〇メートルの所に、賛同者氏名が列記してある。右横面に天保十四（一八四三）年とある。

糸手から約二二〇メートル、南西に進むと、吉田公民館前の斜め十字路にでる。

この変則十字路を右に折れて、約二〇〇メートル北に進むと、左側に鳥籠神社の鳥居があり、その僅か先の右へ曲がる角に道しるべがある。

この道しるべは、嘉永七（一八五四）年建立、高さ〇・七五メートル、幅〇・二三メートル、黒系の固い石、塞り供養と右一ノ宮三十一丁、左松井田三里とある。

戻って県道を横断して、西へ約五〇〇メートル進むと、左側の道に面して、宝暦七（一七五七）年建立の、双体道祖神が一基ある。この辺りは小字名一本榎という。

双体道祖神の所から、更に西へ約五〇〇メートル進むと、南蛇井の奥まった所にある、最興寺の参道入口にでる。
ここから奥の梅沢峠の方面は、伝承がほとんどない。

6 富岡市から南蛇井へ

No	名称	年号	備考
43	貫前神社	安永 四年	国指定重要文化財
44	諏訪大明神	江戸初期	富岡市一ノ宮
45	背面尊	不詳	国指定重要文化財
46	道祖神	不詳	富岡市根岸
47	庚申塔	不詳	下神成
48	字基神社	安永 七年	中瀬
49	笠碑	不詳	糸手
50	百庚申供養	天保十四年	富岡市神成糸手
51	道標	嘉永 七年	中沢
52	鳥籠神社	宝暦 七年	〃
53	双体道祖神	〃	〃
54	最興寺	〃	南蛇井

7 下仁田町から南牧村へ

和合橋手前を左折して、約一〇〇〇メートル南へ進むと、鑄川右岸の崖上に、大島郷がある。この郷中に、北向観音堂がある。

伝説によると、弘仁五（八一四）年、弘法大師が、東国行脚の折、神の暗示を受けて、桂の神木で、大土の尊像三体を刻み、一体を下野（不詳）一体を信濃の別所に、この地に一体が安置されたものと伝えられている。

降つて、康平四（一〇六一）年、源頼義が陸奥に、安倍頼時・貞任討伐の折、この大土の霊夢を感じ、堂宇を建立したといわれている。

大島から野上川に沿って、約一〇〇〇メートル進むと、県道下仁田・小幡線の十字路にでる。

この県道を右へ、約一五〇メートル進むと岩染川にかかる、大塚橋がある。この橋を渡って、約三〇〇メートル進むと、西平郷となる。

この西平から、約五〇〇メートル進むと、鞘戸郷となり、更に七〇〇メートル進むと、県道両側に民家の連なる、加生郷となり、更に約一〇〇〇メートル進むと、日向郷の手前右へ折れる脇道のある所にでる。

この脇道を北西に進むと、古老が鎌倉街道と称する、鎌田郷にでる。古い道は現在の道より、稍々西を通ったと伝えられ、しかもかなりの坂道である。

鎌田から五〇〇メートルくらい、西北に進むと、十字路となり、手前左角に、高さ一・三〇メートルくらいの、寒念仏供養碑がある。この辺りから大塚郷。

大塚から西南の方向に、約五〇〇メートル進むと、田城の十字路にでる。この十字路右角に、高さ約〇・五メートルの道標がある。

この十字路を直進して、約五〇〇メートル進むと、下横瀬村落の中央に出て、南北に流れる横瀬川を渡り、天台宗米山寺の丘陵の山裾を、稍々南に向って、約六〇〇メートルの坂道を登ると、四方坂という山にでる。



下仁田町大塚地内

四方坂頂上から、左斜め南東に向って、約三〇メートル下ると、直進と右に折れる。二差路となり、その左側に、高さ〇・五〇メートルくらいの、馬頭尊と庚申碑が、一基づつある。

直進の道を南東に向って、約五〇メートル下ると、横瀬方面に行



下仁田町田城付近の道標

く間道にでる。ここを南へ一〇メートル程で、国道二五四号線から、鍋川にかかる石濁橋を渡った。県道下仁田・小幡線の幅広い、舗装道の十字路にでる。

この十字路は、稍々X状で県道を横断し、これからは南西の方向の道となり、左の高台には、みどりが丘団があり、約六〇有世帯が環境に恵まれた、生活をしている。

この辺りは、字名白山といい、約三〇〇メートル西へ進むと、岩山の村落となり、これから西方は、鍋川

と山裾の間隔が、約三〇〇メートルに拡がり、桑園及び普通畑が多く、各所に通じる十字路に、道祖神碑・巳持碑などが、多く建てられている。

岩山から西へ、約三〇〇メートル進むと、下吉崎となり、この村の兩山裾から、東西の道が、約五〇メートルの間隔で二本あり、土地の古老達は、吉崎城及び遠くは、南牧方面への、時代別の古道であると、称している。

一番山林に近い道端には、庚申塔、馬頭観世音等多数あり、現在農地のまんなかを走る東西の道は、稍々手入をして、農道として使用している。

村落中央東西の道は、舗装された道路で、車も通行できる。家並みある舗道を、西へ約四〇〇メートル進むと、上吉崎の下仁田町立吉崎公園にでる。

この吉崎公園は、中世期の吉崎城曲輪跡を多少手入して、花木を植えたりして、整えた場所。北東方向は見晴しがよい。又すぐに、三角山のように聳える、鷹の巢城跡がある。公園南面を利用して、町立保育園がある。

古道は、この保育園辺りを、西南に進んだと伝えられるが、現在は通行で

III 鎌倉街道の現状と文化財

きない。

曲輪下公園を西へ、山裾を左にカーブしながら、栗山川を渡り、南牧川右岸の大崩山（根なし山）裾を、南牧川に沿って南へ進むと、旧青倉村の跡倉手前になる。

跡倉手前で、水量の少ない青倉川を渡って、南牧川を挟んで、民家のある大桑原地区の、県道下仁田・上野線になる。

この県道、現在は道幅約六メートルの、舗装道となり、整備されているが、古代からも川沿いに道を造り、岩に当れば川を越すか、又は多少廻り道して、また川涸れにて、交通の用を足したと思う。

但し、修験者俗に天狗の異名連は、普通の者と違って、奇抜な行動と、危険な境地を走破したかも知れない。

大桑原から、南牧川沿いの県道を西南に、約一三〇〇メートル進むと、宮室となり、更に約一二〇〇メートル進むと、中の萱郷となり、更に八〇〇



下仁田町鷹の巣城砦址



南牧村千原 天台宗 慈眼寺全景

メートルくらい進むと、小沢郷に入る。道筋にある、道に沿って二階建ての、長い大きい家がある。二階の出し縁、今と言うベランダ、これは昔、楮の皮をむいた。カズを乾かすために、作られたという。

南牧川沿いの県道から、右へ南牧川にかかる小沢橋を渡って、西北に流れる。小塩沢川沿いに道がある。

この道は、県道で黒滝山不動寺へ通している。

小沢から南牧川沿いに、県道を西北へ、約一〇〇〇メートル進むと、千原郷となり、この辺りは、川北に集落が発展している。山を背に日向になって、諸面に効用が多いからであろう。

村立小、中学校の上に、天台宗慈眼寺がある。慈眼寺参道右側の石垣の所に、新田徳純書庚申塔がある。

この千原郷から、約一〇〇〇メートル進むと、楡平郷となり、県道は直進と左折の、二差路となる。

直進は、県道下仁田・白田線となり、南牧川に沿って西進し、雨沢・砥沢・羽沢を経て、信州白田町又は、佐久市に向かう。

左折の道は、今まで辿ってきた県道下仁田・上野線の延長で、楡沢川沿いに、堂所・楡沢・根草・大入道を経て、堀之沢峠・楡沢峠を通して、上野村に連絡している。

鎌倉街道は、現在の県道より、西の高い所を通過したと伝えられている。

7 下仁田町から南牧村へ

No.	名称	年号	備考
55	庚申塔	年次不詳	瀬戸
56	寒念仏供養	年次不詳	大塚
57	道標	年次不詳	田城
58	庚申塔		岩山



吉井町岩井鍋川の渡しにある道祖神



吉井町岩井



山名町山ノ上の地藏と柳沢へ下る道



根小屋町 鎌倉時代の五輪塔

対岸の三ツ木から鍋川を渡ると、吉井町の岩井である。この辺りの鍋川は川幅はあるが、浅く、流れもゆるやかで、兩岸の河原敷も充分あり、渡し場としては適している。地形的にもこのような川の状態はかなり古くから続いているものと思われ、昔から鎌倉道の渡し場として伝承があるのは当然であろう。

8 鍋川の渡しから山本宿へ

65	64	63	62	61	60	59
庚申塔	慈眼寺	〃	民家	古道(右)	鷹の巣城址	古道
年次不詳						
千原	千原	宮沢	川井	上吉崎	下吉崎	

岩井の西口には現在も河原へ下る道があり、農道として利用されている。河原敷と耕地との境に道祖神の文字塔が⁶⁴一基あり、近世までこの渡し場が使われていた事を示している。

道祖神の所から三〇メートルばかりは昔の道のままで保存されており、五メートルほどの道幅である。この道の終った所に墓地があり、現在は墓地の北に広い道があるが、旧道は墓地の南側の川寄の所を通っていた。今は廃道になり一部耕地となっている。

墓地から岩井の新田まで約七〇メートルは鎌倉道の伝承通りの道で、近年、コンクリートで舗装されたので、三メートルほどに拡張されている。右側は一段と低く、左側は二メートルから三メートルばかり高くなっており、所々昔のままの石垣が残っている。この道中ほどに真光寺と云う寺があり、道端に庚申塔、如意輪観音が安置されており、清水の湧き出している所や、新田の集落近くには古い井戸があつたと伝えられている。

III 鎌倉街道の現状と文化財

新田の集落は旧道よりかなり高い所にあり鎌倉道も坂を上って道幅四メートルほどの新しい道へ合流する。新田と八軒家との境に道祖神の文字塔が一基あり、その反対側にはかなり大きな円墳が残っている。その外八軒家には古墳が点在しており、古墳時代からすでに多くの人の生活があったのである。八軒屋から高崎市の山名町福言寺までの道は道幅もあり舗装されているが、昔のままである。山本宿へはこの道以外にないのであるが、充分な伝承がないのは、移住した人が多く道路も完全に整備されたためである。

福言寺から同じ山名町の天水までは耕地整理のため古い道はすべて見る事は出来ない。天水の入口には上信電鉄の入野駅があり、駅を過ぎると五三山の山裾を通り、上り坂を五三山を回るように上り、「ひかげ山」と「五三山」にはさまれた所で峠を少した所に地藏尊の大きな座った石像と庚申塔や双体道祖神などがあり、中世の宝篋印塔の基礎なども見られる。

五三山の中腹には鎌倉期の火葬墓の跡があり、同時代の五輪塔があったが、現在は五三山下の墓地に五輪塔のみ移転されている。この五輪塔はやや大形のもので、このような墓があると云うのは、山本宿の長老かあるいは鎌倉道を通ったかなり身分の高い人の墓であると思える。

峠を下り、柳沢の谷を渡ると道は左折して少し上り坂になる坂を上った辺りが古くから鎌倉道の宿として伝えられる山本宿で、現在二十戸ほどの家がある。以前は戸数も多かったが、五三山下の天水や山名八幡宮の近くに移住したものが多し。山本宿が宿として栄えた時代はいつ頃であるか判然としないうが、鎌倉時代に移住したと伝えられる家もあるので、同時代に宿としての機能を失い衰退していったものと推測される。

山本宿の北の山手に、「山上碑」及び「山上古墳」があり、山上碑の建立が六八一年と推定され、「山上西古墳」も同時代と云われ、山本宿の谷を取巻く山手には多くの無縁の墓地があり、中には中世ものと思われる板碑の断片等が残されている。また、山名の丘陵から、鏡川に至る平坦部には、伊勢塚古

墳群があり、鎌倉道以前果から山本宿に集落があったものと想像され、鎌倉道が開設整備された時には宿としては最も適当な条件を備えていたのである。山本宿は鎌倉時代の初期には栄えたかと思われるが、間もなく衰退していったものと推測される。それは福言寺から伊勢塚古墳群の中を直進して山名八幡宮へ出る道があったと思われるからで、山名から鳥川の本松橋辺りを渡り下佐野へ通ずる道が考えられ、距離は最も短く、難所らしい所も少ないのである。

8 鏡川の渡しから山本宿へ

No.	名称	年号	備考
66	道祖神文字塔	なし	岩井村
67	道祖神文字塔	不明	
68	地藏尊	不明	特別史跡、上野三碑中最古
	庚申塔二基	不明	
	双体道祖神	不明	
	宝篋印塔(部分)	不明	
69	光明真言百万遍供養塔	明治四年	
70	来迎阿弥陀画像板碑	辛巳	
71	山の上碑	辛巳	

9 山本宿から鳥川の渡しへ

山本宿から鳥川の渡しへはいくつかのルートが想定される。山本宿から最も伝承が残っているのは根小屋を通る道である。山本宿から少し戻り、「ひかげ山」の下の地藏尊の所から柳沢の谷に沿って下り、山名団地内を通過して、柳沢と果道の交差する辺りに出て果道と並行して一五〇メートルほど二つに分かれるのである。右は河原へ出て下佐野へ渡る道で、福言寺から八名八幡宮を通る道と合流する道である。

山名で二つに分かれた道の一方は根小屋の集落を通過する。根小屋の集落内は並行して二本の道に伝承があり、集落の途中の井戸沢辺りから上信電鉄の西側の山寄りを通る道も鎌倉道と伝えられているが、所々道として確認出来るが、廃道同様になり伝承のみの道である。

山本宿から柳沢に沿って上流へ向かい、山の中を通る道も伝承として鎌倉道と云われている。根小屋には昔から「根小屋七沢」と云われる沢があり、山が接近しているため、鉄砲水と云われる急激な水量の増加があり、そのため土砂の堆積も多く、これらの沢はすべて天井川となっているのである。「根小屋七沢」は北から、「金井沢」「太夫沢」「立沢」「井戸沢」「鹿島沢」「薬師沢」「柳沢」である。特に「鹿島沢」は「地獄沢」と云われるほどの沢で、夏季には根小屋の集落を通る道は、この七沢のためにたびたび寸断されたと考えられる。当然河川敷を通る道も通行不能になり、この様な時に利用されるのが、尾根づたいに金井沢へぬける道である。



山ノ上西古墳付近大谷と柳沢の分岐点前方金井沢への道



根小屋町白山神社の板碑

山本宿から柳沢を上ると「ぬかり沢」がある。「ぬかり沢」には右岸に少し平坦な所があり、植性の異なる樹木が繁茂しており、これらは人工的な植樹によると考えられる。井戸跡もあり、ここに人家があった事を裏付ける。柳沢の本流右岸にも人家跡と思われる所が二、三カ所あり、朝鮮系の樹木があった事も記憶されている所である。

ぬかり沢を上つても尾根に出るのは近道であるが、急坂な所があり、柳沢から分かれた「大谷」を上り、「山上西古墳」の所を通る道が主に利用されたと推定される。

「大谷」には「かまどめ」「てんびん坂」などの呼名がある所があり、須恵器が出土する所で、人家跡もあり、「でえせえじ遺跡」として、軒丸瓦、布目瓦が散布して、寺院跡説、または、泥整地として説跡説のある所である。

大谷を通ると急坂もなく尾根へ出る事が出来る。近くには尾根でありながら湧水の出る所もあり、鎌倉道の伝承が残る所以でもある。尾根づたいの道は常に通行可能な道で危険なほどの山路でもなく、「七曲り」と云われる所を下り金井沢へ出るのである。金井沢は、太夫沢、柳沢と共に七沢の中では大きな沢で、谷は深い、両岸がひらけて平坦部が多く、沢の中腹を下る事が出来る沢である。

上信電鉄の根小屋駅の近くの集落は駅が開設されて発展したものであるが、この集落の中に鎌倉道として現在も云い伝えられている道があり、鎌倉道の古道と云われる道もわずかに残っている。金井沢からこの道に入るが、沢の所の墓地には、中世の五輪塔の断片があり、集落の住宅の庭にも見られる。集落の中央寄りの白山神社には、ここにも中世の遺物があるので、鎌倉期のものである。また、観音堂があり、ここにも中世の遺物があるので、この集落が成立する以前に中世の人々とのつながりがあった事を示している。この道は、集落を出た所で伝承が消えているが、二つに分かれ、一つは佐野窪へ通じ、一つは寺尾を経て館に通じている。

III 鎌倉街道の現状と文化財



下佐野赤石付近の河原の地藏

館への道は、根小屋の上原氏所蔵の絵図（享和二年）にも記載されており、古くから利用された道であると推定される。この道は、源頼朝が館の新田義重の館へ泊つたとするならば当然この道以外にははずで、茶臼山、鶴辺台の裾を回り、雁行川沿いに館に至る。館からは和田宿を通らず、観音山裾を乗附へ出て、碓氷川の渡しを中豊岡へ渡るのである。豊岡から里見を経て吾妻方面へ至る所々に、頼朝についての伝承が残っている。この頃の和田宿は、赤坂の荘で、和田氏が城を構え和田宿と称されるようになったのは一五〇年ほど時代が下り、観音山には坂上田村磨の開基と伝えられる「清水寺」があり、延喜式内上野十二社の一つ「小祝神社」もあり、倭名類聚抄にも「片岡郡」とあり、この辺が片岡郡の中心で最も早く開拓されたと思われる。

観音山裾の道は鳥川の渡しを二度も渡らなければならぬ和田宿回りの道に比べて、碓氷川の渡しだけでよい上に、距離的にも最短であるにもかかわらず、鎌倉道の伝承を聞かないのは、常時利用されなかつたためであろう。その理由として考えられるのは、大きな谷が障害になつたためであろう。根小屋を出てすぐに「衣沢」があり、「雁行川」「羽衣沢」「荒久沢」など根小屋七沢とは比べものにならない沢があつたのである。

鳥川の渡しは時代により場所を変えているようであるが、鳥川の左岸の状況から大別して四個所に分けられる。これらの道はすべて河川敷を通るため、その部分の道については判然としない。

その一つは、山名の集落からすぐに右折して河川敷を通り、現在「一本松

橋」のある辺りを渡つたと考えられる。ここには古くから、「川龍石」と云われる大きな石が川の中にあり、信仰の対象であつた。この道は河川敷に入るまで、はっきりと道が残り、現在も利用されており、正徳二年の庚申もあり、中世、近世、現代と引続き利用されている。

川龍石の上流に「赤石」と云われる大きな石が川の中にあり、この附近も渡しがあつたと推定される所である。この渡しへの道は、金井沢を下り、金井沢と太夫沢の間から河川敷へ出る。この辺は耕地整理のため古い道はすべて姿を消し、古地図のみでその道幅を知ることが出来る。

上信電鉄の根小屋駅附近の集落を通る鎌倉道は、館への道と分かれ河川敷を北上し、佐野舟橋の伝承地である佐野橋の辺りを渡つた道と、それよりや、上流の「佐野窪」へ渡つた道がある。佐野窪の渡しは現代になつても暫く利用されており、中州もあり、川の兩岸に集落があり、右岸を「川向」と呼び、茶店や駄菓子を売る店があつたと伝えられている。

9 山本宿から鳥川の渡しへ

No	名称	年号	備考
72	道祖神文字塔 如意輪観音 地藏尊	明和四丁亥年 明治二十一年	
73	五輪梵字塔 光明真言梵字塔 五輪塔、宝篋印塔部分 春供養音面金剛塔	文化三丙寅年 正徳二年	
74	庚申塔 普門品供養塔 庚申塔	不 明 明和九年 寛政十二年	緑葉郡根小屋村
75	道祖神文字塔 如意輪観音 伊勢大塚五十度供養	不 明 明和六己丑年 寛政五年	

76	石宮 道祖神文字塔	文化十一年 明和二年	
77	庚申塔 五輪塔 道祖神文字塔	不明	推定鎌倉時代 根小屋村上組 右高崎左清水 右高崎 左清水
79	南無阿弥陀佛百万遍供養 庚申供養塔	明和丙戌年 享保十四己酉年	

10 鳥川の渡しから金井宿へ

川籠石の辺りで鳥川を渡り下佐野へ入るが、鳥川に沿って北上する。この道は国鉄の新幹線と並行する所もあり、所々に伝承の道が残っているが、ほとんど新幹線工事及び、関連工事のため旧道は残っていない。赤石の辺の渡しの道もこの道に接続するため同様にわずかに昔の様子がわかる程度である。

この道には「馬の口」と呼ばれる所や、放光寺跡（5）と云われる場所もあり、下佐野古墳群と云われる通り、大小の古墳が点在し、山上碑にある「佐野の屯倉」の土地で古くから開けており、鎌倉道の伝承があっても不思議ではない。

佐野の船橋と云われて昔から云い伝えられている渡しは、現在、佐野橋のかかっている辺りと云われている。ここは鳥川右岸の高台の端になり、佐野窪までの間は低く平坦な土地が続く渡し場として地形上からも伝承と一致する所である。平坦部の畠中にかつて「船木観音」が祭られており、現在は一畝と高い、鎌倉道と伝えられる道端に移されている。そこには、万葉集の東段にある佐野の船橋の歌が刻まれた歌碑もあり、碑の陰に古道佐野渡とある。

この碑は、文政十年の建立であるから、伝承に基づいて建てられたものである。

佐野の船橋があった所は、万葉の時代から渡し場であった事は疑う余地のない事実で、鎌倉時代になってもこの渡しは利用されていたであろうが、佐野橋の辺りと云い伝えられているのみで、確証はない。この渡しからは、先の川籠石、赤石からの道と合流し、鳥川からそれで佐野窪を迂回するように北上する。

佐野の船橋の渡しの少し上流に佐野窪の集落があり、佐野窪は以前は戸数も多く、佐野窪村として独立していた所である。それは、鎌倉道として利用された時があり、近世まで渡し場として栄えていたことによるもので、根小屋と高崎を結ぶ主要道であった。

鳥川の渡しは時代により、また、年毎に変わったと思えるが、それは鳥川の氾濫、鳥川に流れ込む、河川の変化により所を変えていると考える以外にな



下佐野町放光寺跡と言われる所の鎌倉道



佐野の船橋の歌碑 左は佐野窪 佐野の渡しへ下る

III 鎌倉街道の現状と文化財

い、それ故に渡れる場所を捜して渡ったのではなからうか。その様な所が何箇所か固定した形で現在まで伝承されているのである。

佐野窪の集落の入口には河川敷との境に地藏尊を祭り、丁字路には近年のものであるが、道しるべと道祖神の双神像があり、集落の中を通る道には馬頭観音や庚申塔がある。庚申塔のある所は三差路になっているが、古い道は農道として使われている直進する道であった。この道は途中から廃道になり消えてしまうが、上信電鉄を通り過ぎると再び道が続き、鳥川沿いに北進して来た道に合流する。

佐野窪から上佐野へ入るが、すぐに左折して和田多中になる。この辺りには特に鎌倉道の伝承はないが、昔からの道が和田多中の中心を通過している。この道にも近世の馬頭観音や道祖神があり、この道以外に古い道はなく鎌倉道もこの道か、この近くを通過していたものと推定される。

新後閑町に入ると莊嚴寺と琴平神社の間を通り、上信電鉄を再び渡る。この辺の道は幅一、五メートルほどのせまい道で、鎌倉道の伝承があるが、踏切を過ぎて城南小学校に山た所から昔の道は全く見られず、数年前まで鎌倉道として伝えられた一、五メートル幅の道も、区画整理によりなくなってしまう。このような状態は下和田町に入っても続き、市営城南球場の東の高台で再び昔の道に出る。

新後閑から下和田地区の道はすっかり消えてしまったとは云え、鎌倉道の伝承のあった道の場所は語り継がれている。その多くは、宅地内で所々四メートルに拡幅され残っている。その道はすべて高台の際を通り、地形に応じて曲っている。

野球場の上を過ぎると竜見町に入る。この道も、下は現在では人家が建ちすっかり様子が変わったが、ここは「大音寺河原」と呼ばれた所で、時には下和田地内からこの河原敷を通ったと推定される。それは崖の所々に湧水があり、飲料水として利用されたものと思われ、あるいは、近世の石仏が崖下に



若松町小万坂横の鎌倉道



若松町小万坂、坂上から竜見町方面への道

あり、道祖神の文字塔などあることから、大音寺と云う寺があったものと思像される。

大音寺河原を通った道は若松町に入り、通称下若松町と云われる所で右折する。この辺りには鎌倉道の伝承は聞かれないが、右折して上る坂を「小万坂」と云い、古い伝説が伝わり、墓地の一面に小万地藏を祭る堂があり、現在も香の煙が絶えた事がない。この墓地の北に一メートルほどの細い道があり鎌倉道の伝承があるが、坂道を横切って河原へ下っている。この道はあるいは、鎌倉道の本通りからはずれて、鳥川を渡り、石原へ出て小祝神社または清水寺の参詣のための道とも考えられる。

竜見町の崖上の道は途中で切れ、はつきりとしてつながりが見当らないが、小万坂の上の道か、それよりやや東寄りにも古い道があるので、その道に接続するものと思われる。この辺りは以前、鎌倉町と云う町があった所で、鎌倉道が通っていたのでそのような町名が付けられたものである。現在は鎌

倉町の町名はなく、若松町へ合併された。

若松町からの鎌倉道は、慶長三年、井伊直政が箕輪より城を移し、和田宿を高崎と改め城を拡張し、町の区画を定めた事によりすべての旧道は整理されてしまった。そのため、市街地の鎌倉道については記録に頼る以外に推定する事は出来ない。

鎌倉道についていくつかの記録を引用すると、

高崎寿奈子に、

高崎城郷名 赤坂村

往古比所を赤坂といふは、都の方より来りて比所へは坂を登り土も赤土なるによりて赤坂と云か、昔の通りは今の赤坂門二の宮のまへ上り、夫より今の大梁寺の方佐野村へ通る鎌倉道也(以下略)

川野辺寛著述の高崎志には、

今高崎城赤坂門ノ外ノ坂ハ、即古ノ赤坂也門内ノ南ヲ赤坂山ト云、此所ニ樓多クアリ故ニ樓ノ森ト呼リ、昔ハ鎮主赤坂明神ノ祠アリ、和田氏居住ノ頃ハ、民家其北ヨリ東南ニ立ツツケリ、是所謂和田宿也、相伝フ其頃ハ旅客確水嶺ヨリ坂鼻ヲ過テ此ニ至リ佐野ニ出シトナリ、其南ニ馬上宿(一作馬乗)植竹ノト云里アリ、是亦和田城下ノ町也馬上宿ハ今ノ代官町(郭内ニ在)ノ辺ニアリシト云植竹ノ在所サカナラス今ノ植竹ノ地ナリトモイフ、是ヨリ佐野ノ渡ヲ過テ(鎌倉街道)山名(古作山奈)ニ出ル鎌倉ノ往還也、(以下略)

更正高崎旧事記の和田往還の項に

前略、馬上宿旧趾ハ、旧三丸南ヲ方ヨリ東ニ折レ、光明寺辺ヨリ南ニ曲リ、鎌倉町ヲ云、今馬上石ハ名勝ノ名残也、此道鎌倉往還也

以上の記録から鎌倉道を推定すると、鎌倉町と云われた現在の若松町の所から光明寺の辺りを通り外堀の所へ出たと思われる。この辺が馬上宿と想像されるが、記録に竜広寺がないのは、若松町の坂上の辺りに植竹と云う地名が近世まであり、そこを植竹町と呼んでいる事から、植竹町から光明寺は北

西の方向にあり、光明寺に接する竜広寺は、光明寺から南西の方向にあり鎌倉道からはずれていたためと思われる。先の小万坂に残る道が鎌倉道とするならば、この道は竜広寺の門前近くを通過する事になり、当然記録に表わされるべきである。それ故にこの道は鎌倉道の枝道として河原へ下る道であろうと思われる。しかし馬上宿は別名馬乗宿で、源頼朝が三原の巻狩への途次、若松町の坂を騎馬武者が隊をなし駆上り戦闘の訓練をした事によるとも云い伝えられている。

馬上宿が伝説通り馬乗宿であるならば、館に泊り、石原を通り、小祝神社附近を通過して烏川を渡つたとも考えられる。小万坂に伝わる鎌倉道は烏川の渡しへ通ずる道とも思える。

若松町の佐藤病院の前庭にある石は、記録にある和田の三石の一つ方石で、別名は化石とも云われる。化石は「馬蹴り石」から変化したもので、石のあった近くに鎌倉道があり、そこを通る馬に蹴られたことによると伝えられる。この石のあった所は光明寺の東の畑中と記録にあり、すべての記録から総合して鎌倉道は、光明寺に接した東の方であろうと推測される。

外堀の内は高崎城の三の丸で、中堀の内は二の丸になる。三の丸は鎌倉道の記録にあるが二の丸については何もないところから、一部二の丸を通るが、ほとんど三の丸の中を通過していたと思われる。三の丸へ入った所は今の税務署の南で、古くは富士浅間を祠つた二子古墳があった辺りで高崎城築城以前は興禅寺の境内であった。南東方向から入った道は、三の丸内で北へ曲り、二の丸の中へ入る。この辺が古絵図にある金井宿と思われる。金井の地名については古くからあったようであるが、金井と金井宿は必ずしもその場所是一致的でない。金井宿は高崎城築城に際してすべて城内へ入るため、宿の民家は新しく区画されて本町と町名を変えた所へ移住させられたのであるが、近世の記録には金井は本町の北の字としていた。現在は東金井と云う小字が残るのみで、金井と云う地名は消失せしてしまった。金井宿があった頃、広く金

III 鎌倉街道の現状と文化財



常盤町から下並榎の筏場 左は豊岡 筏場河原
台ヶ松の名勝地が右手にあった

井の地名があったとも考えられるが、金井宿の住民が、本町に変わったのも金井宿の名を残すべく、金井の字地を新設したとも思える。古地図から推測すると、金井宿は現在の市役所西の通りで、テニスコートと郵便局の辺りかと思われ。金井宿では、京口とある京都への道、新田足利方面への奥州道、武蔵下野道、そして鎌倉道の四道が交差して、交通上重要な宿で五十戸ほどの民家があったと伝えられている。

金井宿を出て旧高崎城の赤坂中門から赤坂門の辺りを通過している。赤坂中門は郵便局の西に当るがその位置は判然としない、近くに榎郭に入る榎門があり、榎門に入った榎郭の所に二の宮の社があった。この社は古地図にもあり、高崎城築城後も引き続き同じ所にあつたものと思われ、金井宿四辻のすぐ西に位置している。

高崎は古くは和田宿と云つた、和田宿は和田氏が城を構えた事により、金井宿、馬上宿などの総称で、和田以前は赤坂の荘であり、その名残が現在赤坂町として残っている。赤坂門もまた同じ地名から名付けられたもので、赤坂町に通ずる三の丸の北西の隅にあり角馬出しへの門である。明治以後赤坂門は閉じられ、居が築かれたため角馬出しが外に取残され、整地され住宅が二十戸ほど建っているが、この一面だけは旧城内と同じ町名である。鎌倉道はこの一面を通り、中央小学校の校庭を斜めに通り抜けて鳥川の河原へ出ていく。

鳥川の河原に出た所に「台ヶ松」と云う名勝地があり、中世の日記にもその名が出てくる。また、近世初期には高崎城が築城され中山道が整備されたが、鳥川の渡しは鎌倉道と同じ所であつたようで、間部氏時代の高崎絵図には、赤坂町の坂を下り、直進して台ヶ松の河原へ出ている。正徳年間以後に中山道は右折して鳥川の上流の渡しを通るようになったものである。

10 鳥川の渡しから金井宿へ

No	名称	年号	備考
80	道祖神文字塔		□□庚□天十月吉日 右ふじ岡、ちちぶ道 左の道
82	地蔵尊	天明二壬寅年	
81	放光寺跡		
83	万葉歌碑「佐野の舟橋」の碑	文政丁亥年	文政丁亥年孟冬良翁建之 古道佐野の渡
84	双体道祖神	不明	
85	地蔵尊外数体	不明	
86	庚申文字塔	文政元年	
87	如意輪観音	文政三丙寅年	右やまなふじおか、ちちぶ道
88	馬頭観世音	文政七年	上佐野組 右高崎、左ふじおか、ちちぶ
89	双体道祖神(僧形)	天保四年	多中村
90	道祖神文字塔	文政二己卯年	移設したもの
91	双体道祖神	文政二己卯年	

11 金井宿から豊岡へ

台ヶ松の対岸は広い河川敷で、現在はゴルフ場として利用されているが、渡し場のあつた辺りは「経塚」の小子があり、昔経塚があつたものと想像される。鎌倉道は北上して、「元屋敷」の小子のある東を通り、「筏場河原」と

「尺地」の境を北上して、以前万日堂のあった辺りへ出たと推定される。筏場河原は鳥川の対岸が「筏場」と云われる所で、近世の初期にここで筏を組んで鳥川を下った記録があり、筏場の小字名はすでに用いられていないが、豊岡地内に筏場河原の地名が残っている。

万日堂からの道はすっかり様子が変り、鎌倉道らしい道も、また伝承もない。万日堂も新しく道路が出来たために国道の南から北に移転している。この国道の北に、水路に沿った道が残っており鎌倉道とは云われないが、古くからの道であると言う。この道も自動車教習所の所で終り、その先に続く道はない。中山道が整備された時に古い道は廃道になってしまったものと思われる。

豊岡で鎌倉道として推定される道は、中山道の高札場のあった並木ストアの西五〇メートルほどの所に四川と云う中華料理店があり、その裏道で、豊岡小学校の北裏を通る。道幅一・五メートルほどの道で、常安寺の門前から



豊岡筏場河原の道



豊岡町宗伝寺裏道を西に行った道

墓地に沿って右へ曲り、広い四辻へ出る。この四つ角は、中山道の南、道に接して若宮八幡宮があり、そこから常安寺の参道に入り、斜め左に曲り、下台へ向かう道との交差点で、下台から上台へ向かう台の南側を通る古い道と思われる。この道も若宮八幡宮に伝わる古事から想像すると鎌倉道の枝道と思われる。

四つ角を経て直進すると道陸神の文字塔と道しるべがあり、右野道とあるが、この野道が鎌倉道と推定される。この辺は住宅が建った際、道路も変っているが古い道を確認する事は出来ない。道しるべにある野道は直進して五中の校庭に突当る。学校建設の際にこの道は断切られて学校の敷地に沿って迂回しているが、校庭を横切り通用前に接続する道が続く。

通用門から出た道は間もなく水路に沿って蛇行している。以前は一メートルほどの道幅であったが、現在は四メートルほどに拡張されている。この道の右手に源義経が笛を吹いたと云い伝えられている「笛吹塚」があったが、現在は平夷されて住宅が建ってしまった。その伝説は、源義経が奥州の藤原氏を頼ってこの道を通ったと云うもので、伝説にしたがえば、金井宿から奥州へ向かったと考えられる。

笛吹塚を過ぎると高崎の北部環状道路が出る。ここからの道は工業団地が造成されたため、新しく区画され、古い道は失われてしまった。

豊岡にはこの外に鎌倉道と云う確説はないものの中世からの道と思われる道があり、あるいは鎌倉道の枝道ではなからうか。その一つは五中の所から碓水川方向に斜めに向かう道で中山道を横断して宗伝寺の所へ出てくる道で、外に北部環状道路の所からこれも斜めに碓水川に向かって中山道を横断して、これも宗伝寺の墓地に沿って先の道と合流する。この道は一部道がなくなっているが、以前はあったものと推測される。宗伝寺の所には道しるべがあり、碓水川の渡しを経て栗附方面を示し、また若宮八幡宮を示している。これは先に述べた寺尾から石原を経て清水から栗附へ出る道で、和田宿を通

III 鎌倉街道の現状と文化財

らずに中豊岡へ通じた道であろう。

11 金井宿から豊岡へ

No	名称	年号	備考
92	馬頭観音(神像)二基	明和元年	破損 不明
93	道祖神文字塔		社宮祠村
94	中山道道しるべ		樺名山、草津温泉、かわなか、かわらゆ、はとのゆ温泉
95	道しるべ	宝暦十一年	従是神山三里
96	道祖神文字塔		三ノ倉五里半、大戸九里半
97	道祖神文字塔		左中山道、安中、松井田、横川
98	双体道祖神	不	右はるなみち、くさつみち
99	道しるべ	明	念仏供養庚申塔など数基ある
100	庚申文字塔	寛政元年	向石碓水川ヲ怪テ上乗附 左若宮
101	笛吹塚跡		裏に建立者名がある 表右宰田、はるな、神山 三のくら 左側面(追刻したもの) 向右野道 前中山道 後下台 左中山道

12 豊岡から板鼻宿へ

豊岡の北部環状道路で伝承の道は切れて歴史としないが、信越線の群馬八幡駅へ向かう道があり、古い道を改修したと思われる。駅の手前に三差路があり、そこから斜めに入る細い道があり、鎌倉道であろうと推定される。この道は駅前の道へ農協の所で交差して、道を横切り、児童公園に沿って進み、水路と並行して三差路に出る。ここからは直進する道があり、この道が鎌倉



八幡町(前方八幡宮)



八幡町と板鼻境 西馬場からの板鼻道

道と思われるが、現在は農道として利用されるだけで通り抜ける事も覚束ない。しかし、水路と並行して八幡八幡宮の参道に出られたものであろう。参道へ出る手前は「五輪」と云う小字で、名のごとく五輪塔が多く出土している所である。

八幡宮の参道に出る道には上豊岡の引間から合流したと思われる道がある。これは東山道と推定される道の上小塊の烏子稲荷の辺りから分岐して、下小塊を経て鳥川の渡しを渡り引間へ出て、刺崎の丘陵の南を通り八幡宮の所へ出るものである。引間には「こくぶん寺」を示す道しるべもあり、発掘調査により、和銅開珎や巡方が出土しているなど、この道が古くから開けていたものと思われる。鎌倉道は当然この道との接点があればならないが、中豊岡から上豊岡の引間へ通ずる所は広く工業団地となり古い道をたどる事も、また伝承も聞かれない。しいて引間の道をたどるならば、常安寺を通じた四つ角を下台方面へ向かい、下台から上台の丘陵の南面を通る道か、丘

陵の北側へ出て「くさつ道」と云われる信州道を通り引間へ出る道である。また鎌倉道の枝道として豊岡から分岐し引間の渡しを通り、東山道を横断して下小塚、上小塚、新波を経て箕輪方面へ通じていたとも思える。

八幡八幡宮の参道に自然石の道しるべがある。五輪を通り参道へ出た角にあるもので、「いたはな」を示している。参道の西側には西進する道があり、八幡では板鼻道と呼び、板鼻では八幡道と呼んで、古くから利用された道で、鎌倉道と推定される道である。この道には八幡宮の宿坊があった頃、その宿坊への道があり、八幡宮へ参詣する人達にも主要道であった事を示している。西進して間もなく信越線と交差するが、その手前右側に観音堂があり、近世以前からここに祭られていたらしく、五輪塔などあり、元禄時代の墓石もある。信越線の踏切で道は分かれる。一つは右折して台地へ上り、一方は田の中を蛇行して板鼻へ向かう。両道共に鎌倉道と伝えられている。平地の道は碓氷川の氾濫の際は通行不能になる事もあり、そのために台地を通る道も傳承されているのである。

平地を行く道は大きく蛇行している。所々石橋などあり、主要道であったらしいが、現在では一メートルほどの道幅で、農道としてのみ使用されている。一〇メートルほど行つた所で、道幅は広がり、直線の道になるが、隣接して工場が続き、そのために道も改修されたものであろう。直線の道は信越線と国道一八号と交わる所まで続く、この近くは建物もなく田畑の中を直進するが、この辺の田は区画が整然としているので耕地整理によるものであろう。

国道と信越線を同じ所で横切る国道は陸橋の上を通り、国鉄は踏切で渡る。その先は、国道に沿つた道があるが、この道は新設された道で、古い道は国道により断切られてしまった。新設された道で、安中・前橋の県道との交差点に、道祖神の双神像など四基ほどあるが、これらは道の西側にあつたもので、西側には福寿院と云う寺があり、そこで行止りになっていた。現在の県

道は近世からあり八幡の台地へ上る坂は階段のような道であつた。福寿院の西には板鼻塚があり、塚に沿つて鎌倉道と伝えられる道が西へ続いている。このような状況から判断すると、近世に中仙道が新設されるこの辺りが大きく変化して鎌倉道が切られて寺が建てられたとも思える。この道は八幡から板鼻の旧宿を通らずに安中方面へ行く道と考えられる。

板鼻道と呼ばれた道から旧板鼻宿への道は、国道一八号の陸橋が出来たので昔のようすはわからないが、地形や、接続した道の方向から国道になるものと考えられ、ここで旧宿へ向かう道と、宿を通らずに直進する道に分岐していたとも考えられる。この辺は板鼻の「毘沙門」の小字で呼ばれる所で、若田方面へ行く坂は毘沙門坂と云っている。

八幡の西馬場から台地へ上る坂があり堂坂と呼んでいるが、上り口の崖の中ほどに毘沙門を祭り、石宮もあるが藪の中にあり、道からはほとんど見えない所である。何故にこの様な所へ祭られたか見当がつかない。堂坂を上つ



八幡町西馬場堂坂下にある毘沙門石像



板鼻毘沙門から見た鎌倉道(現在農道)

III 鎌倉街道の現状と文化財

た所にはかつてお堂があったが現在は墓が残るだけである。

八幡の台地へ上る道は外にもあったが現在は廃道になったものもある。八幡の八幡宮には別当寺の外に社僧の寺が五カ所あり、^一二和尙、^二三和尙、^三四和尙、^四五和尙、^五六和尙などの呼名があった。これらの寺は鎌倉時代からあったと伝えられ、それぞれの寺へ通ずる坂があり、中には寺は崖の下にあつても崖上へ通ずる坂があつた。これらの坂は二和尙坂から五和尙坂まであり、廃道になったもの以外は崖の上で連絡していた。五和尙坂はこれらの坂の最も東にあり、八幡宮の門前から左に上る坂で、この坂から若田、大島、剣崎、板鼻へ通じており、主要な坂道で、鎌倉道もこの道を通つた可能性は充分推測出来る。

五和尙坂から崖の端を地形なりに行くと、先の堂坂から上つた道と合流する。北に二子山古墳がある地点で、これから崖の上を地形にしたがって西進するが、正面に平塚古墳があり、その近くで道は一段と下つた所に移るが、この道へ移る所は現在ではわからなくなつてしまつた。

崖上より一段さがつた道は坂になり毘沙門坂の下に出るが、この坂は廃道同様で通行不能と同じである。毘沙門坂の下に出た道は、八幡西馬場から平地を来た道と同じである。合流した点は四ツ角になり、谷を越えて板鼻旧宿のある台地へ上り、また平地を進んで板鼻堰にそつて進む道があつたのではなからうか。板鼻堰に沿う道は、国道のバイパスによりすつたかよつたか變つてしまふ。板鼻町の中ほどにある関口橋の辺りからはすつきり昔の道が残つている。

毘沙門坂から板鼻台地へ向かう道は谷を渡る所に工場が建ち、工場を通り過ぎた所に近世のものであるが道しるべがあり、ここから西へ台地へ向かつている。左に古墳と思われる高台があり稲荷の社があり、これに沿つて上る。やや蛇行しながら上るがそれほど急な坂ではない。道幅は四メートルほどに拡幅されており、昔と大分変化している。

坂を八分通り上つた所に三差路があり、左折すると急坂で、直進して中山道まで続く。この道は「殿小路」と呼ばれている。この辺りは館跡で、板鼻城の出城があつた所でその名がある。

殿小路の三差路を過ぎ右に少し曲ると、平坦な台地になり広くひろけた所へ出る。左へ曲る道があるが近世開けたものと云われ、この辺りから旧板鼻宿であつたと伝えられる。宿の中央通りと思われる道より一段と高く東に並行した道があり、かつてはこの道の両側に人家があつたと云われており、道に面した土地の区画が整然としている事も伝承を裏付けている。現在は一軒の家があるのみで他はすべて耕地である。

中央通りと思われる道の左側に「伊勢殿」の跡があるが、それを示す石柱があるだけで建物はすでない。伊勢殿のあつた斜め前に直径一〇メートルほどもあるうか、やや低くなつた所がある。ここは「鎌ヶ池」と呼ばれ義経が奥州へ下る途中、板鼻宿に泊り、この池に姿を写して髪を結つたと伝えられている。現在は水はなく、池の中央に島のように高くなり、そこに石宮が祠られている。この辺が宿の中心であつたと推定される。

鎌ヶ池を過ぎ左折する。ここには道の両側に人家があり、昔からの住人で、鎌倉時代からここに住んでいと伝えられる家もあり、宮沢家には当家の初代宮沢清馬の位牌があり正治元年正月二十五日没とある。正治元年（一一九九年）は源頼朝の没年である。宮沢家は鎌倉時代初期から板鼻宿に居住し宿の重要な役割をたてて来たと伝えられ、鎌ヶ池や、池の東にある古墳上に祠られた諏訪神社も当家によつて守られて来たのである。

宮沢家を過ぎると下り坂になり、四ツ角へ出る。当時は左への道はなく、直進する道と右折する道があつた。右折する道は板鼻では東山道と云われている道で、北へ進み直進して里見城跡を迂回するように下り里見へ出て中河原で鳥川も渡り、高浜から白岩を経て、箕郷の高岡から和田山を下り白川を渡り、上芝から保渡田、観音寺を経て総社へ向かう道と伝えられている。ま



板鼻旧板鼻宿のあった所

た、この道に接続する道として、引間で鳥川を渡り、剣崎、若田の台地の北側を通り、台地づたいに里見城跡近くで接続する道である。この道も東山道との説もあり、共に古道である事に疑問はない。また、鎌倉道の古道としてあったとも想像される。宮沢家の所の三差路はいずれにせよ重要な地点であり、ここに宮沢家が居を構えていた事は重大な意味があったと思える。宮沢家の前方には鷹の巣城と呼ばれる板鼻城跡があり、鎌倉道は東山道と伝えられる道と合流して城の東を下っている。現在ある道は途中から新設された道となり、城の本丸のあった辺りへ出る。鎌倉道はすでに廃道になり通行不能になってしまったが、城跡に沿って下り、取勝神社が祠られている古墳の所へ出るのである。

取勝神社のある北の一面は、伊勢三郎の屋敷跡と言い伝えられており、鎌倉道はこの屋敷を迂回するように下って来ている。取勝神社の所に大きな樺の木があり、道しるべとして植えられたものと伝えられ、この木の根方から古い石碑が出土している。

取勝神社から南に下るゆるやかな坂である。板鼻城へ上る坂があり、信濃坂と呼ばれている。長野信濃守が改修した事によりその呼び名がある。この坂の途中に寺が二カ寺あり、その他国道に面してもいくつか寺がある。中には無住のものもあるが、かつては五百戸ばかりの板鼻に十五カ寺の寺があったと伝えられる。板鼻の町が中世から近世にかけて、いかに栄えたかがわか

る。信濃坂を過ぎ国道を横切ると板鼻堰へ出る関口橋と云う石橋があり、直進するとすぐに中山道である。鎌倉道は板鼻堰に沿って右折する。東山道もこの道を通ったと伝えられている。板鼻堰は自然の川を利用しており、後に兩岸に石を積み改修したものであるから、古くから川があり、その川に沿って道が開かれていたものである。

12 豊岡から板鼻堰へ

No	名称	年号	備考
103	道祖神文字塔	明和九年	
104	庚申文字塔	寛政二年	いたはなみち
105	道祖神文字塔	明和元年西	
106	毘沙門石像	馬場村中	外に石宮あり
107	双体道祖神	寛政四年	台石に、京、江戸、善光寺
108	道しるべ	文政十三年	橋名妙義、加州金沢への里程あり
109	寒念仏供養塔	安永三年	右はるな、くさ川(くさつ)
110	双体道祖神 庚申文字塔 道しるべ	安政五年 天明四年 文政十三年	□□五子天六月吉祥日 台石通しるべ 右やはたみち 左はるなみち
111	双体道祖神	不	正面やはたみち 右側面くさつ いかほ、河原湯か弥古 志婦川 年記アリ
112	双体道祖神	寛政十二年	板鼻宿本町三丁目四丁目

二、支 道

(1) 館林・邑楽・太田

1 岩 舟 道 (藤岡道)

岩舟道は、板倉町大字海老瀬字通り集落の東はずれで谷田川を越えて北川辺町柳生へ通じる。鎌倉街道中道へは柳生の中道枝道を細間、佐波へ南下するコースと柳生から東進して古河で合流するコースの二つが考えられる。

谷田川の渡河地点は、昭和三年に合ノ川橋ができるまではそのすぐ東側で、今も木橋の杭が残存している。橋は谷田川と旧合ノ川との合流点直下に位置する。群馬・埼玉の県境をなす合ノ川は、天保九(一八三八)年、飯積において締切するまでは利根川の一派川であり(利根川治水史)、今でも地元では古利根川と呼んでいる。

谷田川を群馬県へ渡った正面に寛文二(一六六二)年の地藏像と阿弥陀像がある。万延元(一八六〇)年の庚申塔道しるべには「比方西 たてばやし 向 ふじおか 比方東 こが」と刻まれている。堤防を上がって通り集落から北へまっすぐ進み、東武日光線を踏切ると前方が藤岡台地の高台になる。旧道は台地を斜めに切つて上る。その手前東側の台地の上が有名な海老瀬貝塚(離山貝塚)である。権現沼をはさんだ一峯神社境内も一峯貝塚で、ともに縄文前期の貝塚である。藤岡台地にはこの他に北海老瀬貝塚や藤岡町篠山貝塚などがあり、関東平野最奥部の縄文貝塚として貴重な遺跡である。

一峯神社に接して大杉神社がある。大杉様は水厄・難船救護と悪疫除けの神で、利根川流域に分布する。峯の大杉様には神輿と大杉囃子が伝えられている。この他にも山口と北海老瀬の二カ所にまつられている。

旧道を台地へ上ると山口の集落であるが、ここから本郷の幹線道までは広



海老瀬字通り 地藏像、阿弥陀像、道標 (庚申塔)



一峯神社と同見塚

い舗装道である。山口の坂を下り、再び上り坂を上った右の森が薬師様境内に勝道上人の石塔があり「当寺開山勝道上人上野国大尊師本不生位」とあり天平宝字八(七六四)年とあるが江戸時代に建立したものである。上人は下野国の名僧で日光を開山し、大杉神社を創始した人物で、延暦八(七八九)年上野国調師に任ぜられた。安政五(一八五八)年十九夜塔道しるべには「右ざは 向 ふじおか 左 古河」と刻まれる。利根川を越え、佐波を経て江戸へ向かう道でもあったことが知られる。この道標は、幹線道のためと下新田から来る道との辻に建てたと思われる。

幹線道(板倉川)は、昭和九年邑楽東部用排水事業によって開さくされた排水路で、渡良瀬遊水地堤防ぎわに第一排水機場が設置されている。本郷へ入ると道が狭くなり、旧道の趣を感じる。足尾銅毒事件の時「被害者救済施設所」がおかれた松安寺がある。寺の北で仲伊谷田承水溝を渡る。前方は畑で、その北側はシノ藪になっている。旧道はかつて畑を横切つて藪の所を海

老瀬の渡船場へ下りて行った。シノ藪の北側、北海老瀬との間の凹地を大正六年まで渡良瀬川が流れていた。明治一四年(一八八一)年には、船八艘を使って船橋が架けられた。河岸には内国通運の蒸気船通運丸が下早川田まで上り、ここにも寄航場が設けられた。旧河道はゴミ廃棄場となり原形が分からなくなってしまう。

海老瀬・飯野線道路へ出て、旧河道跡から台地へ上りかける所で旧道は右へ入る。すぐの丁字路を左折すると賀茂神社につき当る。丁字路右角の藪が薬師堂跡で寛文六(一六六六)年延命地藏には「下野国都賀領海老瀬村、延宝元(一六七八)年建立の美しい四方仏塔には「下野国下都賀郡中泉庄北海老瀬」と刻まれている。中泉庄は中世中期、小山氏の勢力範囲にあつたと推定される。(佐野氏の系譜と佐野庄)徳川綱吉が矢場川を傍示塚で付け替えるまで、旧矢場川の北側にある早川田・大嶋・西岡などは下野国領であった。寛文元(一六六一)年に上野に編入したが、北海老瀬はその後も下野国領に



伝弘法大師像(大杉神社境内)



海老瀬薬師堂跡付近の旧道 前方(北)に加茂神社
左下は旧渡船場

止まっていたことが分かる。
加茂神社鳥居前には万延元(一八六〇)年の庚申塔道しるべが建っている。「右野道 向渡船場 左藤岡」とある。野道を右へ十メートルばかり、境内のすみに大杉神社の石祠がある。神社の西隣が正明院で、旧道が再び海老瀬・飯野線へ出た先にその墓地がある。宝暦六(一七七〇)年の十九夜塔道しるべがあり「右岩船道 左野道」と刻まれている。江戸中期には、岩舟参詣が盛行していたことを物語る。広い果道は、洪積台地の尾根を通過して藤岡町篠山で佐野・古河線に合流する。篠山貝塚遺跡は畑であるが、貝がらで一面白っぽく見える。佐野・古河線を南へ戻り遊水地堤と接する所に谷中村共同慰霊地がある。遊水地内の旧谷中村に散在していた石碑類がここに集められている。

1 岩船道

No	名称	年号	備考
113	庚申塔(道標)	万延元年	比方西たてばやし 向ふじおか 比方東+加
114	地藏像	寛文二年	
115	阿弥陀像	寛文二年	
116	海老瀬貝塚	縄文早期	茅山・前期関山期
117	一峯神社、同貝塚	縄文早期	茅山I、II期、タコ壺型貝塚
118	大杉神社	神興	大杉囃子
119	薬師堂	伝弘法大師像、背面金剛三基他	
120	十九夜塔(道標)	安政五年	右ぎは向ふじおか 左古河
121	勝道上人石塔		足尾鉾毒南件時の被害者救済施療所 他に五百羅漢石像など
122	松安寺		
123	笠付四体仏塔	延宝元年	下野国下都賀郡中泉庄北海老瀬とあ る

III 鎌倉街道の現状と文化財

120	延命地藏 加茂神社 庚申塔(遺構) 十九夜塔(遺構)	寛文六年 万延元年 宝暦六年	下野国下郡賀領海老瀬とある 境内に大杉神社の石祠 右野道 向渡船場 左藤岡 右岩船道
121	谷中村共同慰霊地	左野道	旧谷中村の石造物多数が集めてある。
122	篠山貝塚	縄文早期	畑が貝がらで白く見える
123			

2 小田原街道

小田原街道は、川俣で利根川を渡り、対岸の別所から鎌倉街道の支道を南下したと思われる。川俣の渡しは富士見の渡しとも呼ばれ、江戸時代の関東十六渡津の一つであった。同時に利根川水運の重要な河岸でもあり、三軒の船問屋がそれぞれ十艘の大船をもって江戸へ住復していたという。(館林市史)

現在の川俣の宿通りが小田原街道である。この道は元和三年(一六一七)年に徳川家康の霊柩が通過してから日光脇街道と呼ばれるようになったといわれる。そのため川俣宿には本陣、脇本陣、問屋がおかれ、旅館や遊女屋が軒を列ねて大層繁栄したといわれる。宿通りの一番南の角に旧本陣の塩谷家がある。明治三年作りの高瀬船(遊覧船)の絵を所蔵している。塩谷家の北側に粟嶋神社がある。本殿の北側に水難除けの大杉神社、南側に船頭が建てた文政十一(一八二八)年水天宮がある。台石の正面に「渡船者」右側に「川俣河岸」左側に「六人建之」と刻まれている。宿通りの家は皆新しく昔の面影は見られない。

旧道は国道一二三号線を斜めに切って大佐寅へ入る。四〇〇メートルほど進んだ左側に長良神社があり、境内に天保七(一八三六)年の五百庚申塔などがある。これから三〇〇メートル行つた右側秋野利三郎氏屋敷内に水三



川俣水天宮(粟嶋神社内)



阿弥陀三尊板碑
(秋野利三郎氏屋敷内)

の支配権を握つた赤井氏は、館林の大袋に移城するまで青柳に在住し、当時は佐貫町という城下町があったという。佐貫町は館林の城下町(外加法師付近)へ移転するが、その時三百五十戸程移住したといわれる。(館林市史) そうだとすれば、当時の小田原街道は現在の国道筋ではなく、青柳集落の中心を通るこの旧道であったと考えられる。

再び国道へ出て次の信号を右へ行くと分福茶釜で有名な茂林寺がある。赤井照光が応仁二(一四六八)年に開基となった。禪門建築の枯淡さをたどる。本堂は享保十三(一七二八)年から同十五年にかけて建立されたものである。

(一一九五)年の阿弥陀三尊板碑がある。旧道は再び一二三号へ合流する。青柳の中古車屋はす向かいの狭い道へ左折する。屈曲の多い道を一キロほど行くと長良神社の十字路へ出る。途中に青柳城主赤井照光開基と伝える菟積寺がある。長良神社周辺の苗木、萩原、堀ノ内

苗木、萩原、堀ノ内 一带が青柳城跡といわれるが、今は遺構一つ残っていない。十五世紀中葉に佐貫庄

小桑原の三差路で日光脇街道と分かれる。直進して市街地中心部へ行くのが日光脇街道で、榑原康政が記画し慶長二（一五九七）年に完成したらしい。（『館林市史』）右へ進むのが小田原街道で、しばらくすると右手に小高い森が現われ、丘の頂上に富士嶽神社がまつられている。社は榑原康政の再建と伝え、代々の城主がその宮禰にあたつた。富士登山をした個人および富士講の人々が、登拝の記念碑を建てたり多数の献額をしている。寛政十二（一八〇〇）年の庚申塔には「是方、こいつみあかいわ道」とある。

ここから北へ一〇〇メートルほどで旧道は右へ斜めに入つて行く。館林・小泉線道路に合流し、東武線踏切を越えて北へ進む。館林駅前には関東十八榑林の一つとしてきこえた善導寺がある。天正十八（一五九〇）年に館林城主となつた榑原康政が家門の香花所にすべく再建したもので、本堂はその翌年から足かけ十年かけて完成した。康政の墓（県指定史跡）や一簇および老中松平乗寿の墓がある。康政画像や伝徳川家康自画像を所蔵する。



長良神社

踏切の次の信号十字路から先の旧道は狭い道になり一方通行になる。左側に応声寺があり、その鐘楼には館林城鐘（県指定重要文化財）が鈞



地藏板碑（文永10年）

つてある。この鐘は館林城内にあつた時鐘で、天和三（一六八三）年徳川綱吉の廃城にあたり、この寺に依託された。以後昭和期に至る二六〇余年、町の時鐘として親しまれてきた。

応声寺の北、同じく左側に愛宕神社が現われる。ここには日本で二番目に古い文永十（一二七三）年の地藏板碑（県指定重要文化財）がある。高さ二・二四、幅〇・五五メートルの碑の上半部に総文一〇五メートルの金剛宝地藏尊を刻んだ立派なもので、地元では青石地藏と呼ばれる。愛宕神社は、執権北条時頼が社殿を造り、元龜元（一五七〇）年には武田信玄の祈願所になつたという由緒のある社である。以後赤井・長尾・北条諸氏に崇敬され、文禄年間（一五九二）には館林市中総鎮守となつた。榑原康政、徳川綱吉も祈願所とし、元禄十五（一七〇二）年以降は徳川氏で修築したという。

旧道はやがて国道二二二号線へ出て食い違い十字路となる。これを北へ行くのが小田原街道であるが、明治十七年迅速園では十字路ではなく丁字路になつている。足次への道は現在の法泉寺西南角にあつた太田口門を出てから左へ折れて、城下町を囲う土塁沿ひに北へのびている。町囲いの土塁は文禄二（一五九三）年に着工し同四年に完成したという（『館林市史』）から、それ以前の小田原街道はむしろ現状のように食い違い十字路を北進したと考える



雷電神社

III 鎌倉街道の現状と文化財

No	名称	年号	備考
124	本陣跡	明治三年	塩谷正邦家 高瀬船遊覧の絵
125	栗島神社	文政一年 元治六年	水天宮 大杉神社
126	真如院	元治六年	馬頭観音(助郷の子)
127	長良神社	天保七年	五百庚申など

2 小田原街道

のが自然である。
 法泉寺には榊原重次の墓がある。重次の祖父清政は康政の兄である。館林第一中学校の前に長良神社があり、その裏(西)側から一中裏にかけては町囲いの土塁が残存している。
 東武佐野線を越えると、やがて足次の集落である。集落の手前の水田が寛文以前の矢場川つまり水塚以前の渡良瀬川旧河道である。水塚以前の街道はここで渡良瀬川を渡ったことになる。足次の北はずれに赤城神社がある。建仁二(一〇二〇)年、新田義貞が勢多郡三夜沢の赤城本宮より勧請したもの伝える。天保十一(一八四〇)年奉納の「ムカデと梅樹絵馬」と年代不明「千匹ムカデ絵馬」(ともに市指定重要文化財)を所蔵する。
 上早川田とつぎの蓮葉院にある六地藏の一体には「江戸御本丸大奥出勤本願主、千野、小笠」と刻まれ、大奥のお女中が寄進した珍しいものである。年代も分らないが、当地の出身であろうか。渡良瀬川の堤防を上ると、堤外地に雷電神社がひっそりと建っている。堤防下には安政二(一八五五)年の立派な馬頭観音がある。徳川綱吉が付け替えた矢場川は、雷電神社の裏で渡良瀬川と合流していた。その合流点直下に上早川田の渡しがあり、対岸の佐野市高橋へ渡っていた。寛文以前は矢場川がなく、水塚以前は渡良瀬川の本流もなかった。おそらく佐野の中川と呼ばれる川がここを流れていたと推定される。

3 佐野街道

141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128			
雷電神社	運葉院	赤城神社	五宝寺	長良神社	法泉寺	地蔵板碑	愛宕神社	榊原康政の墓	応声寺館林城鐘	善導寺	庚申塔(道標)	富士観音社	茂林寺	長良神社	電積寺	阿弥陀三尊板碑
			永仁五年	文化三年	寛水一年	文水一〇年	寛水一五年	寛政一二年	寛政一二年	寛政一二年	寛政一二年	寛政一二年	寛政一二年	元禄二年	元禄三年	
馬頭観音(参道入口)	大奥女中寄進の六地藏、その他	ムカデと梅樹絵馬	不動曼荼羅板碑(県指定重要文化財)	御神燈など。付近に町囲い土塁の遺構	榊原重次の墓	県指定重要文化財	榊原康政、徳川綱吉の祈願所	県指定重要文化財	県指定史跡	閑東十八椋林の一つ	小奥、赤岩道	香拝の記念碑、献額多数	付福茶釜	分福茶釜	地蔵像など多数	秋野利三郎氏屋敷内 地蔵像など多数

佐野街道は、法泉寺の東で小田原街道から分れる。国道一二二号線の食い違ひ十字路から小田原街道を二〇メートルほど北へ行くくと東電館林変電所がある。この角を右に入る狭い道が佐野街道である。
 法泉寺には榊原康政の兄の孫に在る榊原重次の墓がある。最初の十字路を左へ行くくと長良神社の前に出る。神社の裏手には、康政が文禄二(一五九三)年に築いた町囲い土塁の遺構が見られる。館林第一小学校の東で、旧道は車両進入禁止になる。ここを左折し、海宝病院の十字路を直進すると五宝寺境内に入る。この寺は永仁五(一二九七)年、讃岐国善通寺の俊清和尚の開基と伝え、本堂前に不動曼荼羅板碑が立っている。高さ一・二メートル、碑面

は三段に仕切られ、上段には蓮台上に弥陀種子の大きなキリク、中段には五大尊の種子、下段には左右に五輪塔、中央に永仁五年丁酉年と刻まれている。国道一二号線から小田原街道を南に入ると愛宕神社があり、ここには全国で二番目に古い文永十(一二七三)年の立派な地藏板碑がある。

旧日光脇街道へ出て最初の信号十字路を左へ入る。この沿道には西から法輪寺、法高寺、円教寺と寺が続く。法輪寺は慶長一三(一六〇八)年開山、延宝三(一六七五)年現在地に移転した。秋元藩の老家で藩制改革者岡谷達磨介の墓がある。安政の大改革を実施し殖産興業につとめた。この時設けた機業会所が後の館林機業の基礎を築いたという。円教寺は天正四(一五六七)年、身延山久遠寺日胤上人の建立と伝える。外加法師の旧城下町にあったが文禄三(一五九四)年榊原康政が当所に移した。秋元藩の御典医でこの地方の種痘術の創始者とされる長沢理玄(一八〇六―一八六三年)の墓がある。佐野・行田線を越えると加法師町(元外加法師)で、赤井照光が館林城を築いた時に建設した最初の城下町であり、青柳在城当時の城下町佐貫町をそっくり移転したものとされる。(館林市史)この付近はやや旧街道の雰囲気を残している。



尾曳稲荷神社

佐野・行田線を南下すると館林城跡の三ノ丸公園へ行く。当時の土塁が残存し、目下土橋門復元工事が進められている。館林女子高校東側に市立第二資料館がある。この建物は旧上毛モスリン本館(県指定重要文化財)で明治中期の代表

的洋風建築を示している。もとは市役所(神戸製糸跡地)の所にあった。また加法師町にあった文豪田山花袋の旧居もここに移転してある。この東に尾曳稲荷神社がある。赤井照光は最初に青柳から城沼南岸大袋へ移ったが、孤に導かれて北岸に館林城を築いたという伝説がある。館林城を尾曳城とも呼ぶのはそのためである。



千塚の判官塚

佐野道は、加法師から直線状の館林・藤岡線となって館内へ向かう。もとは少し蛇行していたが今はその跡形もない。細内の県道屈曲点にある店の角を右へ入る道が旧道である。ここから寄居までの間が旧状を最もよく残している。細内集落の出はずれで仲伊谷田承水溝を渡ると千塚までは直線道になる。もとはゆるく蛇行していたが耕地整理で直線化した。千塚の手前右側に判官塚と呼ばれる小高い所があり、延宝八(一六八〇)年と享保二〇(一七三五)年の青面



二狼の庚申塔

金剛、寛政二(一七八〇)年、万延元(一八六〇)年庚申塔、天保二(一八四一)年の馬頭観音が建っている。ここは榊原時代の一里塚と伝えられ、かつて「千塚の判官松」

III 鎌倉街道の現状と文化財

16	館林城跡	No	142	熊野神社
16	田山花袋の旧居跡	名 称	143	法輪寺
		年 号	144	円教寺
		備 考		寛文八年 青面金剛群 藩制改革者岡谷理磨介の墓がある 当地方の種痘創始者長沢理玄の墓 旧家は第二資料館庭に移築してあ る。

とか「判官の腰かけ松」と呼ばれた松の老木木があった。旧道はこの塚を通っていた。

千塚の集落を抜けると前方に寄居の明善寺が見える。明善寺の南側は境内より二メートルほど落差のある低地で水田になっている。この低地帯は、判官塚の北から千塚集落の西へ北をまわって寄居の南へ帯状にのびている。これが寛文以前の矢場川すなわち永祿以前の渡良瀬川の旧河道なのである。道興は、永祿年間よりおよそ八〇年も前にこの道をたどったわけだから、ここで渡良瀬川を越えたことになる。

寄居の東で丁字路になる。角の畑に万治四（一六六二）年の二猿の庚申塔が建っている。左折して直進すると大島である。館林・藤岡線との十字路を北進すると山王地藏堂の辻になる。堂内には宝曆八（一七五八）年銘の記された青銅製地藏座像が安置されている。お堂の前に寛政九（一七九七）年の小さな庚申道しるべがあり「東 ふ志お加 こが南 たてばやし 西あしかが 北 杉のわたし さの」と刻まれている。道標にしたがって北へ進むと渡良瀬川の堤防につき当る。この堤外に杉の渡しがあり、安永五（一七七六）年に高山彦九郎、同一九（一七八一）年には木食五行が渡ったのであるが、その面影はもはや認めることができない。道興が通った時には、足利周辺の川や旗川などを合わせた川があったと推定される。職原抄頭註にある又有川曰佐野中川の佐野の中川というのがそれではなかったかと思われる。

3 佐野道

4 足利道

154	151 152 153 150	149 148	147
正儀内の道標	地蔵堂 庚申塔（道標）	青面金剛 明善寺 庚申塔	上毛モスリン本館
嘉永七年	万治四年	享保二〇年 寛政十二年 万延元年	明治中期
右たてばやし かわまた	宝暦八年の青銅製地藏座像 東 ふ志お加 こが南 たてばやし 西 あしかが 北 杉のわたし さの 左いたくら いいの向きのく寿ふ 道	辨原時代の一里塚 文字塔と像	洋風建築（県指定重要文化財）第二資料館に使用中

上五箇の利根川には上川岸渡と下川岸渡があつて、それぞれ対岸の酒巻と下中へ渡った。どちらを使つても忍への距離は大差ないが、上川岸渡の方が中心であつた。

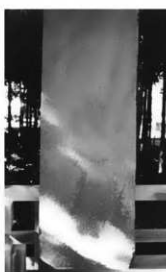
上川岸渡跡から堤防を下り、つき当りのT字路を左へ行く旧道が古い道と思われる。T字路を右へ行くと愛宕神社の前へ出る。社殿正面にかかると「愛宕祠」の額は、上五箇出身（江戸生まれ）の儒学者龜田鵬斎の筆になるものである。このすぐ北側の三橋神社に鵬斎生誕の記念碑（昭和五三年）が建立された。

先のT字路を西へ瀬戸井へ向かう。舗装道であるが、ゆるくカーブしながら

ら進む道に、古道の雰囲気を感じる。瀬戸井の宝生寺山門にかかる「棋落山」の額（明和六一七六九年）も鵬斎の文字である。山門右手前の薬師堂に享保年間の作といわれる閻魔と脱衣姿の木像がある。

宝生寺の西でT字路を右折すると果道へ出る。果道北側に旧郷社長良神社が見える。貞観十一（八六九）年に舞木の赤井良達が和春日神社末社から遷宮したと伝える。文明年間（一四六九―一四八六）より分社するものが多く、宮附十三カ村の総鎮守、邑栗郡の本宮とされ、明治十五年十二カ村の郷社となった。今は立派な社殿に往時をしのぶのみである。

赤岩の集落へ入ると間もなく右側に光恩寺参道入り口がある。元享元（一四二一）年、後醍醐天皇の詔勅によって殿堂を再建し、赤岩山光恩寺と称したという。結城合戦（一四四〇年）で兵火にかかり殿堂を焼失した。境内に日本最古の地藏板碑がある。文永八（一二二一）年銘、高さ一五九センチ、幅五一センチの立派なものである。もう一つ建武二（一三三五）年銘の珍しい玉石型板碑もある。しかし、何といても庄巻なのは新築成った阿弥陀堂内に安置された阿弥陀三尊像（県指定重要文化財）であろう。鎌倉初期の作といわれるが、中央の観音像はすばらしいものである。東毛では最高の芸術品ではなからうか。阿弥陀堂の裏側が本道筋では唯一の前方後円墳の堂山古墳である。後円部墳丘上に館林城主赤井照光の墓とされる五輪塔と碑があり、



日本最古の
光恩寺
文永8年、
地藏板碑

天文十四（一五四五）年と刻まれている。前方部の鐘楼には元禄十六（一七〇三）年銘の鐘が釣られている。光恩寺入り口から次の信号十字路を左

折すると利根川の赤岩渡船場へ行く。現在の渡船場がもとの渡で、対岸葛和田へ連絡する。またこの付近が幕末から明治初期にかけて栄えた赤岩河岸の跡だといわれている。中山道熊谷宿から赤岩渡を経て例幣使街道の八木・梁田宿へ通じるこのルートは、日光社参の脇往還でもあった。渡船の記録は元和二（一六六一）年に見え、江戸時代には上五箇ではなく赤岩渡が交通の主流になっている。土手下の角には田山花袋が遊んだので有名な新田屋の旧屋がある。宿の北通りに移転した新田屋には花袋の残した書が多数所蔵されている。

先の十字路を西へ進み、果道がカーブする所をそのまま直進すると舞木の長良神社前へ出る。境内の大黒天道標（元治元―一八六四年）には「右おほたき里ふ、左をしまきさ記」とある。船頭が奉納したという浅間石製の常夜塔も建っていて、ここに舞木河岸があつたことを示している。堤防沿いに西へ進むと円福寺門前に行く。門前に天明三年浅間焼の時の「為水死



元応板碑（円福寺）



右馬助館跡 納屋左衛門家屋敷内に残る土塁と濠

男女菩提也」と彫った石塔が建っている。境内には元応元（二二一九）年の板碑がある。

先の十字路へ戻り、もう一つ東の十字路から北へ行く道が足利道である。赤岩と足利とを結ぶこのルートは、現在ほとんど赤岩、足利線道路と一致しているため、古道をしのびせる景観もほとんど見られない。五反田の三差路には「右 めま 熊谷 ほんじやう、左 さかまき ぎやうだ」と刻まれた安政二（一八五五）年の道標があったが現存しない。足利方面から向かって右へ行けば赤岩渡、左へ行けば上五箇渡から酒巻、忍へと指示していた。また舞木薬師堂の寛政十一（一七九九）年庚申道しるべには、舞木河岸方面から向かって「右 たてばやし あしかが、左 古いすみ き里ふ」とあり、利根川―足利間のルートはやはり鎌倉コースが中心であったことを示唆する。

五反田三差路から福島十字路までは広い舗装道であるが、旧道は十字路南から現県道の西側を通っていた。植木畑の間を通る旧道には多少古道の観がある。再び県道へ出ると秋妻までは担々とした舗装道路である。逆川低地帯の水田を越えて上坪谷へ入るとすぐ十字路がある。この十字路の北西側一面が右馬助館跡といわれている。（中世の邑楽町）

館跡は現細谷長左衛門、藤次岡家の屋敷、山林、畑合わせて約三ヘクタール。館の周囲は足利道に沿ってよく残存し、また長左衛門家裏の山林内には数本の堀跡と土塁が残っている。この館は、新田義貞に従って南朝方武將として活躍した細谷右馬助秀国が正平十八（一二六三）年に在居してから天正十八（一五九〇）年に廃されるまで九代二四三年間存続したという。十字路北西角の空堀の向こうにある文政九（一八二六）年弁財天は道しるべを兼ねた面に「あしか、八木」東面に「たて林 さの」西面に「こいつみ 太田」とあり右石正面に「赤岩道」が読める。

十字路を左へ進むと鎌倉の長柄神社へ行く。尾崎は上野国神名帳にある邑

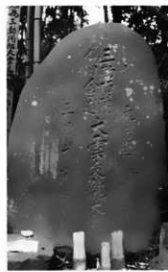
楽郡正一位長柄明神は、ここにあるいは大泉町古水の長良神社のどちらかであろうと推定している。鎌倉時代の承久二（一二二〇）年に畠山重忠の子武丸が鎌倉重興と称して鎌倉城主になってからこの神社を代々尊崇したと伝える。本殿は元治元（一八六四）年再建といわれ、明治五年に石打、藤川、秋妻、上・下小泉、吉田、鎌倉七ヶ村の郷社になった。

右馬助館の十字路を北進し、県道矢島・大島線を超えたとやがて道が右へカーブする。このカーブ付近の西側一帯が鎌倉城跡とされる。（中世の邑楽町）が、土塁や濠など目立ったものは見られない。毘沙門堂が一つ、大手門跡に建っている。初代城主鎌倉重興から四代目伊賀守重広は太平記の新田十六騎の筆頭に記され、新田四天王として勇名を馳せた人物である。

国道三五四号線との鎌倉十字路を過ぎると東武小泉線鎌倉駅の東へ行く。駅の手前（南）一〇〇メートルほどの県道右側はこの伊賀守重広の墓とされる所があり、宝篋印塔には暦応三（一三四〇）年とある。しかし、その年には伊賀守は生存していたという。法号は大信寺殿智証大禪定門といひ、菩提寺の大信寺はすぐ南にある。

県道を北上し国道二二三号線との十字路を超えると、右へカーブしつきだりに郵便局の印がある。この北を右折し一〇〇メートルほどで右へ入ると藤川城跡の小林市之進氏屋敷へ行く。屋敷の北側には構え堀が歴然と残存し、土塁も残っている。大永年中（一五二一年）小泉城二代城主富岡秀光が、佐野城を押えるためにここに砦を構えた。（中世の邑楽町）のことからも当時の足利道の地理的重要性がうかがわれる。

県道を北へ進むと左に四配開神社がある。その右岸奥が横田館跡とされるが一面の水田で残影を止めていない。県道は秋葉集落の西を通りやがて左へカーブすると玉取神社の前へ出る。旧足利道は、神社の東の狭い砂利道で、矢場川を渡って八木宿へと通じていた。またこの道の東側には「どじょっかいどう」と呼ばれる場所がある。道場街道のなまりと考えられ、鎌倉時代に一遍上人



大雲文龍禪師の墓 清岩寺

の弟子真教上人が光林寺に設けた秋妻道場に由来する。(中世の邑栗町)

光林寺は寺の伝記(宝永元—一七〇四年)によれば、永仁五(一二九七)年当地に修行

に來た時宗第二祖真教上人が領主すなわち秋妻城主佐貫前司俊清に請われて玉取神社で念仏修行した。俊清は深く上人に帰依し、一寺を建てて上人に寄進した。上人はこの寺を根本道場として三年間秋妻に止まった。寺は寛玉山根本院秋妻道場と呼ばれる。上人が秋妻を去る日、一同して利根川の渡し船まで見送ったという。おそらく今たどってきた足利道を、逆を上五箇あるいは赤岩まで送ったものと思われる。

秋妻の清岩寺は、曹洞宗の名僧で中世末から近世初頭の代表的書家であった大雲文龍禪師が開いたという。現存する書三点のうちの一つ「水色兩玄」の草書体が清岩寺に所蔵されている。文龍の墓は本堂左手裏にある。

4 足利道

No	名称	年号	備考
156	長性寺墓地	天明 六年	水死者万雷塔
155	愛宕神社		儒字者龜田彌齋の扁額、芭蕉句碑
157	宝性寺	明和 六年 享保年間	龜田彌齋の扁額、聞慶と脱衣婆の木像
158	長良神社	文永 八年	地藏板碑(日本最古)
159	光恩寺	建武 二年	玉石型板碑
		天文一四年	伝赤井照光の墓

160	阿弥陀三尊像 旧新田屋	鎌倉初期	県指定重要文化財 現新田屋に花袋の書が多数保存される
161	長良神社	元治元年	大黒天道標、右おぼた、き里ふ、左をじま、きさ記
162	円福寺	元応元年	板碑
163	大林寺	天明 三年	為水死男女菩提也
164	薬師堂	建武 五年	庚申塔道標、右なてぼやし、あしかが左古いずみ、き里ふ
165	右馬助節跡	寛政一一年	細次長左衛門、藤次家屋敷、土畷、濠の遺構
166	長柄神社	文政 九年	弁財天道標 上野神名帳邑薬部正一位長柄明神か毘沙門堂がある。
167	笹塚城跡 大信寺	暦応 三年	伊賀守重広の菩提寺 年代には疑問がある
168	笹塚伊賀守重広の墓		石打のごぶ観音として有名
170	明智寺		県指定史跡、大小二基の古墳群
171	松本古墳群		小林市之進氏屋敷跡、土畷の遺構
172	藤川城跡		
173	四河内神社		
174	曹岩寺		大雲文龍禪師の墓、師の書一点所蔵
175	光林寺	享保一二年	地藏その他
176	玉取神社		時宗二祖真教上人の開いた秋妻道場 玉取姫伝説

(2) 新田・佐波・伊勢崎・前橋

鎌倉街道は古くは鎌倉往還と呼ばれ、後に上道(鎌倉から上野国・下野・信濃への道)、中道(横浜経由府中へ、その先上道に合流)、下道(東京経由

房総・奥州方面への道)の三つが関東地方での主要道となった。鎌倉側からこれらと呼ぶ時には武蔵路、信濃路、上州路などという。――鎌倉市史編纂――
 一般的には栗原仲道氏著「鎌倉街道Ⅰ」―有峰書店―の定義が妥当と思えるので引用したい。「狭義の時代幅としては治承四年(一一八〇年)頼朝の旗上げから天正十八年(一五九〇年)の小田原北条氏の滅亡までの間であり、関東及び諸国の武士団が鎌倉へと向かった道」であるとしている。さらに道の特色として

一、道は直線的で低地をさけ、丘陵を通り坂道、谷間をさけ山腹を走つてゐる。

二、宿駅や宿営地は丘陵を越えた平地で飲料水取得のため川のあるところを選んでゐる。

三、道筋に寺社が多く、禅宗、時宗、日蓮宗などの鎌倉仏教はこの道を通じて伝播したと考えられる。

四、街道筋に豪族の館城跡や古戦場が多い。
 関東の主街道や駅制がしかれた東海道などではこれらの特色が顕著である。

本文で扱う鎌倉街道は上道の支道でありやや事情が異なるが大筋では共通といえる。

新田・尾島地区を中心に前記の事情と異なる点を挙げてみたい。地形的には全くの平地であり利根川・烏川がたびたび流路を変え、渡渉点も移動するため川の近くで東西方向に道が曲がるが多い。また各部将の館のある集落を結ぶ生活道路としての役割のため鎌倉へ向かう南北方向の道に対して直交する道がみられる。宿駅については該当するものが確認されなかった。宗教的には真言宗が比較的多く見られる。

こういった条件から帰納的に街道を推測することが可能のようであるが、前橋・伊勢崎については点としての館城や伝説地などを得ることはできた

の線としての道を確認することができなかった。その理由として考えられることはこれまでの報告書で述べられた沼田・会津街道、佐渡奉行街道(旧三国街道)、銅山街道、例幣使街道などとして後世使われたために古い街道名が消えたのではないかということである。従つて伝承としてではなく推論としてそれらの道を御教示いただいた例は多い。本報告書ではこの地区について伝承のあるものにしぼつたので許容範囲を広げれば上記の諸街道の多くの部分を含める可能性があることを付け加えておきたい。

道の伝承の残る玉村、新田・尾島地区は肥沃な水田があり古くより栄えた土地という点で共通点がある。

玉村については山本隆志氏が「安達氏の上野国経営」―群馬県史研究16号で上野国奉行人安達氏がこの地に館を置いた可能性を説いている。この推論の可否は置くにしても「この地が長寛年間(一一六三―一一六五)以来の伊勢内宮の御厨であり、南北朝時代には北玉村が玉村保となり鎌倉円覚寺が地頭職を与えられていた。―群馬百科事典―ように中央との結びつきの強い生産地域であつて権力の存在したことがうかがえる。このような事情から伝承が残つたものと思える。(図3)

一方、新田・尾島地域は新田庄所在地で、新田一門の館城も多い。居城所在地については総持寺、江田館、反町城など遺構がはつきり残っているものは少数で他の多くは異説があつたり、集落内どこかという様に正確な場所の確定ができない。ただ集落名を姓としている例が多いので地図上に落とすと図4の通りである。これら諸館城と結ぶ道も広い意味では鎌倉街道ということができる。義貞鎌倉攻めルート伝承もこれら諸館城を結ぶ形になつていふことと思われる。

義貞鎌倉攻めの道と出陣時の居館については疑問点が多く断定する材料を持たない。具体的道筋を示した文書が皆無に近いからである。

鎌倉街道を確定する上に必要な中央の記録でもその資料は極めて少ない。

吾妻鏡における頼朝那須野村掃途の上野国遊覧、新田館に立ち寄ったとの記録（建久四年―二一九三年）と義貞旗上げについての太平記及び梅松論の記録（元弘三年―二二三年）である。頼朝が立ち寄ったという館については寺尾（太田市寺井・高崎市寺尾の二説）、頼朝、世良国持寺など名説あり断じ難い。また義貞の居館についても前記の館の他太田金山北部、由良説などあってそれぞれ譲らない。従って鎌倉攻めについてスタート地点がいくつも考えられる状態であり断定する資料を持たない現状では推測論をたたかわずのみである。旗上げの地とされる生品神社についてもこの周辺に同名の神社が七つもある―群馬百科事典―こと、また古くは生階（ウカイ）神社と書いたことがあったり、関東西方では生品と書いてウブスナと読む場合もあり産土神社の意にもとれ、その場合各村がウブスナ神社を持っているので推測の対象は極めて多くなる。これも断定する資料がないので今後の研究を持つことにしたい。

1 下堀口から新田町へ

高崎線竜原駅からは北に向かう道をたどると妻沼町間々田に至る。対岸は尾島町下堀口であり、ここで早川が利根川に合流する。熊谷市ではこの電原―間々田の道を脇屋街道と呼んでいる。脇屋義助とのかかわりか、太田市脇屋へ至る道の意で鎌倉街道の一つと考えることができる。群馬県側には脇屋街道の呼称はない。下堀口からの道は鎌倉街道と考えられる。この道は早川・利根川合流点から早川左岸堤防を北西に行き新田一族の武将堀口貞満の館のあった下堀口の西に出る。堀口貞満は新田義貞の鎌倉攻め（元弘三年―二二三年）に参加、武蔵野国内での各戦で先鋒を務め、鎌倉では巨福呂坂口進攻軍の大将であった。館は下堀口の賀茂神社の付近であったと思われる。集落西の信号を堤防から降りて北上すると、東側に大きなイチョウの木がある浄蔵寺がある。尾島町指定天然記念物で目通周圍二メートル樹高二八

メートル樹齡四〇〇年という。寺の西側は一面の山芋畑である。信号から約五五〇メートル北方で道は真北に行くものと、西北に向かうやや細い道に分かれる。鎌倉街道はこの北西に進むもので南側は堤防まで山芋畑が広がっている。かつては利根川はこの道に接する所を流れており渡しがあった。太子の渡しという。室町時代の連歌師宗長が永正六（一五〇九）年八月十五日の日記に次のように記しているのがこの渡しであると伝えられる。

〔翌日〕たけて、長井の置やらの宿所へと送られる。夜に入りておちつきぬ。明る朝、利根川の舟渡りをして上野国新田の庄に礼部尚純廻道ありて、今は静喜かの閑居に五、六日連歌一



浄蔵寺の大イチョウ



義国神社五輪塔

路で直角に北に折れる。幅三メートルの細い路地で途中一つ十字路を通り越して尾島町本町通り―国道三五四号線を横切る。道はこのまま北に進むが新田氏ゆかりの地がここ

左手に墓地がある変則四差路を直線方向にすすみ、先の分岐点から約五〇メートル程の所で前方に尾島小学校が見えてくる。左手に河口歯科医院がある丁字

III 鎌倉街道の現状と文化財

からやや東方にあるので立ち寄りたい。国道を東にとり町並をはずれると北側に岩松氏累代の館があった三菱電機尾島工場がみえる。足利義康の孫義純が岩松に居を構え、四代後の岩松経家は義貞の鎌倉攻めに参加した。岩松氏の菩提寺が同工場の東にある青蓮寺である。青蓮寺から真東の畑の中に小さな神社がある。新田氏の祖新田義重、足利氏の祖足利義康の父で平安時代の武将義国を祭った義国神社である。境内に義国供養塔と伝えられる五輪塔の残欠があり、その没年を示す久寿二(一一五五)年六月二十六日没の字が読める。また観応二(一二三二)年の板碑が社殿横に建っている。再び市街地の十字路に戻って群衆の東、しまや食堂の路地を北上する。旧道を直線状に改修した道が石田川を渡り中根集落に伸びる。集落の南部で道の東側に庚申塔などの石造物をみながら行くと、やがて東部伊勢崎線を越え上田島集落へと連する。ここでも集落入口付近の東側に石造物群がみられる。上田島の集落西で道はゆるく東へとカーブしはじめる。そこから北西に分かれる狭い道をとる。この三差路には二基の庚申塔があるので目印にするとよい。約二〇〇メートル行つた所で例幣使街道をよぎる。ここから先は耕地整理のため鎌倉街道を辿ることはできない。例幣使街道に立つとはるか北方に反町薬師の森が見え、その左手前に王子製鉄の工場があるので、おおよその方向を見極めることはできる。道はここから反町薬師とその東の村田集落の中間を抜ける形でこの水田中を蛇行しながら伸びていた。地元の人達はこの道を尾島道とも呼んでいた。

この道の終点にあたる場所は現在の反町薬師の東側で反町城の七つの出口(カイトと呼ぶ)の六つ尾島ガイトである。かつて反町薬師は東隣の村田集落の中間あたりまでの広さを持っており、昔そこに土塁があつて村田の人達は西山と呼んでいた。ここが尾島ガイトの位置である。

反町薬師はかつての反町城を縮小した位置にある。

反町城は県指定史跡で新田義貞の館跡と推定されている。高土居と堀を



反町薬師の堀

1 下堀口から新田町へ

No	名称	年号	備考
188	堀口氏館跡		賀茂神社付近
187	浄蔵寺のイチヨウ		尾島町天然記念物樹令樟年
186	太子渡し	久寿二年	五輪塔
185	義国神社	観応二年	板碑
184	青蓮寺		岩松氏菩提寺
183	伝、船つなぎの松		三菱電機尾島工場敷地内
182	岩松氏館跡		太田西女子高敷地
181	石造物	享保三年	庚申塔他
180	反町薬師	天保一〇年	二十一夜塔他
179	生品神社		反町城、伝義貞居館
178			伝義貞旗上(拳兵)の地
177			

めぐらした館跡のほか方五〇メートルの間に堀跡が認められる。元徳年間(一二三九)〜(一三三二)新田義貞が築き、大郎氏明が留守在館と伝えられる。天文・永祿(一五三二)〜一五七〇の頃、城として改修され、金山の家臣矢内修理亮時英が居城。天正十二年(一五八四年)北条勢の金山攻撃の際、北条氏邦はこゝと本陣とした。

今この館跡に反町薬師があり薬師如来を祭る。厄除け信仰の中心地の一つで一月四日の縁日には数万人の人出でにぎわっている。

2 大館から新田町へ

上武ゴルフ場ハウスの東側から堤防沿いにある大館集落南端部西から大館集落を北東に向かって斜めに鎌倉道があった。今は宅地があった旧道はない。この堤防から南を望むと深谷市巾着がある。その中間現本流中につけて小角という集落がありそこに小角渡しがあつた。白旗の渡しともいう。義貞鎌倉攻めの際の一隊はここを渡つたといわれている。(ただし当時の利根川はさらに南方にあつたので通過点というべきか)

大館の集落の中央あたり消防小屋の東から鎌倉街道は北に向かった。集落を抜けると両側はこの地域の特産であるネギ・山芋などの畑が広がる。消防小屋から北方約一五〇メートル付近で道はやや東に折れる。そこから西をみると畑中にポツンと小さな祠が見える。大館氏館跡を示す諏訪神社である。



大館氏館跡 諏訪神社

館であつた。この辺りには耕地名にその名残の御堀、御蔵、馬場等があり深耕すると石垣などが出てくるという。



碓氷義助板碑

さらに東にゆるくカーブしながら北々東にすすめば右手に明王院安養寺がある。左手は日進化学工業の工場である。安養寺は新田義重以来の新田氏氏寺である。ここにある不動尊は「新田の触れ不動」と呼ばれている。太元記に新田義貞旗上げの際、越後の一族がその日の夕方馳せ参じたのを不思議に思い義貞が問うたところ「去んぬる五日、御使ひとて、天狗山伏一人、越後の国中を一日の間に触れ回って通り候ひし……」と一武将が答えたところ。この天狗が安養寺の不動尊の化身であるとの伝説からこの名が起つた。その他に碓氷義助の供養のための板碑があり碑面に康永元(一三四二)年壬午六月五日前刑部卿源義助、生年四十二歳去とある。また境内には延享四(一七四七)年に建立されたピラミッド型に積まれた千体不動尊供養塔があり板碑と共に町指定の重要文化財となっている。寺の西を抜けて国道三五四号線に突き当たり東に折れて国道を一五〇メートル進むと北側に森下商店がある。ここを北に折れ二〇メートル行つた先で東に折れ五〇メートル先で北に向かうと石田川をわたり東武伊勢崎線にぶつかるまでほぼ北に向かって道なりである。この先は木崎十字路までだいたい直線状に鎌倉道が通っていたが宅地化により道がなくなつてしまつた。木崎十字路から西北にある木崎小学校敷地内を斜めに北西に向かい、北門から北上する狭い道から再び鎌倉街道である。一〇〇メー



鎌倉通り地内の旧道

路までだいたい直線状に鎌倉道が通っていたが宅地化により道がなくなつてしまつた。木崎十字路から西北にある木崎小学校敷地内を斜めに北西に向かい、北門から北上する狭い道から再び鎌倉街道である。一〇〇メー

III 鎌倉街道の現状と文化財



止の松



生品神社

トル程で木崎と上江田を結ぶ広い道をわたり前方に王子製鉄をのぞみながら北上する大通りを北に進む。この大通りに出るあたりの小字名を「鎌倉通り」という。大通りに入つてすぐ東側のスーパ―裏が大通寺である。天文二(一五三三)年の開山といわれるので時代が合わないが境内に新田義貞加冠の松と伝えられる松がある。松の下に義貞の歌を記した碑がある。

立遣里復毛来而製武加武里気乃
松与千歳乎我仁契良妻

また参道に文化四(一八〇七)年の道標常夜塔がある。大通寺を過ぎて王子製鉄までは大通りをたどり同工場の南西門の付近より工場敷地内をよぎり北に抜けて北々東に進んだが、こゝも耕地整理のため道が消えてしまった。王子製鉄西の道路をやや北にいった畑中に義貞旗上げの際弓を射て最も遠く

に飛んだものが当たったという「矢止め松」がある。
さて耕地整理とだえた道は反町薬師の堀の南西角から一〇〇メートル程

南下し最初の十字路を西に折れ二〇〇メートル程行った所で北から道が来るT字路がある。この道が鎌倉街道で反町城の西にある山カイト、鍛冶屋ガイトに面していた。この道を真北にたどれば旗上げの地と伝承のある生品神社であるが、明治時代の地籍図や、参謀本部図では、反町城と生品神社を結ぶ直線道は存在せず、鎌倉街道も反町薬師西北部までしか確認できない。
生品神社は太平記に「さらばやがて事の漏れ聞えぬ前に打つ立てとて、同じき五月八日(元弘三年一三三三年五月八日)の卯の刻に、生品明神の御前て旗を挙げ、繪旨をひらいて三度これを拜し、笠懸野へ打ち出でたる。」とあるものだとはいわれている。ここは国指定史跡であり境内に御旗塚、起請塚、床几塚などがある。

2 大館から新田町へ

No	名称	年号	備考
189	小角渡し		
190	大館氏館跡		
191	明王院安養寺	康永元年 延享四年	諏訪神社 脇原義助墓碑 千体不動尊供養塔 義貞加冠の松 義貞歌碑
192	大通寺		

3 徳川から境町へ(長楽寺から境町を含む)

起点は大館より新田町ルートと同じ小角渡しである。上武ゴルフ場クラブハウス西の堤防上から西北に入る。堤防を下つて早川を渡り一〇〇メートル程で十字路に出る。右側にガソリンスタンドがあるのでその正面を真北に進む。一〇〇メートル北に進むと東から道がつき当る。鎌倉街道はそのまま北に行くが、この付近は徳川氏発祥の地といわれるので脇道に入りその遺跡をみるとよい。東から入つて来た道を東へ折れると約一〇〇メートルで徳川東照宮

前に出る。ここが鎌倉時代に得川を名乗り徳川氏の祖といわれる徳川義季の館跡である。義季は新田義重の子で新田荘の五郷を有し、新田一族の武將江田氏や世良田氏は彼の息子達が祖となっている。義季は晩年宋朝に帰依し承久三（一二二一）年世良田長葉寺を建立した。東照宮の南側は縁切寺として知られる満徳寺である。得川義季の娘浄念の開山になり新田氏滅亡後一時とだえたが江戸時代初期家康の孫千姫の侍女刑部局俊澄が入院して縁切寺として認められた。

徳川集落から北々西に畑中の舗装道を辿ると、やがて世良田の集落に入る。集落に入ったあたりから道はゆるく北へカーブし真北に向かう。最初の十字路から西方向に長葉寺の山門がみえる。十字路角に文化四年の年号の入った祠がある。さらにここから北に直進し、二五〇メートルで国道三五四号線にぶつかる。東側はガソリンスタンドである。東へ折れば明王院安養寺に至



徳川東照宮



伝徳川義季の墓

り、これも鎌倉街道であるといわれる。西に折れて国道を進めば一五〇メートルで世良田十字路である。鎌倉街道はさらに西にすすむがこの十字路を一五〇メートル南下したところに長葉寺及び世良田東照宮がある。その説明を加えておきたい。長葉寺は先に述べたように得川（徳川）義季が開基となり、師宋朝を開山として開創された。顕密禪二字を兼修する独自の寺風を持ったが戦国期に衰微した。家康は天海僧正に命じて再興させ、天台宗の寺として繁栄を見ようようになる。明治初年の廃仏毀釈で多くの建物が破壊され、面積も半分に減じた。中世文書をはじめ絵画・彫刻など国指定重要文化財三件、県指定重要文化財十九件などがある。――（群馬県百科事典、上野名蹟図誌）――

東照宮は徳川家康を祭神とし、天海入寺の年寛永十八（一六四一）年東光によって創建されたという。本殿・唐門・鉄灯籠などが国指定重要文化財となっている。明治の神仏混同清禁令まで長葉寺は東照宮の別当であった。

世良田十字路から一〇〇メートル西に行った所が世良田祇園祭で知られる八坂神社、その西隣が恵源太左衛門の廟のある清泉寺である。国道をさらに西へ行くとき世良田十字路から二〇〇メートルあたり道北に中華料理店がある。鎌倉街道はこの店の西を北に折れ一五〇メートル北上し最初の十字路を西に折れて早川を渡った。中華料理店から早川までの道はかつての新田氏世良田館の敷地を迂回するものであり、現在は舗装されて路傍に総持寺がある。総持寺は新田館の坊ともいわれ大慶寺・能満寺とともに新田三談林といわれた。

総門は名工弥勒寺普次郎の作と伝えられる。寺の敷地は新田義重より義貞に至る新田氏累代の居館跡と伝えられ、往時は早川を背にして土塁、水流をめぐらす景城であったといわれる。――（歴史の道報告書、第一集）――

早川を渡りさらに西に一〇〇メートル程の所にてんぶら屋があり、やや北に北にずれた形でさらに西へ進む道が鎌倉街道である。てんぶら屋から北約二〇〇メートル程の道沿東側に源頼朝入湯伝説の女塚薬師館跡がある。ふ

III 鎌倉街道の現状と文化財

たたびてんぶら屋の所から街道を西に行くと北から来た道と合わさる所で国道三五四号線に合流する。ここから鎌倉街道は国道を斜めに横切って西に行ったが宅地化により道が消えてしまった。そこで国道を西に二〇〇メートル進み最初に南下する道を折れ一〇〇メートル弱で西側の関口理容店の前である。この店の南側を西に向かう道で再び鎌倉街道に合流する。ここから道なりに西に辿ると約三五〇メートルで北にゆるくカーブする。その二三差路に天明七(一七八七)年の年号のある例幣使街道道標がある。さらに西に進み郵便局前を通りつき当りのとりよし商店の所で南に折れ、すぐに小屋商店の所で再び西に行く。この道は境高校・境小学校の北側を通る。小学校の裏通りから一本北側の国道に面する所に例幣使街道織間本陣跡があり、現在スーパーになっている。道は小学校裏から西に進み国道三五四号線、境役場入口まで確認されている。

先的小屋商店の所から分かれるもう一本の支道がある。小屋商店から約一



伝物見の松

〇〇メートル南下し、今井商店の所で東に入る。ここから一路東進し、境町農協の東で南東方向に鎌倉街道は伸びていた。農協から早川の西北米岡の米岡神社北から東にすすみ熊野橋で早川を渡り約二〇〇メートルの集落の西端で南東に入る一問道が鎌倉街道である。二軒程家を越えたと南側に畑が広がりは農道として使われるのみの未舗装道になる。約三〇〇メートル程南東に行くとい再び舗装道に出る。ここまでが確認された鎌倉街道であるがこの舗装道は旧銅山街道でや南下した畑中に義貞の物見の松と伝えられる所があり、今は松の木は枯れてないが小さな塚の上に享保八年の庚申塔と六地藏の破片がある。またさらに南下した銅山街道の終点平塚の天人寺には義貞の戦勝祈願の伝説が残っている。

3 徳川から境町へ

No.	名称	年号	備考
193	徳川(徳川)義季館跡		徳川東照宮
194	伝、徳川義季墓		宝塔
195	満徳寺		縁切寺
196	長楽寺	承久三年開山	国指定重要文
197	世良田東照宮	寛永一八年開	
198	清泉寺	山	悪源太義平朝
199	総持寺		伝義貞居館跡
200	女塚薬師堂泉跡		頼朝入湯伝説
201	道標		旧例幣使街道
202	愛染院	天明七年	道標
203	長光寺懸仏	安永九年	呉重文
204	例幣使街道本陣跡		織間本陣、現スーパーマーケット
205	義貞物見の松		

4 角瀬から上福島・下之宮へ

玉村町角瀬地内には二つの鎌倉街道伝承がある。一つは新町から玉村に至る岩倉橋から県道藤岡・玉村線である。橋のたもとから約三〇〇メートル北に行った所に旧本陣山田家がある。さらに三〇〇メートル北上した集落の端に角瀬派出所で南東からもう一つの鎌倉街道が合流する。岩倉橋から堤防沿いに二〇〇メートル東へ行った地点で堤防に直行する形で北に向かうのがもう一つの道である。対岸は江戸時代の河岸である新町の河岸町で、地内の諏訪神社に藤ノ木道標がある。二つの街道にかこまれた形で堤防から参道ののびる角瀬八幡宮が見える。ここは建久四（一一九三）年の源頼朝が那須野の狩の後この地で休憩した。その際風景が鎌倉に似ていたので鶴岡八幡宮の分置を祭ったとの伝承が残っている。境内には室町期のものと思われる石仏や数十の庚申塔がある。また角瀬には上野国奉行人安達氏館があったとの伝承がある。



角瀬地内の東ルート

二つの道は派出署前で合流しそのまま県道を北上し約一キロメートルで滝川の錦野橋を渡る。橋の北東に玉村太郎館跡と伝えられる観照寺がある。玉村太郎は天慶年間（九三八〜九四七）のこの地方の郷士で玉村の地名は彼の名によったともいわれる。境内には文和二（一一五三）年の年号の入った板碑がある。観照寺西北のクリハラデンキ店から西に二〇〇メートル行っただけで堀をよく残した中世館跡（内田家）がある。



文和年間の板碑

鎌倉街道は県道をそのまま北上し、下新田の十字路で三つに分かれる。直進して福島に至るもの、玉村市街地を西に行き玉村八幡宮に至る旧例幣使街道ルート、同じく十字路から

東に折れ例幣使街道を東進するルートである。（国道三五四号線「例幣使街道ルート」については「歴史の道報告書」第一集に詳しい）北上する道は県道高崎・伊勢崎線まで直線状に県道をたどりT字路を東に折れた。福島橋の手前、福島橋下流で利根川を渡り上福島の南端、堤防下の道を東進し県道玉村・大胡線に至るものであった。福島橋や上流に福島の渡し跡がある。

一方例幣使街道「国道三五四号線を東進する道は下新田十字路から三〇〇メートル東の二軒茶屋集落内、萩原モータース前、原酒店北で国道から分かれ真東にすすむ。分岐点から一五〇メートル先の交差路を北上した。この四差路の東、南、西南（三角）に中世館跡をよく残す遺構（原家）があったが、現在は整地され分譲されている。四差路から北上した道は一〇〇メートル程行っただけで現在の道から離れ前方の住吉神社の参道に直行した斜め道であったが耕地整理により消失した。住吉神社の南の東西に走る道が旧鎌倉街道である。住吉神社東隣の高倉寺には珍しい円形の庚申塔がある。また住吉集落の東端にある普門寺にはこの辺りでは数の少ない双体道祖神がある。さて集落を抜けるとほぼ旧街道をなぞる形で舗装された農道が利根川河岸の下之宮まで伸びているが旧道とは多少ずれているようである。下之宮の東林寺靈廟をそのまま抜けて下之宮遺跡により伊勢崎方面へ通じていたと思えるが、伊勢崎市内では確認できなかった。東林寺靈廟の南に隣接する火雷

III 鎌倉街道の現状と文化財



住吉より下之宮への道

鎌倉街道のコースは道の推定で述べた通りである。途中の玉村八幡宮については『歴史の調査報告書』第二、第七集に詳しい。その他の見るべき文化財は見当らない。

5 宇賀から板井へ

No	名称	年号	備考
216	火雷神社		
215	普門寺		
214	金蔵寺		
213	中世館跡		
212	倒幣使街道本陣跡		
211	西光寺		
210	中世館跡	文和二年	内田家 仏像、絵画 木島本陣 原家 現在分譲 円形庚申塔 双体道祖神 上野十二社の一つ
209	観照寺		
208	角瀬八幡宮		室町期の石仏 庚申塔群 伝、玉村太郎館跡 板碑
207	角瀬渡し		
206	本陣跡		山田家

神社は上野十二社の一つで境内に道祖神などの石造物が多い。
4 角瀬から上福島・下之宮へ

5 宇賀から板井へ

No	名称	年号	備考
218	玉村八幡宮		国重文
217	宇賀渡し		

(3) 渋川・吉岡

1 吉岡村から渋川市街地へ

吉岡村に鎌倉街道と呼ばれる古い道がある。この道は、関越自動車道予定地に沿って、吉岡戸から女塚までは、道路の西側に並行し、女塚から三宮神社のある宮附近までは道路予定地内に入る。宮から先は東側に並行し、木戸から先は自動車道から離れ、吉岡川に沿って東北に向かい、杉下で佐渡奉行街道に合流する道である。

江戸時代初期に三國街道の古道である佐渡奉行街道の開通によって、幹線道路としての役割を譲ったが、今日でも鎌倉街道と呼ばれ農道として利用されている。吉岡村における鎌倉街道沿いの小字名を掲げると、吉岡戸、七日市、女塚、刃玉、道城、釈迦室、宮、宮東、十石塚、前田、久保田頭梨子、甲溝察、木戸、大女、東原、杉下である。

前橋市池端町八塚で午王頭川を渡ると、吉岡村大字大久保吉岡戸である。午王頭川の橋から道は田畑の中を一直線に北に向かう。約三〇〇メートルで字七日市である。

大久保字七日市は、鎌倉街道沿いであって、中世に市が立ち栄えた所と伝えられているが、現在は一軒の家もなく、一帯が田畑となっている。『吉岡村誌』に「一九五二（昭和二七）年から五五年にかけて、中群馬土地改良事業で桑園を水田に改良した。その折七日市では民家屋敷跡から食器などの破片

が出土したと伝えられる」とある。

大久保宿の成立について、「植野塚最初堀立御普請之事」によると慶長十一(一六〇五)年佐渡奉行街道(玉村―総社―大久保―八木原―淡川)の大久保に、三ノ宮七日市場の民家を移したと記している。

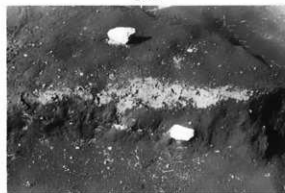


女塚 女塚付近

七日市から女塚に向かう鎌倉街道に沿って、東側に北から南に用水堀跡が残っている。これを村人は女堀メウヅリ(弁堀ヒンヅリ)と呼んでいる。現在は埋められて、周りの



女塚



大久保遺跡

田畑との段差は余りないが、女堀の遺構は認めることが出来る。開削資料が皆無という状況からみて、中世以前の用水遺構で、この吉岡村にとどまらず、この南、前橋市高井町や、総社町の二子山古墳の南にも女堀と呼ばれるところがあり、南の前橋市へ延々と続く用水遺構である。また、大久保には小字名に、甲溝祭、境堀等の用水堀に関係ありそうな地名が多く、この大土木工事を行った豪族や、開削年代、取水口を中小河川に求めたか、利根川であったか等、今後の研究に期待するところである。

七日市から広々とした田畑の中の道を北に進むと、雑木の茂る小丘がある。南面に吉岡村教育委員会の設置した標柱「史跡 女塚」が目にとまる。

この女塚は、大久保字女塚三三〇―三三一番地にある。昭和十年群馬県の古墳一斉調査による「上毛古墳総覧」によれば、駒寄村第四〇号墳で、直径一八メートル、高さ二・四メートル余りの円墳であると記されている。

この女塚古墳について「群馬郡誌」は「大字大久保清祭の南方に俗に女塚と稱する古墳あり。大窪太郎の娘某を埋葬せし所なりと伝ふ」と、佐藤元信の妻の墓と記している。また、明治十年村誌に女塚は、「本村西北ニアリ。里俗伝ヘテ大窪太郎ノ娘某ノ故地ニテ、其墳墓ト云ヘリ、今ハ凸状ノ丘埒アリ中ニ石穴ヲ見ル、平治物語ニ上野国大窪太郎ノ娘熊野参詣ノ時、故殿ノ見参ニ入り後奥州ニ下リ信夫小太夫ガ妻トナリヌ、佐藤嗣信忠信ノ母ナリ、義経之ヲ尋テ下リケル云々ト、按スルニ信夫ノ妻ノ此ニ墓アル其所伝詳ナラズト雖モ姑ク記シテ後考ヲ俟ツ」とある。

女塚から約二〇メートル程北に向かうと、大久保清祭に入る。駒寄川の橋にかかる手前に吉岡村大久保遺跡の発掘現場事務所がある。現在開削自動車道予定地のため、群馬県によって、発掘が続けられている。駒寄川の宮田貯水池を境に、南部からは住居跡が一〇基程、北部は現在発掘中であるが四〇基程の住居跡がすでに発掘され(昭和五十七年十二月現在)、その一五〇基に及ぶ住居跡の中には、石で住居を囲むもの等貴重な資料が次々と発見さ

III 鎌倉街道の現状と文化財

れている。

この大久保遺跡の南部の住居跡の上に一筋の道が現れた。この道は約七〇メートルに渡り発掘された。C軽石、浅間をふくむ黒色土の上に造られ、十一世紀の住居跡を切り込み造られた道路である。このことから発掘にあつては上原・小林指導主事は、平安時代より後の道路であろうと語っている。道路は地面を湾曲に掘り下げ、くぼみを造り、その中に砂利混りの堅い土を敷き詰めたものである。この盛土には土師片等もふくんでおり、道幅は一メートルから二メートルで、平均は一・二メートル程である。この地が鎌倉街道の伝承を語り継ぐところから、この道を鎌倉街道であろうと推定している。

鎌倉街道と呼ばれる道は、現在道路が付替られ、女塚の南約二〇〇メートル程のところから田畑となつてゐるため、現在の農道から数十メートル東の関越自動車道予定地の中含まれてしまった。三宮神社付近では東に一〇〇



三宮神社



十石塚

メートルはあろうか。

吉岡村大久保の鎮守三宮神社は、大久保宮一番地にあり、杉並木の長い参道があり、境内も広い。祭神は彦火々出見命、少彦名命、豊玉姬命の三柱であるが、復古神道の祭神名で、本殿内には本地仏の十一面観音が御身体として安置されている。

三宮神社と伊香保神社の関係について、神道集の「四十二上野国第三宮伊香保大明神事」並びに「十六者上野国九ヶ所大明神事」には、

「四十二上野国第三宮伊香保大明神事」

即伊香保ノ大明神ト者、男鉢女鉢御在、男鉢ハ伊香保ノ御湯ヲ守護、湯前ニテ御在時ハ本地薬師如来也、女鉢ハ里ノ下給テハ三宮ト申テ河内保ニ立御在、本地ハ十一面也

「十六者上野国九ヶ所大明神事」

三ノ宮伊香保ノ大明神申湯前ト崇上ル本地薬師仏也(中略)里ニ下テハ本地十一面観音也、亦大光普照観音ト申

とあり、尾崎喜左衛門博士は「北群馬・渋川の歴史」に「伊香保神社」の中で、神道集の一里(下給テ)については、三宮神社と神社附近の古墳との関係、あるいは「倭名類聚抄」からの有馬郷についての研究等から、三宮神社の十一面観音は、伊香保神の本地仏であると推定している。また、この十一面観音について、「その形は一本彫成の立像で、江戸末期に塗り替えられたと伝える極彩色である。右手は施無畏印、左手には現在御幣を持たされている。おそらく宝瓶ととりかえたものであろう。全体として丸木彫の素朴な作で、身長三尺、顔の長さ四寸五分、肩幅七寸、肩より下二尺二寸である」と記し室町時代の作であると推定している。三宮神社はこのような由緒ある古い神社である。

溝祭の三宮神社から、女塚・七日市・吉開戸・牛王頭川を渡り、前橋市池端町八塚に至る約一キロの鎌倉街道は、明治時代に至るまで、脇往還の裏道

として、渋川市方面や榛名山麓の村々から、元総社で立つ、一・六の六斉市の新市を、薪を運ぶ馬が頻りに往來したので「ボヤ街道」とも呼ばれ利用された道であった。

鎌倉街道は、三宮神社の東からは、関越自動車道予定地の東側に移り、住宅地の中を北に向かう。約三〇〇メートル程行くと、県道前橋・伊香保線と交差する。この県道を横断したところの雑木林の小丘が十石塚である。

十石塚は、大久保十石塚二九〇三の一二にあり、山林で直径二二メートル、高さ四メートルの円墳で、「上毛古墳総覧」では、駒寄村第五一号墳として掲載されている。しかし、尾崎喜左衛門博士は十石塚を古墳として認めていない。群馬郡誌では十石塚について、「大字大久保清祭の中央部県道の北傍に十石塚と稱する半円形の塚あり、里俗之を大久保太郎の古墳なりと傳ふ。」と記している。

街道は、十石塚の脇を通り、拡張された農道を約七〇〇メートル北進すると木戸の集落に入る。

北清祭りの小字名として残る木戸は、どのあたりにあったか不明であるという。この木戸の集落から耕作道で吉岡川に至る。この吉岡川に沿って約七〇〇メートル東北に向かうと、渋川市の築地前団地の南で、佐渡奉行街道に合流する。

渋川市の築地前団地の南で、鎌倉街道と佐渡奉行街道は合流したので、ここから先は、昭和五六年三月群馬県教育委員会発行の群馬県歴史の道調査報告書第七集「佐渡奉行街道」に詳しい報告があるので、古い遺跡を中心にいくつか記してみたい。

築地前団地と北は滝沢川、東は上越線に囲まれた地域が剣城の跡である。鎌倉時代に比企藤太郎が築いたと「上野名跡誌」に記されたため、今も剣城の築城は比企藤太郎が定説となっているが、明治十年村誌は「三角城墟、又剣城トモ剣ノ先トモ称ス……中略……此比企藤五郎の居ト称ス、年代詳ナラ

ス、文治中頼朝奥州ノ秦衝征伐ノ時、比企藤九郎手佐美英平次等従ヒ秦野ノ郎従田河太郎行文秋田三郎致文ヲ斬ルト東鑑ニ見エタリ、比企藤四郎能員ノ族ナルベシ、比企氏頼家ヲ翼ケテ北条氏ニ滅サレタレバ、其跡風ク煙滅セシカ、伝説モ明ラカナラズ……以下略」とあり、地元の伝説を用いれば、比企藤五郎が妥当ではなからうか。

この城跡には熊野神社が祭られていた。大ケヤキがあつて、剣城の森と呼ばれていたが、熊野神社が早尾神社に合祀されて後畑地となった。

剣城団地前の三差路には、天保四年に建てられた道しるべがある。高崎や江戸のほか、日光、善光寺、伊勢神宮、京、大坂、讃岐の金毘羅宮までの里程が刻まれている。三差路に三角錐の自然石を用い旅人を楽しませている。道しるべを過ぎると滝沢川である。橋を渡り八木原宿に入る。

下宿の中ほど西側に長原寺の入口があり、西へ一〇〇メートル程で長原寺である。子持村土白井の空恵寺末寺で臨済宗の寺である。開基は八木原伊勢守と伝えられているが創立年月は明らかでない。

宿の中央で県道八木原停車場・小倉線と交差する信号にでる。この附近が八木原宿の中心で、一・六の六斉市が定期的に立つたという。

信号を左折し、西へ二〇〇メートル程で、渋川市立古巻小学校がある。ここが戦国時代に八木原伊勢守が居城した、八木原城の跡であるという。

佐渡奉行街道は信号を直進する道で、四〇〇メートルで八木原の鎮守諏訪神社の入口があり、有馬への旧道を行くと境内である。神社は天正八（一五八〇）年に信州の諏訪大明神を勧請したと伝えられ、入口の鳥居は、元禄十五年六月に惣村中で建立したものである。諏訪神社の南に清泰寺がある。清泰寺は、明治十年村誌に「清泰寺、東西七八間南北五間面積五〇八坪、村

ノ中央ニアリ天台宗ニシテ本郡滝川駅真光寺末流、創建年曆詳ナラス、開基僧重順或ハ云、享祿二年創立」と記されている。

八木原の宿を出ると三差路となる。左折して北西に向かうと四〇〇メー



文安の薬師 石堂の彫刻



真下塚



早尾神社の大ケヤキ

ル程で午王川に出る。芝附橋を渡り、上越線の踏切を越えると南部幹線道路に出る。ここは有馬の糸里跡が残る地域で、南部幹線道路建設に先がけ、渋川市教育委

員会が発掘調査を実施した。遺跡からは多くの住居跡にともなう出土品と合せて、ミニ区画水田が発掘され、当時の農耕資料として貴重な発掘であった。

南部幹線道路の交差点から水田の中を五〇〇メートル進むと茂沢川であ

る。茂沢川を渡り五〇メートル程で中村の集落の中の西側に、天台宗の延命寺がある。

この境内には、文安二(一四四五)年四月八日、心仙によって造立された薬師の石堂があり、「文安の薬師」と呼んでいる。石質は安山岩で、高さ一二〇センチ程あり、四面に二体ずつ八体の仏像と、その間に華瓶が彫彫され、内部には薬師如来を安置している石堂である。向拝は元禄三(一六九〇)年に石原村の大島四郎兵衛尉信包が奉納している。昭和三十年代迄は、村人の厚い信仰を集めていた。

延命寺から北へ中村の集落中央を四〇〇メートル程行くと早尾神社の横に出る。早尾神社は中村の鎮守で、天明三年の浅間押しで流失をまぬかれた数少ない建物である。本殿は正徳年間の建築である。境内には、根元廻り一〇・六メートル、目通り七・三メートル、高さ二一・二メートルの大ケヤキがあり、県指定の天然記念物である。近年になって樹勢がおとろえ大きな枝が枯れはじめている。

早尾神社を過ぎると国道一七号線に出る。国道を横切って二〇〇メートルで渋川駅に至る。旧道は渋川駅構内を斜めに横切り、日本通運渋川支店裏から三〇〇メートル程で平沢川の庚申橋である。

八木原の宿を出て直進するコースをたどると、街道は東に向かい上越線を越えたと午王川である。榎田橋を渡り、水田の中を北へ向かうと南部幹線道路の交差点に出る。信号を直進し、茂沢川の蜂鳥橋を渡ると道幅は二・三メートルの農道となる。蜂鳥橋から三〇〇メートル程行くと、西側約一〇〇メートルの水田の中に、こんもりとした墓地が見える。真下塚である。

真下塚は、群馬郡誌に阿弥陀塚として「大字中村の南部畑中にある古墳にして真下塚ともいふ。同村真下家墳墓の地なり、其の面積三十餘坪悉く数萬の五輪を以て岡をなす。故に此の所を字岡前といふ、二本の老杉ありしが一本は挫折し今はその一つを残すのみ、幹の周囲十数尺ありて數百年経たるも

のならん、里人之を振袖杉ともいふ。岡の中央に石堂あり、苔むし許ならざるも天正三年十月十五日と微かに讀み得べし、毎年十月十五日興下一家の者靈祭を行へり」と記しているが、現在関越自動車道予定地のため、阿弥陀の石堂等は移転の予定である。石堂は幅六センチ、高さ一〇六センチあり、銘文は判読しにくく、郡誌では天正三（一五七五）年と読んでいるが、正保三（一六四六）年であろう。また、五輪塔も数万とあるが、数十基であろうか。

榎田橋から一・二キロ程水田の中の狭い道を進むと、中村富作において国道一七号線に出る。この国道の手前東側で関越自動車道の中村遺跡発掘調査が行なわれ、地下三メートルから、天明三（一七八三）年七月八日の浅間山噴火による泥流によって埋没した田畑が出現した。泥流に押し倒れた大豆は、背々とした姿で表れ、畔には桑が植えられている。また、埋没の田畑の中に一筋の道路も現れ、昔時の佐渡奉行街道ではなからうかともいわれ、現在も発掘が続いている。

中村富作で国道一七号線を横切り東側に出て、河岸段丘の下段を六〇〇メートル北に向かうと大崎に出る。大崎の住宅地を通り、渡川駅東で先の街道に合流する。

1 吉岡村から渡川市街地へ

No	名称	年号	備考
219	女塚		用水遺構
220	大久保遺跡		古墳
221	三宮神社		住居跡 街道
222	十石塚		古墳
223	剣城跡		半田筑後寺
224	道しるべ	天保 四年	渡川市指定文化財
225	長原寺		臨濟宗

227	八木原城跡	天正 八年	八木原伊勢守
228	諏訪神社		鳥居元禄十五年
229	清泰寺		天台宗
230	有馬桑遺跡		小区圃水田
231	延命寺		天台宗
232	文安の薬師	文安 二年	渡川市指定文化財
233	早尾神社		本殿正徳年間
234	早尾神社の大ケヤキ		県指定天然記念物
235	真下塚	正保 三年	阿弥陀如来石堂
236	中村遺跡		浅間泥流下の大豆桑

2 渡川市街地から南牧村へ

渡川市坂下町に鎌倉街道があったという伝承がある。明治四十三年編さんの「渡川町郷土史草案」月蔵院の沿革に「慶長八年当町々割ノ際、旧鎌倉街道添（当時字坂下）ナル境内地ヲ現境内（字寄居 二交換移転ス）と記されている。

月蔵院は、現在渡川市二四五番地（寄居町）にあり、坊舎は、月蔵院の末裔柴田家の住いに、不動明王を本尊とする本殿（間口三間、奥行三間半）は、昭和二十年七面山妙法寺に寄贈されている。

月蔵院は駒形神社の別当であつて、慶長十二（一六〇五）年には聖護院より下記免状が与えられている。

金襴地結袷之事、被免許之由依、聖護院御門跡御気色、執達如件

慶長拾年九月廿四日

法 眼 花押

上州渡川月蔵院

この時代の月蔵院は、寛永十三（一六三六）年入寂の権大僧都法印行春である。行春については、国道十七号線沿いの日本精密測器株式会社の本社屋

III 鎌倉街道の現状と文化財



月蔵院跡

の北に、大きな浅間石がある。この浅間石の上に大日如來の石像が安置されており、背面に
寛永二乙丑歲二月日 年行事元
祖 本山修驗流 行春建立
蓮華台には

時天明四甲辰年再建 駒形山
桐慶建立

天明三年七月八日の浅間泥流によつて流失した大日如來の再建が記されている。年行事元祖とあるが、月蔵院は宝曆十二(一七六〇)年に年行事の格式になつた天台修驗である。

この月蔵院の元の屋敷跡が、坂下町の渋川市立第二幼稚園の東北角から北方向に五〇メートル程行つた住宅街の中の畑に、小さな土盛がある。ここに「正一位駒形大明神」の石塔と、石祠が祠られている。この石祠のある畑が屋敷跡といわれ、鎌倉街道沿いにあつたと伝えられている。土盛のある畑の北は国道一七号線が接しており、国道の北は、五〇メートル程で吾妻川の提防である。この提防の対岸に白井城の本丸跡があり、約八〇〇メートルの距離である。

この月蔵院跡付近は吾妻川に近く、天明三年の浅間焼による泥流被害や、明治四十三年の大洪水等度々の洪水に見舞れた。屋敷の存在した時期も慶長八(一六〇三)年以前とあり、道路を推定することは困難であるが、鎌倉街道と呼ばれる道が、西北一キロ程の金井にあり、阿久津集落を通過する古い道と呼べ、下金井の地まで推定してみたい。

月蔵院跡から西北五〇〇メートル程の阿久津八坂神社までは、国鉄吾妻線

の軌道の土盛や、国道一七号線バイパスの開道、東京電力阿久津発電所の建設等で附近の農地は分断され、昔のおもかげを失つて推定は困難である。

この間の遺跡は、月蔵院跡から吾妻川沿一〇〇メートル程のところに坂下古墳群がある。この古墳群は、昭和三十六年下水処理場の設置に際し発見され、このうち堅穴式古墳六基の発掘調査が実施されている。六基の古墳は、川原石を寄せ集め積み上げた、長方形に近い階円形であり、一基が方墳である。この方墳は高さ〇・五メートル程の墳丘らしいものをもつ古墳であつたが、他の五基は、長さ二・五メートル、幅一・五メートル程の長方形に小礎でかためたものである。

阿久津発電所を横ぎると阿久津に入る。

阿久津は、近世後半は徳川家の直參旗本、保々家の知行地で二一〇名余りの小さな村であつた。百姓数は三〇軒を前後し、人口は一〇〇名から一五〇人の範囲で、一五〇年余りを経過している。村役人の名主には、村の全戸数の約半分、十三戸が交代で務めており、幕末には貧農の為夜逃までした名主もおり、帳簿を失い年貢の割付に苦労したこともあつた。特に天明三年七月八日の浅間押しでは、吾妻川沿いの村として大被害を受けた。

発電所の北側の道吾妻川の提防から一〇〇メートル程西に八坂神社がある。この附近を古い道が通つていたようである。明治十年村誌には「八坂神」として境内四五坪が記されている。社は基礎石の上に高さ〇・八メートル程の石祠である。風化が激しく遺立銘があるが、寛永二十年三月、吉沢石衛門であろうか、屋根には鬼面を刻む石祠である。境内には目通り三メートル程あろうか、桜の古木が石祠の両脇に植られ、正面の鳥居には「午頭天王宮」とある。

発電所から一五〇メートル程のところに、公民館阿久津分館がある。分館に沿う南側の道から神明宮の方へ北に向かう市道が古い道であるという。こ



八坂神社 (午原天王宮)



神明宮

の分館は阿久津の鎮守神明宮の境内に建てられた。この神社の境内には大杉があったので、村人は神明様の森と呼んだ。明治十年村誌に「神明宮、村社々地東西十四間、南北八間五尺面積百四十二坪、村中央ニアリ祭神天照大御神、祭日九月十九日創立天正以前二係ルト伝説スレ共旧記不詳」とある。この他境内には諏訪神社等が台祀されている。

阿久津分館の前から北へ七〇メートル程で国道十七号線に出る。ここにスーパー丸善の阿久津店があり、この前の信号で国道を渡り、市道を西に行くと五〇メートル程で四つ辻に出る。直進する道は、市立北中学校前を通り、県道渋川・原町線に至る。鎌倉街道には右折して北に向かう。三〇〇メートル程行ったところからゆるいカーブで西方に進むと約二〇〇メートルで、金井発電所から阿久津発電所への送水路と交差する橋を渡り、水路と並行する国鉄吾妻線の踏切を越えると、鎌倉街道と伝承される道路に出る。渋川扇状地の段丘に並行して西北西から東南東に走る道路である。

で賑わう。薬師堂の中には、寛文十(一六七〇)年三月に岸半兵衛が建立した二メートル余りの立派な石堂がある。この薬師堂前の墓地には勝田姓を刻む立派な墓石が並んでいる。

鎌倉街道との交差地点から南へ三〇メートル程で、渋川市金井浄水場入口がある。ここから西へ二〇〇メートルで金井浄水場に至る。この浄水場建設



鎌倉街道金井虚空蔵付近

送水路や吾妻線の踏切を越える手前の農道を右折し、北へ一五〇メートル程のところにカッケ薬師がある。下金井の薬師は、脚氣薬師として知られ、祭日には多くの参詣者



製鉄遺跡包蔵地付近



虚空蔵の五輪塔

III 鎌倉街道の現状と文化財

工事で金井製鉄遺跡は発掘され、浄水場の西側に保存されている。

金井製鉄遺跡は、昭和五十年九月五日群馬県指定史跡となった。金井寺発京、虚空蔵の東傾急斜面には非常に多くの鉄滓が散在する。江戸期の絵図に「此川戸神ヨリ流出、其処并吾妻川ニ落込、金井元金鑄ト云ウ、文字ヲ改備後堀ナリ」と記され、この地が良質の砂鉄を産し、地名にも「鉄津」や「明珍分」という所があり、甲冑師として名高い、明珍家にゆかりある地名も見える。

この遺跡は、九世紀末と推定され扇状地の東斜面に高さ六〇センチほど石垣を積み、石垣から四〇センチ程奥に粘土で築かれている。形は隅丸長方形で規模は長径九〇センチ、短径五五センチで、高さ五五、四〇センチである。炉の底は十五度に傾斜し東側から送風され、炭がまも数基発見されていることから職業集団の存在も推測できる。

交差地点から鎌倉街道を北に向かい、一五〇メートル程行くと、道に沿う西側のコンニャク畑の中に一本の桐の木が見える。街道から三〇メートル位であろうか、この辺りは金井字虚空蔵という、この桐の根元に三基の五輪塔がある。地輪は埋っているが、大きさは火輪の幅が四三センチ程あり、総高は一、二〇、一三〇センチが推定できる。鎌倉末期の五輪塔である。

五輪塔から北に一〇〇メートル程行くと、道沿いに字名にもなっている虚空蔵を祭る板の茂る丘がある。この丘の中央に貞享四（一六八七）年十月、松村氏によって造立された虚空蔵菩薩を祭る大きな石堂がある。傍らには承応三（一六五四）年の墓石もあり、この地が虚空蔵の森と云われた淋しい場所であったという。

虚空蔵から西に御袋山を望む段丘に送電線の鉄塔が見える。ここが金井字送川の寄居台（よりんでい）と呼ばれる所である。河岸段丘を逆川と深沢という二つの小河川が流れ、この間に築かれた城跡が金井寄居である。

金井寄居は本郭の長さ一八〇メートル、幅七五メートルで逆川から九メー



虚空蔵菩薩石堂

トル、深沢から四メートル程の高低差がある。県道渋川・原町線から八〇メートル入った所に外堀切り、更に七〇メートル入ったところに内堀切りがある。渋川市石原手川の大局系図の大島式部の項に、

「信忠者為信弘妹之子則辨也当国金井城主神谷紀伊守長男千喜良越後守二男信弘依無男子養之与娘妻寛永廿癸未十月廿六日不禄于時六十二歳」以下略」とあり、金井寄居の唯一の記録であるが、金井地侍の居城であったことがうかがえる。

虚空蔵から逆川を渡り三差路に出る。今迄は国鉄吾妻線に並行して西側の街道を北に向かつて来た。この三差路を西に向かうと金井本町で県道渋川・原町線に至る。道を東にとって吾妻線の踏切を越えすく左折し、吾妻線の東側に並行する農道がある。この道も鎌倉街道の名残で、この農道を二〇〇メートル程で南西から北東に走る農道と交差する。ここで再び吾妻線の西側に出る。ここから金井の鎮守八坂神社の方向に畑の中を一直線に走る農道が鎌倉街道であった。しかし土地改良による耕地整理が実施され、整然と区画された田畑となり、道も付け替えられ昔時の姿はない。

八坂神社の東方に広がる畑の中に一本の榎が見られる。ここが鎌倉街道沿いの薬師堂の百庚申である。かつて耕地整理が実施される以前は、多数の五輪塔や庚申塔が建ち並んでいたが、他の場所に移された。現在は榎の根元に天保九年五月造立の文字碑の庚申塔と五輪塔一基、宝篋印塔一基が昔の姿をとどめている。

金井金藏寺墓地にある、群馬県指定史跡の宝篋印塔は、金井宿の宿割の頃、
にこの薬師堂の地より移したという。宝篋印塔は鎌倉時代末期の様式を持ち、
基礎、中台、塔身、屋蓋、相輪を重ねた高さ一五〇センチの塔で、石質は安
山岩である。特に基礎と塔身との間に中台を設けた形式は、宝篋印塔の中で
関東型式の変形として、埼玉、群馬に多くみられ、本市においても石原の宝
篋印塔や、上郷の応永の宝篋印塔にみられる。この塔は銘文により、康永二
(一三四三)年十月に、源義季(秀)の供養のため建立したもので、仏師は
藤原光吉とある。



薬師堂の百庚申



薬師堂天王畑五輪塔

高一二五センチあり、他の一基はや
や小さいが、ともに
鎌倉末期と推定され
る五輪塔である。こ
の五輪塔は現在耕地
整理によって、金井
宿下之町の都丸富五
郎氏の屋敷稲荷の地
に移されている。五輪
塔のある畑は、地味が
こえている土地として、
貴重がられたという。
現在農道は国鉄吾妻
線に並行して舗装道路
が縦横に走り、この天
王畑の五輪塔のあつた

位置も定かでない、この西に八坂神社がある。

八坂神社は、金井の鎮守で金井一帯地の天王平にあり、午頭天王を祀る。
群馬県誌によると「長尾左衛門尉清景が観応二年に創立したもので、天正
年間長尾家没落後部民の鎮守として厚く信仰せる所となり」と記されている。
社殿は嘉永六(一八五三)年の大火で焼失し、現在の社殿は再建されたもの
である。境内には合祀された神社や、三基の双体道祖神がある。

八坂神社がある集落の東の道を北に向かい四〇〇メートル程で三葉路とな
る。西に坂道を上ると、金井宿本陣跡で現在児童公園の西側に出て、県道茨
川・原町線(旧三国街道)の金井中之町に至る。街道は北に坂道を下り、吾
妻線の踏切に向かうと、東方の畑の中に杉の木立が見える。天王岸の堂場の
墓地である。

金井宿本陣の岸忠左衛門家等、天王岸一族の墓地で、先祖墓は明暦四(一
六五八)年の石堂であるが、右脇に屋根に鬼面を彫った石堂の墓石が二基あ
り、また、墓地内には五輪塔の空風輪や火輪も見られ、古い墓地を思わせる。
天明三(一七八三)年九月六日に歿した岸積保は豊後守と称した宮大工で、
妙義神社の楼門等を造り名高い。供養塔の宝篋印塔の銘文は、洗川郷子の祖
吉田芝溪が書いている。

吾妻線の踏切を越えてまもなく南牧の共同墓地がある。墓地の手前で左折
し、吾妻線に並行し東側の道を直進すると七〇メートル程で南牧の全ヶ橋
関所跡である。この区間は、吾妻線の建設工事や、東京電力金井発電所の建
設工事で鎌倉街道は付け替えられたことが考えられる。

全ヶ橋関所跡は、関係資料と共に昭和二十六年群馬県指定史跡となった。
三国街道が吾妻川を渡る所に設置された川の関所である。元和年間に番所が
置かれ、寛永二十(一六四三)年関所に改められた。元禄年間まで安中藩が
以後は高崎藩が預り、目付一、与力二が二か月交代で勤務し、土地の人で世
襲の定番三長谷川、田中、砥柄の三氏、門番二と共に守備した。この街道

III 鎌倉街道の現状と文化財

は、佐渡、新潟の両奉行や越後の長岡、村松藩等の大名が往来した。李ヶ関は横川関所について重要視され、享和三（一八〇三）年十月三日、伊能忠敬が横川の関同様、李の関門外の測量を申し出たが、御要害を理由に測量を認めなかった。また、吾妻、利根郡の通船もこの関所のため幕末の嘉永年間まで許さず、両郡からの御用材の筏による川下りも、困いの内は渋川、金井両村の筏乗りと交代して通行した敷しい関所であった。

李ヶ関所から吾妻線の踏切を越えた反対側の砥柄家の庭に、昭和三十三年三月発掘された十五基程の五輪塔がある。地下五〇センチのところから発掘され、この中には水輪を欠くが、地輪幅六二センチ、高さ四二センチ、火輪幅六〇センチ、高さ四〇センチ、空風輪高さ三八センチあり、水輪を除いても一〇センチもあり、かなり大きな五輪塔である。この五輪塔の多くは室町中期のものと推定される。

五輪塔の発掘された西上に、十二社がある。段丘の傾斜地を整地し境内と



天王岸堂場の墓地



南牧の五輪塔

No	名称	年号	備考
237	月蔵院跡	天明四年	石塔正一位駒形明神
238	大日如来	寛永二十年	寛永二十年大日如来再建
239	坂下古墳群	寛永二十年	竪穴式古墳
240	午頭天王宮	寛文十年	鬼面を刻む
241	神明宮		諏訪神社等合祀
242	下金井薬師		脚気薬師
243	金井製鉄遺跡		県指定史跡
244	五輪塔	貞享四年	三基 鎌倉末期
245	虚空蔵菩薩石堂		城跡神谷紀伊守
246	金井寄居跡		県指定史跡
247	宝篋印塔		宝篋印塔のあったところという
248	庚申塔	天保九年	金井金蔵寺境内県指定史跡金井
249	五輪塔		二基 鎌倉末期
250	八坂神社		双体道祖神三基
251	天王岸の堂場墓地		宮大工岸豊後守
252	李ヶ関所跡	寛永二十年	
253	五輪塔	室町中期	昭和三十七年発掘
254	十二社		双体道祖神寛保二年

2 渋川市街地から南牧村へ

したため、明治十年村誌によると境内は二十八坪と狭いが、南牧の鎮守である。創立や由緒は詳らかでない。境内には寛保一（一七四二）年三月建立の双体道祖神等がある。

旧三国街道は、鎌倉街道と並行してほぼ五〇メートル西を通っており、金井宿の上、中、下の三町、三〇〇間の宿を出ると金蔵寺があり、この先二〇〇メートル程で、坂道を下り李ヶ関所の西で鎌倉街道と合流している。李ヶ関所の対岸子持村では、鎌倉街道の伝承は残っていないようである。

あとがき

群馬県歴史の道調査は、昭和五十三年度より五か年計画で実施され、本年度の調査はその最終年度であり、ここに、全十七集の報告書を計画どおり発刊するはこびとなった。

調査開始当初、調査方法も定まらず探索の内に始められたが、課内の内容検討あるいは調査員の方々の意見等も取入れ、群馬県としての歴史の道報告書を編集できたと考えている。

最終年度である今年度の調査は、鎌倉街道・東山道と、これまでの近世の街道と異なる中世以前の道を調査対象としたため、これまでの調査方法では十分でなく、伝承あるいは地積図を基に、現在調査を実施するという調査方法をとらざるを得なかった。その上、鎌倉街道・東山道とも街道そのものの距離が長く、特に鎌倉街道は県内全域に伝承が分布し、各五名ずつの調査員では、県全域を調査するには手が及ばず、県南中心の調査にとどまってしまう。また、文献調査等も十分出来なかったのは残念であった。しかし、これまで鎌倉街道についての調査は、各地域の個々の調査であり、県全域を対象とした調査は本調査が最初と思われる。今後、この調査を基にさらに各地で詳細な調査がなされることを期待したい。

また、東山道については伝承も少なく調査員間でも推定路線の分かれる所もみられたが、地積図等で路線を推定し、それに基づき現地調査を実施し、より確かな推定路線を設定した。さらに、東山道は時代的にも変化していったものと思われ、官道以前、作道したもの、中世にはいつてからの東山道と三時代に大別して、それぞれのルートを推定し記述した。しかし、これらはいくまでも推定ルートであり、確定したルートではない。今後の研究により、

さらに確実なルートが設定できれば幸いである。

これまでの調査で最も調査の手が行届かなかった吾妻の諸街道については、当初計画した範囲、ルートよりさらに拡大し、しかも旧道がほとんど廃道同様の山道であり、そのため、調査員の方々は沢の様な廃道を地道に調査され、多大の苦勞をおかけした。現在道と並行する旧道を詳細に明らかにすることができ、さらに、これまで未調査であった多くの文化財も記録できたことは一つの成果であった。

日光の脇往還については、すでに日光への主要街道は調査済みであり、今回の調査はいわばその支道的なものであった。そのため、調査対象は大きく三街道に分かれ、その調整に苦勞した。特に根利道は、県内でも豪雪地帯の一つに挙げられる地域で調査も容易ではなかった。この道は近世においては利根郡と東毛を結ぶ重要な交通路であったが、現在は道幅も狭く、悪路の連続で交通量もわずかである。近世の街道は、現在の道よりさらに高所にわずかに道形を残すのみで、これまで未調査の街道であり、今回調査できたことは幸いであった。

以上の様に、それぞれ街道の性質も相違し困難点も異なっていたが、調査員のご努力により、それらの困難点の一つずつ克服し、各街道ともある程度明確にでき、それぞれの報告書にその成果をもち込めたと考えている。

本年度の調査で、群馬県歴史の道調査は完了するが、その成果を十七集の報告書に収録し、それぞれの街道の保存状況、文化財の存在、街道の特色等記録保存することができ、当初の調査の目的を達することができた。これも調査に携さわっていただいた多くの調査員の方々、また、調査に協力いただいた方々、さらに各市町村教育委員会の御陰であり、改めて感謝を申し上げます。今後、この歴史の道調査が、ただ単に調査のみに終わらにとどまらず、歴史の道整備の基礎資料として各地で活用していただきたいと考えている。

鎌倉街道

印刷 昭和58年3月25日

発行 昭和58年3月31日

発行 群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町一丁目1の1

☎ 0272-23-1111

編集 群馬県教育委員会文化財保護課

印刷 朝日印刷工業株式会社
